女鑑

第十三年

第十八號

毎月二回十一日十五日發兌（明治二十四年八月八日創刊）
（明治二十五年三月十二日第三種郵便物認可）

女鑑　第拾參年 第拾八號　目次

○本號に限り　定價金拾五錢

定價
- 一册　金拾錢
- 六册三ヶ月分　前金五拾七錢
- 十二册半年分　前金壹圓拾錢
- 廿四册一年分　前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料
- 五號活字廿三字詰一行　金三拾錢
- 半頁　金八圓
- 一頁　金拾貳圓
- 表紙一頁　金拾六圓

（色刷は特に御相談に應す）

明治三十六年九月十四日印刷
明治三十六年九月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊案一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

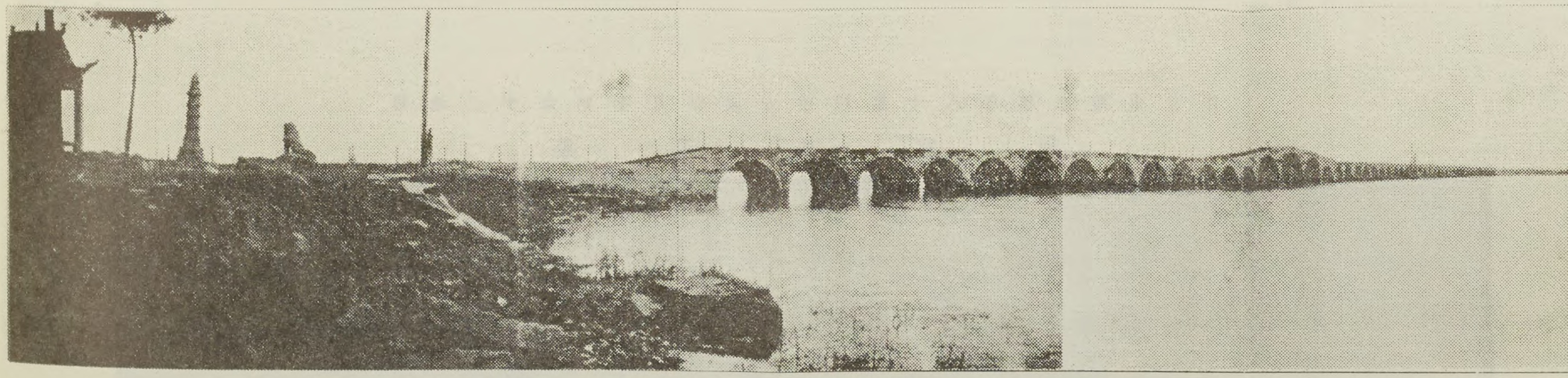
御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

明治三十六年七月華族女學校第十八學年卒業生合作

果禾豊登圖



山本きよ子
長田絹子
石川その子
安井藤に子
鈴木操子
毛利すみ子
島田梅子
川田鈴子
堀江登志子
岩原慶子
本尾芳子
吉川聖子
四條孝子
阿部織羽子
中田とみ子
小坂春子
久利靜子
佐々木康子
坂田清子
桑原きみ子
庭田姶子
池田吟子
岩崎なみ子



清國蘇州寶大橋

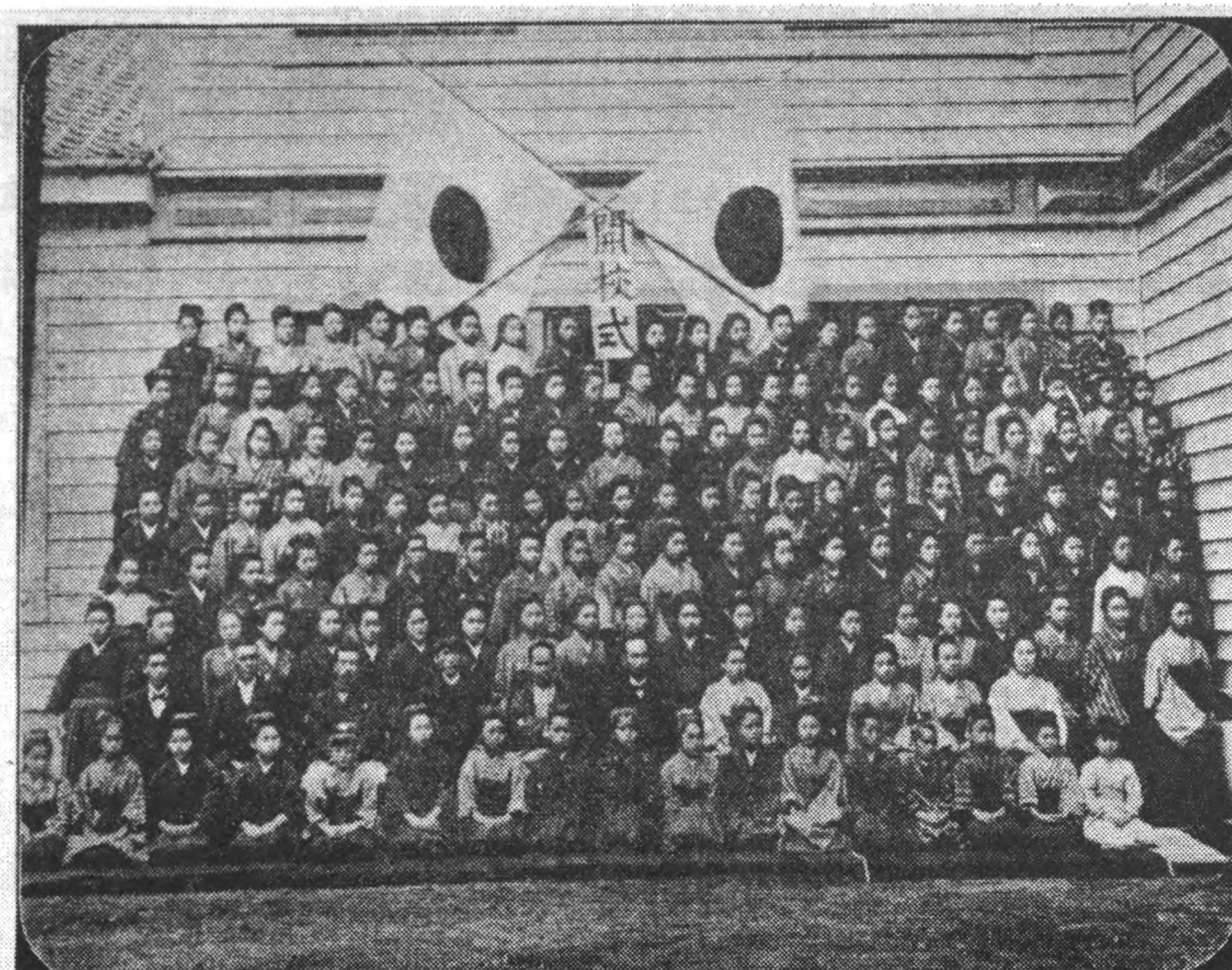


（絹絲紡製造場）

（稅關）　蘇州城及雑居留地全景　（支那ジヤンク）



華族女學校第十八學年卒業生



鹿兒島高等女學校開校式

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

傳染病研究所

養生園

東京病院其他各病院御用

アルボース案内

◎**消毒** 傳染病豫防にはアルボースを種々に用ひよ是完全の消毒也

◎**防臭** 便所便器不潔の場所等へアルボースを撒け能く惡臭を止む

◎**洗濯** 衣服を洗ふにアルボースを用ひよ蚤虱等の蟲のたかるを防ぐ

◎**入浴** アルボース石鹼を入浴の時用ひよアセボニキビ等を治す

◎**頭髮** 禿頭病を患ふる者はアルボースにて洗へ毛の拔けるを防ぐ

◎**毒蟲** 蚤蚊蜂等に刺されたる時はアルボースを付けよ痛痒を止む

◎**植物** アルボースは蟲を殺す効あれば植物の害蟲を除くに用ひよ

◎**疵所** 突疵切疵等はアルボースにて洗へ一時しみるとも早く癒ゆ

定價●原液一斤入金三十五錢●通常液一斤入金十三錢同二斤入金二十錢、同卅五斤入金二圓●石鹼大形金十三錢、同小形金八錢

東京深川區東扇橋町五番地

扇橋製藥株式會社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

高等化粧水 ワイテルミン



皮膚を美麗滑澤ならしむるのみならず(にきび、そばかす)顔の小じは等の生ずる事なく又白粉下として使用すれば生鉛製白粉と雖も中毒を起す事更になし

定價一本 金二十五錢
三個箱入 金七十五錢

●洗浴化粧(エリノイン 花のつゆ) 一瓶 金八十錢

本品は高尚なる芳香藥及び軟和劑の配伍しあれば朝夕の洗面及び洗浴に際し此液をたらし用ゆれば如何なる水と雖も皮膚肌を損する患なく色を白くし殺菌消毒の効有る衛生上必要の逸品なり

●ふけ取香水(フケリン 花たちばな) 一本 金六十錢

本品は芳香優美にして剛き毛を柔らかく櫛列を正し毛髪の汚れを淨め長く清潔に香氣を保持し光澤絶美を損せず且清涼の感を生ぜしめフケ等の生ずる憂なし世の衛生を重ずる諸彦よ速に御試用の上頭髪の營養を保たれんことを

●うがひ水(エチナン しのゝめ) 一本 金三十錢

本品は佳快的芳香を有し久しく口内を爽快にし歯牙及口腔粘膜を强壯にして其疾病を豫防するの効あり夫れ口腔は人體の關門なれば衛生を重ずる諸彦一瓶を試み吾人天與の健康を全せられよ

此の外内外高等化粧品種々取揃へ有之候間御好需願上候◉
取次販賣は全國有名化粧品小間物店賣藥店等に差出し有之候

東京新橋出雲町角(電話新橋三二四)

福原資生堂

月經閉止忽ち
下る確證藥

月經調節

調經丸

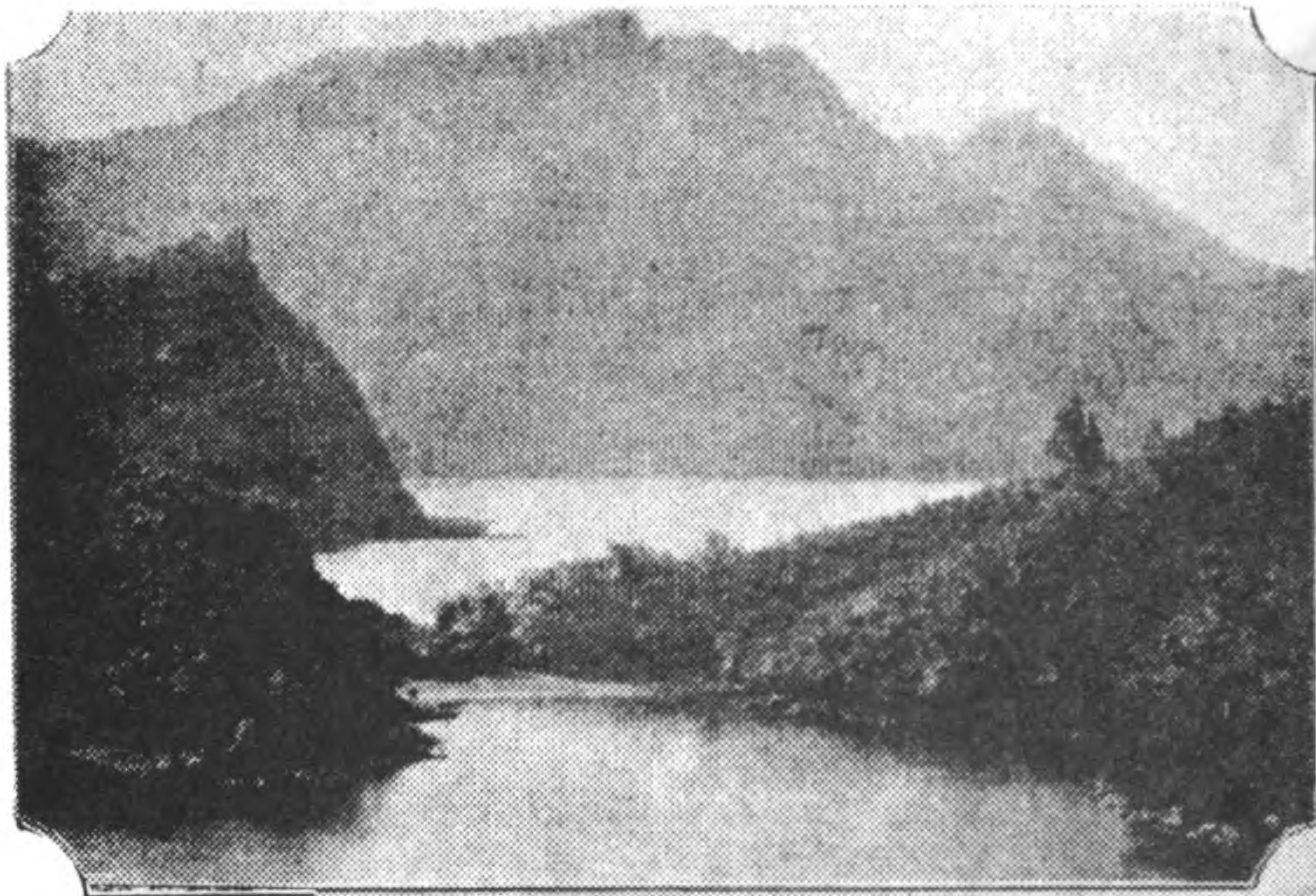
有効無害補血强壯婦人病の藥王也月經の閉止を開き不順を調整し婦人の厄難を未發に豫防し病根を拂ふ通經唯一の特効あり服用上不審の節は詳細容體書と本劑需用を證す封紙の一部を切取添郵券三錢本支店に照會あれば其適否効能有無の理由を懇篤説明回答す◎藥價七日分五十錢特別箱入二週分壹圓三週分壹圓四拾錢特殊卅日分貳圓外郵税拾錢郵券代用一割增◎需用者便宜の爲め特約受賣御望は劃能き商談可仕候

本舗 東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
山崎薫効堂●東京支店

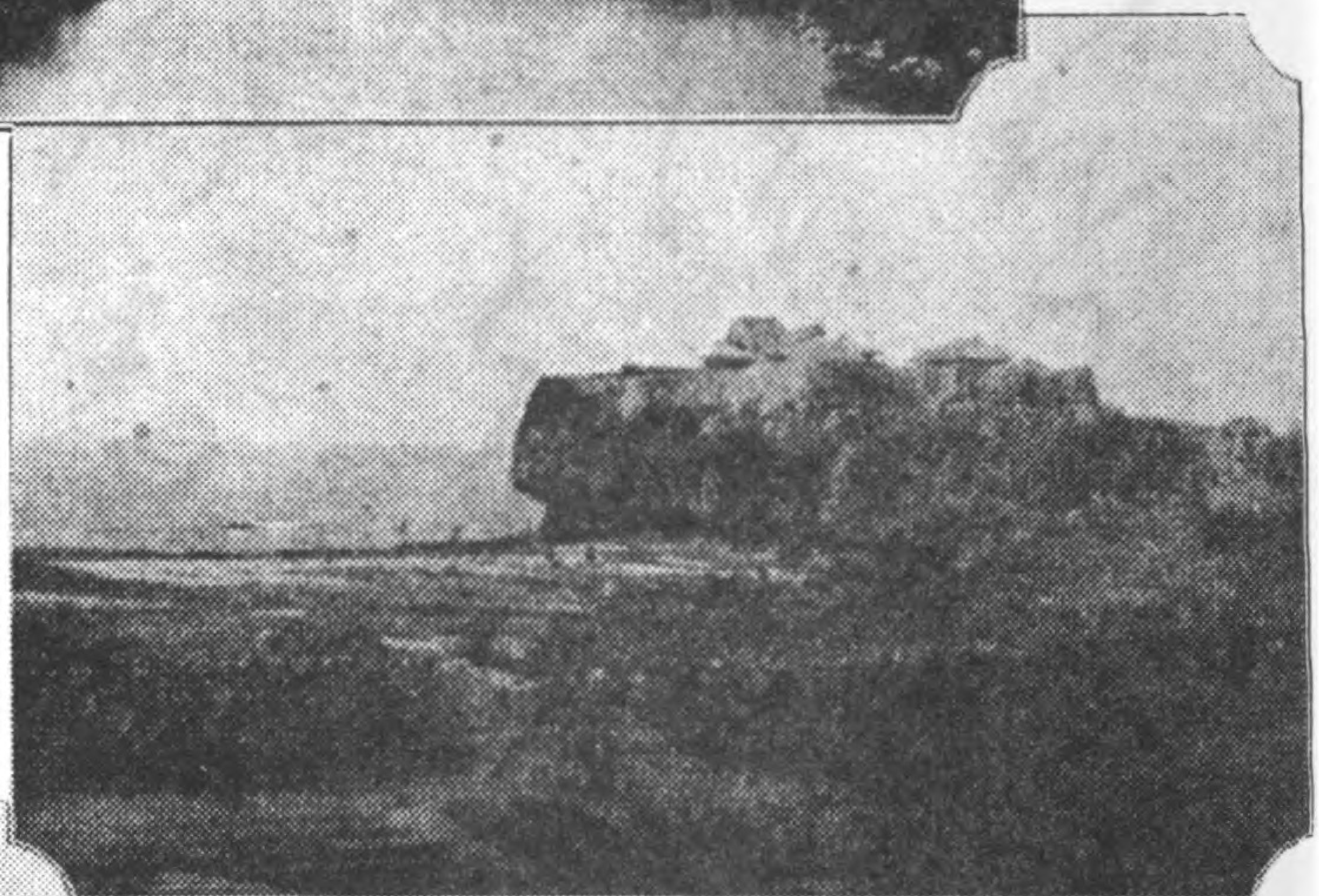


富士登山の女子　(雑録参照)

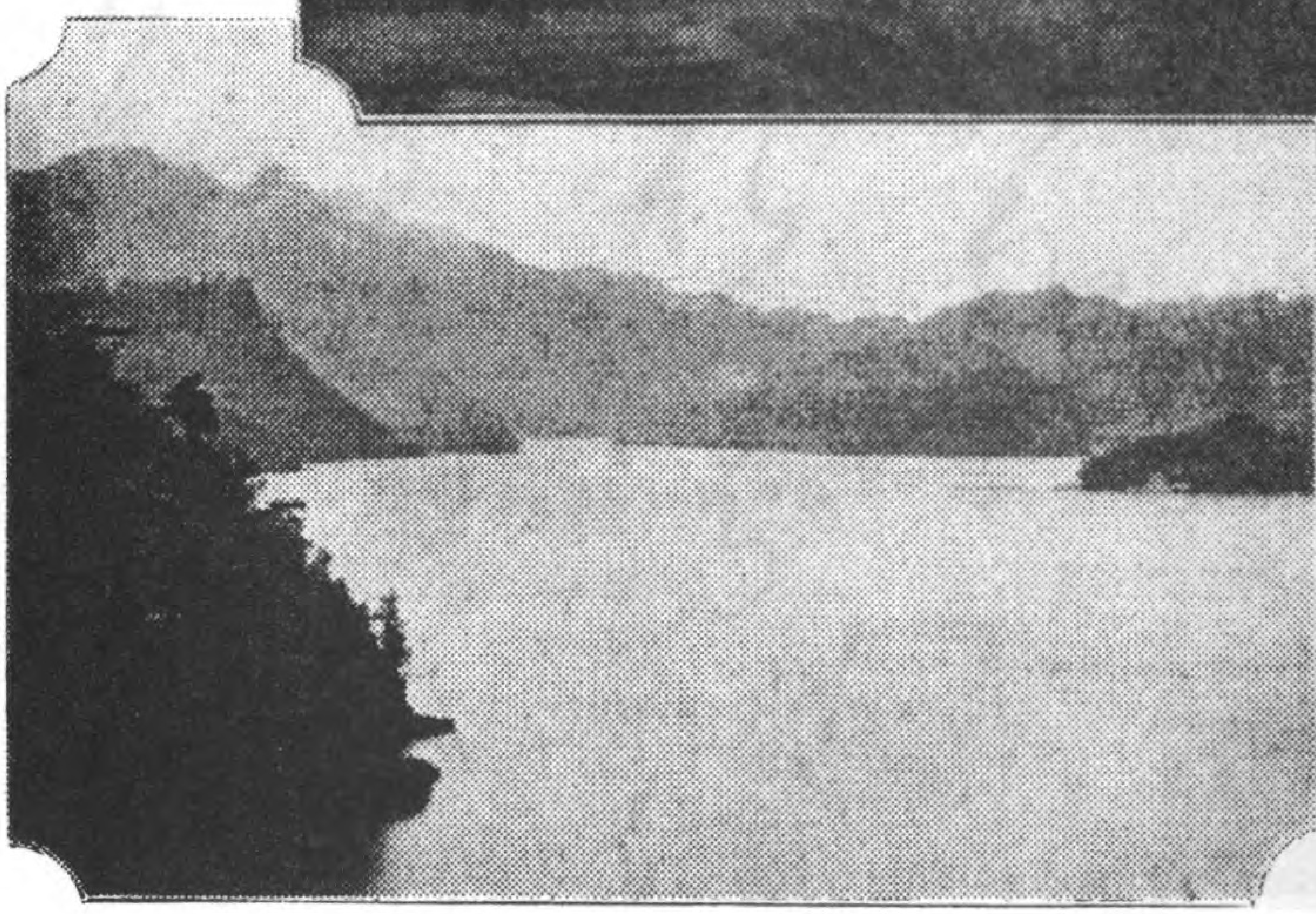
對州城山



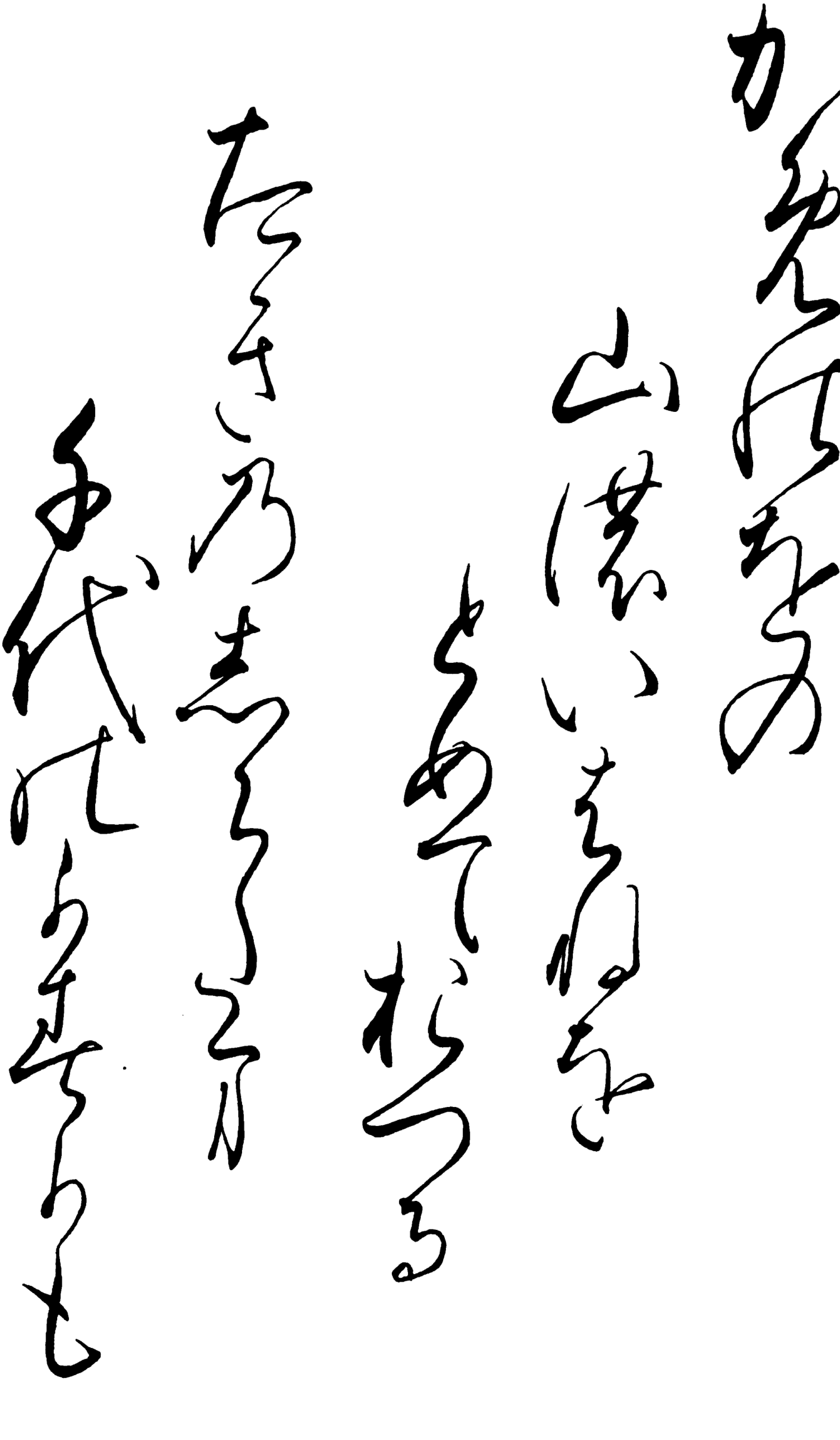
孤島の景色



琉球波上神社



對州白嶽



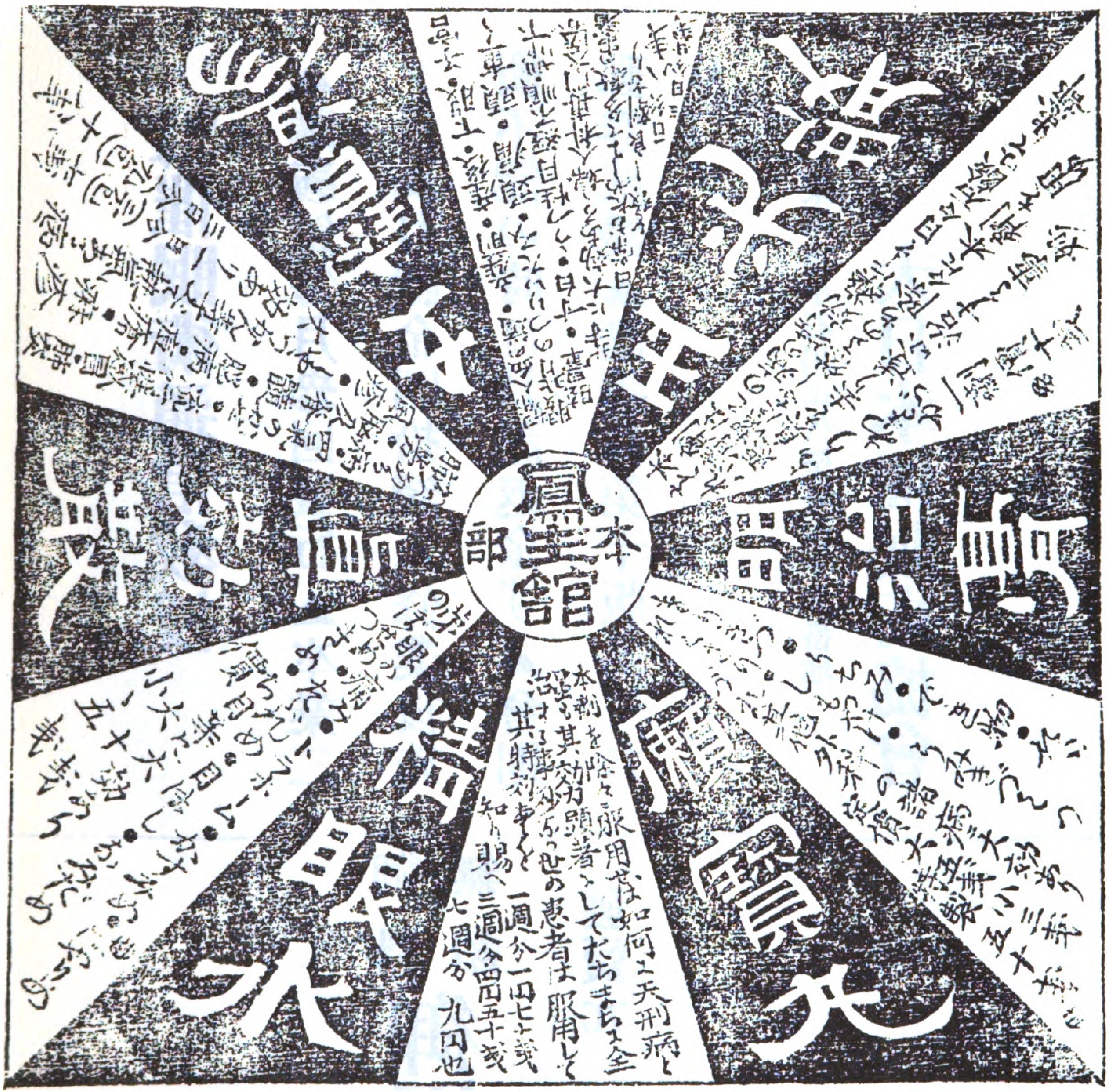
宮里みきえ子書



結城素明氏筆

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



●右ハ本館ノ製劑ニシテ各劑ノ廉ナルニ不拘主トシテ原料ヲ精選スルヲ以テ本館ノ特長トスル處ニシテ其奏効ノ有無ハ既ニ試用者諸君ノ知ル所敢テ本館ノ喋々ヲ要セザル處ナレバ四方ノ諸君用テ御試驗アラン事ヲ六方中玉光散及癩寶丸ハ去ル三月發賣以來大ニ江湖ノ信用ヲ博シ効力ノ頗ル顯著ナルハ各新聞雜誌之公評ニヨリ明ラカナリ

今回右六方各劑發賣仕候ニ付何卒御試驗アラン事ヲ地方賣捌希望之方ハ特別便利ニ契約仕候

東京麴町區飯田町六丁目廿四番地國學院前

鳳生館本部

攺良に就て

記者

赤帝早く駕を回して、金風爽涼の氣、やうやく江湖に充たむとす。

戀しき故山を去り、懷かしき父母に別れて、再び學校生活の場に上る女學生が、燈火と親み、書籍に伴ふは此時也。緑り滴る青山の下、或は白波跳る碧海の邊りなる避暑納涼の旅行地より、再び家庭の生活に歸れる夫人孃子達が、庖厨に伴ひ、時には牙籌をさへ握らざるべからざるも此時也。

されば一は學校を以て、一は家庭を以て、各々その世界として、その職分の爲めに力を盡すは、その義務なり、責任なり。此の義務を完うして、學校の業を卒へたる女生の前途が如何に春海の洋々たるが如くなるべきぞ。又此の責任を全う

して、家庭に無限の歡樂を來せる夫人孃子達の將來が、如何に萬福疆りなかるべきぞ。

わが女鑑の期するところは、是等夫人孃子達の益友となり、女學生諸子の兄妹とならんと欲するにあり。今や聊か改良の端緒を開きて、從來の旨義を擴張し、愈々高潔なる趣味を供給せんと欲するは、洵に之が爲めに外ならず。

昔しマーカス、オーレリユス其友に語つて曰く、君若し己れを喜ばしめんと思はゞ、有德の人を擇びて之と交るべし。有德の人とは活潑、温和、寛仁、及其他の義と德とを有する人是れなりと。噫今の女學の雜誌といふもの又何ぞ限らむや。知らず眞に有德の友とすべきものあるか、予輩及ばずと雖も義と德とを有する人として、讀者諸子と相見え、相交らんことを望むのみ。

體育上より見たる日本女子



日本體育會長
日本赤十字社幹事　加納子爵談話

近頃世上に體育の聲が大分隆になつて來て、隨つて女子に對する體育の奬勵は、男子に對するよりも、比較的効能が多いやうに見受けられて來た、否効能と言へば弊があるが、平常男子よりも習慣の多かりし女子が、比較的多く束縛を解かれたのである、故に効能ではなくて、自然の勢ひが然らしめたのであらう。

生れてから死ぬるまで、思ふやうに駈け走りの能ぬ下駄、身體の動きが能ぬ程巾廣く幾重にも捲きつける帶、裾に纏はつて大股には歩行けぬやうな衣物の着方、髱があつて成るべく壞さぬやうにと拔衣紋前曲みになる頭髪の結ひ方、是等は什麽に身體の自由を束縛するであらうか?。加之に外に出る事は至て尠く、

内にのみ引籠つて彼の裁縫に專心取掛るために、遂には脊髓を曲げて了ひ、胸膈をして其發達を壓迫する、などといふ事は、之を體育の眼から見ると、實に女子は男子よりも一層甚だしき弊がある。處が近頃は女子教育も八ケ間敷なつて、日中五時間位は概ね學校に在つて椅子に倚り、爲めに腰部以下膝幹の自由を得るやうになり、衣服は筒袖が唱道せられ、袴は歩行に便に、重い駒下駄は止めて靴となり、頭髮は束髮にするため髷の心配も無くなり、たゞ裁縫のみを爲る習慣は、學校の教育で打消された上に、從來は單にお轉婆だと稱された體操も行はれる、のみならず家庭にも夫等を八ケ間敷言ふ父兄が出來た。と斯う言ふ風に、身體に害を與へる習慣が著るしく減約した事は、確かに男子よりも多い、兎に角是等の現象は、體育の効能としては未だ喜べないが、稍其方向に近きつゝあるものとして悦ばなければならぬ。けれども斯く言ふものゝ、一般女子の體育といふ事に至つては、遠く男子程には進んで居らぬのである。何故男子程積極に進んで居らぬかと言へば、夫には斯ういふ近き實例がある。目下我が體育會の教師をして居る井口アグリ氏——此井口氏が擔任して居る女子部の運動には、吾々當局者さへも、未だ嘗て女子の運動としては見た事のない程、それ程活潑なる運動を教授して居られる事である。即ち井口氏は多年米國に於て自ら受けた處のものを教授して居られるのである、既に此運動法が、吾々にさへ井口氏に依つて始めて知られた位だから、それが一般の女學生に行渡つて居らぬといふ事は明かである。斯くの如き有様故、今後活潑なる運動が女流に傳つて、從來の不活潑なる習慣は、漸次打消されて來るであらうと思ふ。今日に至るまで、女子に對する運動の教授は、專ら男子が取つて居たが、男子は女子の爲に兎角遠慮勝の教授をして居た、

これが畢竟活潑を缺いた所以であらうと思はれる。それでは不可ゆゑ、女子は男子よりも一層無病健康で、何時醫師の健康診斷を受けても、體格に何等故障の無いやうにならなければならぬ。

健全なる國民は壯健なる母に生ずるてふ諺の如く、實に國民を生む處の母たるものは、無論健全でなければならない、例へば種子を蒔く所の畠が瘠土であつたなら、奈何善良な種子を蒔いたとて、決して充分なる收穫を見る事は能ないではないか、故に國民體育は、男子よりも寧ろ女子に向つて奬勵したいと思ふのである。

今言つた如く、國民教育の中の體育は實に必要缺くべからざる事である、併しながら、又一方家庭に於ける體育は、尙最も必要であらうと思ふ。前に言つた改良服などいふて、近頃は皆女子に海老茶袴を穿かせて改良と叫ぶが、實はこれは、或點からは寧ろ改惡といはなければならぬ。何故なれば、其所謂袴なる物は、皆裾を引摺るばかり長く穿き、其紐は又頗る長くしてグル〳〵と捲きつける、其捲きつけ方も、胸の邊りまで堅く捲きつけるのであるから、斯くては袴を穿かぬ時、衣物の裾の纏わると、巾廣い帶を捲きつけるのと、少しも違う處はない、否却つて害が多いだらうと考へる。

で、自分は、自分の子供には、學校に通ふにも家に居るにも、袂のある衣物を着せず、袴は前後に四つの穴を設けて釦で留めるやうにし、前の方に只紐の結び飾りを付けて、而して腹部胸部の緊縛を避けるに力めて居る、又其袴の長さも所謂足の踝よりは下にさがらぬやう、恰度是非靴を穿かなければならぬやうにして居るが、これが女子の身體に害を除くの注意には缺くべからざる手段であらうと思ふ、で、其證據に

は近頃子供が巾の廣い帶を締めさして試ると窮屈がり、丈の長い衣物を着せると歩き難がるのである、既にこれが自然の發育を妨げないのであつて、即ち天然なのである。

處が世間——と言つて可らう——の小學校あたりでは、自分の家庭で行つて居る衣物を着せては通はせられぬ學校が多い、靴穿の儘では昇降を禁ずる學校が多い。で、止むを得ぬから靴を穿いても駒下駄を穿いても、必ず一個の草履を持つて往つて、靴と穿き換へ駒下駄と取代へる、すると何時の間にか靴は紛失し駒下駄が無くなる、といふ實例が澤山あるのである。これらは奈何にも些末の事であるやうだが、所謂改良を斷行するに頗る障害となるのである。

扨で何故學校では靴のまゝ昇降を禁ずるのかと其理由を糺せば、學校は常に清潔にせねばならぬと叫んで靴を穿かすと教場が不潔なる。今日の如き道路に雨降の時などには、其靴の儘昇つて來ては學校が泥土だらけになつて了う、其結果多數の兒童が歩くために、塵芥が積つて、或は氣管支病を起し、或は呼吸器病を發する、或は眼病を患ふ仲立となるから、それで靴の儘昇降は禁ずるのである。と斯う言ふのが其理由である。

さりながら、今之に向つて皮想の觀察を下せば、全體清潔を保つといふ事は、絶體的に汚さずに清潔を保つといふのではなくて、常に汚す所を汚さないやうにするのである、汚れるのを汚さないのは清潔を保つのではなくて打捨つて置くのである。例へば厠が厠の臭氣を放つ、其臭氣を放つのを禁ずるのが、所謂厠の清潔法たる所である。故に翻つて顧れば、今日は宮城の壯麗なる御建築でさへ、吾々粗末なる靴を穿て

歩く事を許され、決して御車寄で靴を脱がさせる事は無い、況んや學校の如き、其建築が既に靴を穿いて昇降すべく出來て居ながら、尙且這の理由を附せるは、甚だ不都合であらうと思ふ。これが爲めには遂に衣服の改良と言ふ點に就いても、女子の體育といふ事と、學校の習慣といふ事とが、迚も兩立併行は六ヶ敷事になる、故に間接に靴の昇降を禁ずるといふ事を止めるのが、直接男女體育上には必要な事であらうと思ふ。手早く言へば、或他の學校では實行されて濟むものが、小學校獨り濟まぬ譯のものではないだらうと思ふ。

さて斯く女子體育の必要を說につけても、果して日本の女子は、運動の奬勵に堪へ得るであらうか、といふに、是は既に吾々の實驗した所で、現に此間の大阪における博覽會で自由運動を爲さしめた處が、かのテーブルテニスの如き、名稱さへも未だ知らなんだ位のであるが、これも充分の効果を見、今では大分流行して來た程である、それから鐵棒を除くの外、或はブランコ、或は遊動圓木、廻り舞臺、氷滑り等に至るまで、なか〱活潑に行つたが、是等凡て吾々から勸めるのではない、皆女子自ら勝手に行るのであつた。で、此例を以て見ても、我邦の女子は、天性不活潑なのではなくて、不活潑に見受けられて居たのは、全く或習慣の爲に抑へられつゝあつたのであると言つても、決して不可なしである、況や若し是が奬勵を盛にしたなら、無論快濶的運動を行る事は受合である。

既に日本女子の本性は、決して不活潑では無いと知つて、さて扨で我邦における體育に就いて觀るに、成程孰れの學校等にもなか〱盛になつたやうであるが、併しそれは全く外觀だけの事であつて、眞の體

育的觀察から言へば、體育が盛になつたのではなくて、或一種の藝術が偏頗に行はれ居るに非ざるかと思ふ。何故かと言へば、此の學校と彼の學校の競爭であると言つても、其實それは名ばかりで、彼此學校中の或專門家、即ち各種の特技を有する或一部の學生に限られ競爭するので、決して學校全體が連合して競爭するのではない、故に何時でも名譽の勝點を占めるものは、或一部に限られ、隨つて其學校が平均に得點が高いのであるかといへば、さうでは無いのである。然らば即ち是れ既に偏頗なのである、體育の行はれたものとは言へない、唯一の專門の遊技者が競爭を試みるといふに止まる。而して此弊習は軈て到る處の各小學校にまで闖入し、少しも一致共同といふ制はなくして、要するに唯褒賞品の取遣といふ事に歸着して了う。

處が之を歐米各國に觀るに、實に一致共同の精神を養ふ爲に行はれ、隨つて其勝敗は學校全體の勝敗であつて、決して一個人の競爭ではない、團體的競爭であつて個人的勝敗ではない。であるから多數の生徒は良く一致して居て、其結果を我父兄に示し、父兄も亦熱心に之を見聞する。斯う言ふ風に既に國民の一致團結の精神が養成されるから、隨つて國民の體格が、統計上頗る善良なる結果を現はすに相違ない。乃で自分は此間の大阪博覽會を好機とし、日本全國の學校中二十三校の贊成を得て、大運動會の開催を企てた處が、學校全體の一致を見る事が能ず、漸く三十名位を頭として、十名二十名といふ選拔生を出すといふ者ばかり、皆此の如く偏頗になつて來たから、殘念ながら此催しを中止したが、これが我邦一般の人氣である。既に斯の樣な有樣で、甚だしきは體育を一の學課のやうに思ふて、體育も尙且修業的卒業のものと

心得て居るやうである。故に我邦目下の體育は、たゞ專門家が、或試合の爲に諸國を步き廻るやうになり、一の學校の道具となつて居るのである。だから、是れ實は體育の進んだのではなくて、一の競爭遊技が流行して來たのだといふが適當で、換言れば個人的であつて、連合的のものには爲つて居らぬのである。

熟ら考へれば、國民の元氣を惹起し、生存競爭場裡に敗を取らぬやうにせよとの議論は、詢に故ある事と思ふ、英米其他の各文明國が、切りに體育の必要を認める所以は、實に新進文明に進逮する所以である。現に英國の女子の體育が進步したのは、最近五十年間にあるさうだが、又尤も衛生といふ事も並び進んだ結果であらうが、今まで四十歲平均の者が、今日では五十歲平均になつたといふ事である、隨つて彼國の徵兵の如きも年々に部合が進んで來るさうである。

然るに之に反して、我邦の徵兵の結果は、年々部合が減少して來て居る、今陸軍省の報告を見ると、體量に於て年々十二匁を減じ、身幹に於て年々二分づゝを減少する割合である。

斯く軍人の體育に結果を來すのは、即ち國民に原因するので、何ら體育會が盛になつても、國民が熱心しなければ何にもならぬのである。赤十字事業の如き、全國に八十萬の會員を有て、人口六十人につき一人位の割合になつて居て、それで國家有事の時には、日本の博愛主義を代表して事を爲す事が出來るが、體育に至つては、詰り統計表が體育を代表するのであるから、四千五百萬の同胞が一致代表するでなければ、體育の能事了れりといふ事が出來ぬのである。

世上、國民敎育と言へば、直ぐに學問を聯想するが、智識は何程有つても、德が何程高くても、此等凡て無形の物は、皆有形の身體の中に保存するもので、身體が無かつたなら折角の智識も高德も役には立たぬのではないか。紙片で拵へた紙幣を貴しとして、堅牢なる金庫の中に藏めて大切にする人のありながら、ヨリ貴重なる、ヨリ大切なる智識高德を、入れる所の器械が、之に伴はぬ現象のあるは、實に遺憾千萬ではないか。

國民の須く知らざるべからざる學問、即ち讀書、算術、習字、是等を知つて國民となつて、而してそれを收むる處の身體の强弱は措いて問はず、偶々眞の申譯的に、一週に二時間位のお儀式的體育を施すといふのは、果して兒童の體育といふ事が能やうか。随つて學級編成に體育を行るといふのが間違つて居るのである。生徒の中にも、健全な者もあれば羸弱い者もある、それにお儀式的の體操でも可いから、之を體育的に行らしたなら、夫こそ大變、害あるとも決して益は無いのである。故に或は病的に組合を立て丶、而して體育を施せば、或は完全なる方法に近いかも知れぬが、之とても敎員其者に精神が無いから、幸ひにして大變にもならず、又到底行はれもしないであらう。で、近來隨分敎育界に於ける女子敎育の點に議論のある事は、所謂體育の一部から見ても免かれ難いのみならず、實は奇險千萬であると思ふ。要するに日本女子の本性は、決して先天的に不活潑のものでは無いから、幸ひにして百年の習弊を打破し得て、健全なる國民の母たる、女子の體育に就ては、宜しく大に思慮を廻らす事が、最も急務であらうと思ふ。

（完）

現代女子の一大急務

水主青眼

現今に於ける我國の女子が、舊思想と新思想との間に挾まれて、自由なる發展をなす能はざるは、時代過渡の期に屬するが故なれば、今俄かに如何ともする能はざる事情ありと雖も、予輩の所見を以てすれば、教育ある女子が、自ら進んで、開拓すべき新天地は、現に眼前に横はれるを認めずんばあらざる也。而して此の新天地を開拓するは、現代女子の責務にして、また其の一大急務たらざるを得ず。

家庭は寔に女子の世界なり。されど家庭が女子の世界なると共に、家庭ならざる所にも、女子の世界の存在せることを忘るべからず。賢母たると良妻たるとは、女子が目的とすべき天職なり。されど賢母たり良妻たると共に、尚は女子の天職とすべき職業なきにあらず。法に於て、若くは道理に於て、女子の身上に許されたる範圍は、是れ女子の世界にあらずや。母たり妻たる仁愛を推及ぼして、他人の上に加へ、愛しむと我子の如く、敬ふと我夫の如くなるは、人道に於ける博愛義俠の主義にして、これ將た女子の天職なるものにあらずや。既に此の世界あり、天職あり。進んで此の世界に地歩を占め、その天職を全うするは、女子の本分にして、又其責任たらざるを得ざるべし。

何をか家庭ならざる女子の世界といひ、何をか良妻賢母たるに伴ふべき女子の天職といふか。女子の公職の及ぶところは、その世界にして、その公職は則ち天職たらずんばあらず。見よ、疾に惱める者、貧に泣く者、罪なき可憐の幼者、罪惡に沈む惡人等は、女子の手の及ぶべきその世界中のものならざるか。之を醫治し、救濟し、教導し、改悛せしむる

は、則ち女子の天職にはあらざるか。されば教育者たり、醫師たり、教誨師たるが如きは、女子が自ら進んで求むべきところの職業にして、此の職業は女子自然の天分ともいふを得べく、且つ決して、家庭と遠く離れたる世界のものにあらず、また母たり妻たるに縁遠きものにもあらざる也。

古來我國に於て、職業を輕んじたる固陋なる思想は、今や漸やく薄らぎて、畫工、彫刻家等は美術家といはれ、大工、鍛冶屋の類は技師、技手と稱へられ、琴曲歌唱の師匠は、音樂師と呼ばれて、その面目自ら革まりたりと雖も、女子の職業に至つては、今尙ほ世に卑めらるゝが如くなるは頗る遺憾のことといふべし。曰く産婆、曰く看護婦、曰く女醫者、曰く女教師、曰く女教誨師等の如きは、寧ろ貴重なる性質を有する職業なるにも拘はらず、世俗の見て以て普通婦人にも及ばざるが如くなるは何事ぞや。是を以て、彼等の多くは或は家計に饒ならざるもの、或は事情ありて他家に嫁ぐ能はざるもの、或は不幸にして怙恃なき子女等が、生計上の都合により、已むを得ずして、是等の職業に就きたるにあらざるなし。さればかゝる女子の多くを集めたる職業が、自ら世に重んぜられず、却つて人に輕ぜらるゝもまた全く一理なきにあらずと雖も、歸するところは、吾國一般の習慣が、女子の職業を卑むと共に、現時の有爲にして教育ある女子が、猶ほ此の習慣を脱するを得ずして、進んで職業を求めざるの過ならざるなからむや。

かく職業を輕視する一方には、女子の學問としいへば、たゞ文學のことに外ならずとのみ心得居るものゝ少からざるは、甚だ嘆ずべきなり。文學固より尊ぶべしと雖も、徒らに繡窓に詩歌を賦し、妝閣に風月を弄ぶが如き文學は、之を高尙なる娛樂と見る

を得べきも、未だ以て眞正の學問とはいふべからず。學問は幾分世用と實益とに伴ふを要す。之を家庭に應用するを得べく、之を親子兄妹の間に實行するを得べく、之を百般日用の上に使用するを得てこそ、學問の眞價は存するなれ、花月を友とし、風流に耽るが如きは、業務の餘事としては、その風韻を認むるを得べきも、かゝる文學を以て專ら學問とのみ思惟するは、誤れるの甚しきものにして、速に改善すべきものゝ一たるや無論なり。

されば予輩は今日の敎育ある女子が、身を投じて、醫師、敎員、看護婦、産婆、敎誨師などの業を修めて、是等の業務に從事するは、女子自から一新天地を開く所以にして、女子敎育の効果を實地に顯はすに於て、最も必要なる急務たるべしと信ず。若し依然として舊態を存じ、詩文和歌等の文學のみを以て畢生の能事となさんには、女子敎育は長く振起せざるべく、女子の事業は今後久しく失墜に歸せざるを得ざるべし。

昔者、佛國に或る大家の一令孃あり。有名なるソルボン大學の試驗に及第して、夙に閨秀の譽れありしが、其後名を匿し、姿を變へて、一地方の小學敎員となり。冬期冱寒の時にも、毎朝五時徒歩して出勤し、生活に窮して敎員となれる女敎員等の中に混じて孜々兒童敎育に從事しつゝありしが、後、遂に一の貧女學校を創立して、其の校長となり、長く敎育界に美譚を貽せしといふ。これ豈に吾國現代の女子に向ひて、剴切なる好例を示すものにあらずや。

女子の職業を以て、生計の爲めのみと誤想し居る間は、生計に窮せざる限りは、甘んじて職業を求むるものなかるべし。故に現今我國女子の一大急務はかゝる誤想を打破して、女子世界の一新天地を開拓するにある也。

法律上より見たる誕生（つゞき）

牛原山人

普通の誕生及び或る特定の場合に限り胎兒を已に生れたるものと看做すべき所謂法の擬制に因る誕生に關しては、吾人は前段に於て其概要を述べ置きたり。以下第二項違例の誕生につきて聊か研究を試みんとす。

（二）違例の誕生

此に吾人が誕生を普通及び違例の誕生なる二個の區別を設けて討究するの必要は、親族及び家族的關係につきてのみ存するものにして、社會構成の一員たる個人としての法律上の地位は、兩者間何等差異の存するものにあらず。而して以下違例の誕生につき論ずべき事項は、多く普通の誕生に對し其差異の存する所を明かにせんとするにあるを以て、自然普通の誕生に關する法律關係をも明かにすることあるべしと信ず。

前項に於て普通の誕生は法制上公に爲したる結婚に原因して懷胎し、且つ通常其の婚姻中に分娩する場合なることを述べたり。從ひて此に所謂違例の誕生とは此場合（一二の例外を除き）に該當せざる總ての出生を指せるものにして、世上其例に富めるは私通に原因したる出生なり。而して法は私通に原因して出生したる子は之を私生子と稱す。

私生子は其父又は母に於て之を認知することを得とは民法第八百二十七條の規定する所なり。私生子は父母の認知ありて後始めて法律上親子の關係を定むるものにして、認知以前は事實上親子の關係あるも、法律上に於ては全く單一孤獨の可憐兒のみ。而して

法律は父が認知したる私生兒をば之を庶子と稱し、母の認知したる私生子は依然之を私生子なりとせり。

今法律が庶子及び私生子をいかに遇するかを見るに、その家族及び親族關係につきて嫡出子と異なる點は大要左の如きものなり。

(一)庶子又は私生子は、其父又は母が戸主にあらざるときは、其父又は母の屬する家の戸主の同意を得るにあらざれば其家に入ることを得ず。故に父又は母の孰れの家へも入ることを拒否せられたる場合は一家を創立するの外なきものとす。

(二)家督相續の順位中直系卑屬間に於ける優劣は、親等の同じき者の間に在りては男子を先きにするを原則と爲せども、同親等の嫡出子、庶子及び私生子の間に於ては、嫡出子及び庶子は女といへども之を私生子より先きにす。又親等の同じき男又は女の間に在りては、庶子及び私生子は常に嫡出子に排斥せらる。

(三)遺産相續に於て相續人二人以上あるときは、その相續財産は之を平分するを原則となせども、若し其の相續人中嫡出子、庶子及び私生子の三者併存するときは、庶子及び私生子は嫡出子の相續分の半額を受くるの權利を有するのみ。

(四)我が民法はその第五編相續法中第七章に於て遺留分なるものを認めたり。遺留分とは家督相續及び遺産に於てその被相續人の財産中相續人に對し必ず遺留せざるべからざる財産の額を法律上規定したるものにして、我が法制上近年新たに認められたる所の制度なり。而して家督相續は相續人一人に限られたるを以て、遺留分の割合に關し嫡、庶、私の間優劣關係を生せずといへども、遺産相續につきて數人の相續人ある場合に於ては、庶子及び私生子は嫡出

子の受くべき遺留分の半額を受くべきものとせり。

以上は違例の誕生に關する人の親族及び家族的身分關係の要點を摘示したるに過ぎず。然り而して法が嫡出子、私出子間に權利の優劣此の如くならしめたる精神は果して那邊に存する乎。惟ふにその理由を推斷すること決して輕易の業にあらざるべし。佛國の如きは私出子を私通の子（處女又は寡婦の野合に因るもの）姦通の子（有夫の婦他人と通じたるもの）亂倫の子（親子若くは兄妹等近親相通ずるもの）等に區別して其の待遇を異ならしむと聞く。又以て其の間淺からざる理論の存することを察するに足らん。

人あり謂ふ、私生子は正當の婚姻以外に生れたるものなるを以て正當の婚姻に因りて生れたるものと同一の保護を與ふるの必要なしと。又謂ふ、私生子を酷待するときは其父母たる者其子の薄命を憐むの至情より自然私生子を擧ぐるもの尠なきに至るの利ありと。是れ一應其理なきにあらざるが如しといへども、退て之を熟思するに、是れ皆父母の罪業を擧げて子の頭上に嫁せしむるもの、人道擁護の點に於て缺くる所なき說とは認むべからず。私出子といへども其實子たるに於て嫡出子と異なる所なし。生前の私通たり、姦通たり、亂倫通たるは其子の曾て與かり知らざる所、此の無辜の可憐兒に對して其父母の責任を歸せしむること論者の說の如しとせば、果して人道に背馳するの虞なきを得る乎。吾人は之が救濟法につき鄙見なきにあらずと雖も此に贅せず。立法の精神を正當に解釋するは請ふ之を讀者諸子の判斷に任せん。

（終）

道の邊の木槿は
馬に喰はれけり　芭蕉



邪馬臺の鬼薊

文學士　濱田廉

(一)はしがき

婦人とし云へば、一むきに退嬰保守を聯想すめれど、我邦古今の歴史を觀るに、女傑雄婦鮮しとなさず、特に上つ世には、雄々しき女丈夫ありて、千里の功を立てしものすら多かりき、たとへば、鈿女命は手弱女なれども、伊牟迦神、面勝神なりと稱へられにき、氣長足姫尊は逆卷く浪を蹴て、鷄の林をうちきため、三韓を永く我版圖となし賜ひぬ、神功皇后の御諡こそむべもふさはしけれ、この外に例すくなからず、又四方の夷狄の中には、往々女酋ありて、善く荒くれ立ちし男子どもを率ゐしこともありて、その心ざまも事業も、おさ〳〵男子に劣らず、活動の局面もいと廣かりしなり、さるを世の開け人文の進むに從うて、婦人は專らみやびを好み荒々しきを忌み、青丹よし奈良の都の、咲く花の如く榮えしより以來、加茂の流に宮柱太しき建てし平安の朝を經て、婦人は多く家門の外を知らず、几帳深く垂れこみて、今日に至りしなり、夫れ婦人の本性は退嬰寂靜にあるか、はた進取活動にあるか、我これを知らざれど、第二十世紀の天地は、御雛樣に似たる姫御前を要せざるべし、予はこゝに上つ世の一女酋を傳して、その活動進取の有樣を述べむとす、然れども予は決して蓮葉たれと勸むるにあらず、少しく眼界

を大いにして、天下の大勢をも等閑に附せざらむとを冀ふなり。

予や正に一女酋を傳するに臨み、豫め一言すべきことあり、そは此女酋は我國の史籍に顯はれず、却て古の朝鮮支那の歷史に散見せしものを補綴せり、而して我邦上世紀年は甚しき誤謬あること、既に先輩の論らひし所あれば、それ等の説によりて、年代を紀したれば、世上に流布する年表の類とは合はざるなり。

（二）魏志に顯はれたる我九州の形勢

魏志倭人傳によれば、魏使韓國を經て我對馬に至り、又翰海（玄界洋）を渡りて一大國（未詳）に至り、更に海を踰へて末羅國（肥前國松浦）に達す、其地は草木茂盛し、住民好んで魚鰒を捕ふ、これより東南五百里にして伊都國（筑前國怡土郡今は糸島郡に入る）あり、その東南百里にして奴の國（筑前國那賀郡）につく、その東百里の地に不彌國（筑前國糟屋郡宇美地方）あり、其南水行二十日を經て多馬國（肥後國託麻郡今は飽託郡に入る）に達すべし、又南して水行すれば十日、陸行すれば一ケ月を閲して邪馬臺國に到る、これ女王の都する所にして、戸數七萬餘、かの伊都國の如きはその配下たりと、抑もこの邪馬臺とは何處なりや、或は支那の史に倭に作れども、これ同音の字を採りてのみにて、我日本國の謂にあらず、又畿內の大和にもあらざること明なり、謂ふに肥後國菊池郡に山門あれば、この地方なるべし、上代肥後の阿蘇、菊池、益城、託麻の四郡は日向に屬して、熊襲の領內なりしなるべし。（靖方溯源）

これは魏の使者が我九州を旅行せし時の見聞錄なり、以上の諸國中最も勢熾なりしは、邪馬臺なりしが如し、予は今此邪馬臺に君臨せし女王を傳せんとするなり、女王名を卑彌呼と云へり。

(三)邪馬臺國女王卑彌呼

凡そ此邪馬臺國は、代々男子を以て國王となし、に、後漢桓帝靈帝の際(我孝元天皇時代か)、その國亂れて麻の如く、部下相攻伐して王を定めざること數年に及びしが、國人遂に一女傑卑彌呼を擁戴せり、卑彌呼年已に長けて、未だ嫁がず、鬼神の道を行ひ、妖術を以て衆人を惑はし、頗る勢あり、侍婢千人、見ゆるもの少し、唯男子一人ありて、飲食を給し辭語を傳ふ、その居處宮室樓觀城柵嚴に設え、皆兵器を持ちて守衞す(後漢書倭人傳、晋書)と、叙事や、神怪なれども、そが威勢の猖獗なりしを察するに足れり、男子一人ありとは、恐らくその良人なるべし。

さてこの邪馬臺と朝鮮半島との關係は、紀事甚だ乏しくして、新羅阿達羅尼師今二十年夏五月、卑彌呼使者を遣はせしことあり(東國通鑑)、こは我孝元天皇の御宇に當れるか、支那との關係は甚だ頻繁なりしが如し、前漢宣帝が遼東の公孫氏を平げし時、卑彌呼の使者、帶方(朝鮮黄海道)に至りて謁見し、その後貢聘絶へず(晋書)と、然れどもこれ恐らく誤なるべし、宣帝は我國神代の末年に當れるを以てなり、(久米邦武氏は宣帝元康三年を以て、我神武天皇の御降誕年となせり)、魏明帝景初二年六月(我崇神天皇の御宇か)、卑彌呼その大夫難升米、都市牛利等を遣はし、男生口四人、女生口六人、班布二匹二丈を携へて、先づ帶方大守劉夏に見え、倶に國都洛陽(支那河南省河南府河南縣)に至りて、明帝に謁せしむ、十二月、明帝制詔を下し卑彌呼に報禮して曰く、汝が所在踰遠なるに、乃ち使を遣はして貢獻す、是れ汝の忠孝、我甚だ汝を哀む、今汝を以て親魏倭王と爲し、金印紫綬を假す、汝其れ種人を綏撫し、勉めて孝順を爲せと、詞句甚だ丁寧を極めたり、加之

使者も道路勤勞の故を以て、難升米を率善中郎將に拜し、牛利を率善校尉に任じ、併に銀印青綬を假して、優渥なる待遇を與へたり、廢帝芳正始元年（同上）には、建中校尉梯儁等詔書印綬を奉じて邪馬臺に詣り、ヽ、ヽ、ヽ、○。卑彌呼を倭王に拜假し、金、帛、錦、罽、刀、鏡、采物を賜ひしかば、卑彌呼は上表して拜謝せりき、同四年（同上）卑彌呼又その大夫伊聲耆、掖邪狗等を使者として、生口、倭錦、絳青縑、緜衣、帛布、丹水㹤、短刀矢を獻せしことありき、これによりて顧れば、魏と邪馬臺とは親密なる關係ありしなり、卑彌呼の心中を察するに、彼はたゞ魏の爵祿を貪らむの意にはあらで、その後援を得て、近隣諸國に當らむと企てしが、一婦人にして能く一國を統率し、其經綸の廣大にして巧妙なる、歎稱の値なしとせず、宜なり榛狂なる蠻族の間に雄視せしや、この時に當り、卑彌呼その南隣狗奴國（即ち熊　縣　にして、今肥後國球磨郡）男王卑彌弓呼と相戰うて年を歷たり、乃ち倭載斯、烏越等を遣はして、これを帶方太守王頎に訴へしむ、王頎その部下塞曹掾、三張政等を遣はし、檄を爲りてこれに告諭し、以て相和解せしめぬ、かゝる程に雄邁なる卑彌呼も、さすがに老の年波を凌ぎかねてや、鵬志を懐いて黄泉に赴きぬ（是れ我崇神天皇の末年なるべし）、仍て大に冢を作り、徑百餘歩、葬に殉ずるもの奴婢百餘人、いかに人心を收めしかを知るに足らむ、其齡は固より知るべからざれど、凡そ六七十歲の高壽に達せしを想像するなり。

卑彌呼既に逝きしかば、一男王を立てしに、國中服せずして、復亂麻の狀を呈せり、因てその宗女壹與を王となす、時に年甫めて十三、國人遂に定まる、三張政等檄を以てこれに告諭せしかば、壹與太夫掖邪狗等に命じ張政等を送り還して、男女の生口三十

人を献じ物を貢せり(以上皆魏志倭人傳に依る)、爾後百五十年の間漢土の交通ものに見えず、而して九州の諸蠻はこの後景行天皇日本武尊の御征伐により て、大に勢を失ひたり。

(四)餘説

從來世上に流布する年表類を見るに、我神功皇后攝政時代と支那魏時代とを牽合するを以て、世人は卑彌呼を以て神功皇后と考へ、男子一人ありと云ふを武内宿禰となせど、これ大なる僻説にして、かけまくもあやにかしこきことなりかし、本居宣長これを辯じて曰く、卑彌呼は姫兒と申す事にて(中略)姫を比彌にいへるも、古きふみに見えたり(中略)然れども此時かの國へ使をつかはしたるよししるせるは、皆まことの皇朝の御使にはあらず、筑紫の南のかたにて、勢ある熊襲などのたぐひなり云々(馭戎概言)と、卑彌呼の時代には、神功皇后はまだ降誕し給はざれば、本居翁の説に從ひて、西暦の女酋となすを正當とすべし。

女傳道師

須藤鳴門

慈音尼名は蒹葭、江州琵琶湖の畔吉田村の産なり、資性篤實にして慈愛の情に高み、笄年にて許嫁し、不幸にして早く良人に別れ、うば玉の黛髪も惜氣なう剃去て、よく貞操を守りけり、若木に勝る見所ありて、色も香もある年齢なれば、人々再醮をぞ勸めける、蒹葭尼これをうるさき事に思ひ、世をしのび都に出て詫住居しける程に、一日石田梅巖の講筵に赴き、其の説を聽き、大に感奮して其の門に入り、終に石門第一流の高弟と爲り、身は纖弱なる女性なれど、道德堅固の學者と仰がれ、けなげにも、梅巖

の歿後、其の道を傳へんとて、奮發して江戸に下り、門を開き徒を集め、心學を講じ、道德の重んずべき趣旨を、通俗平易に説き明し、主としては其の師梅巖の著作なる都鄙問答を開講し、後には經書徒然草等をも説き、大に世人の歸依する所となれり。

此尼さしもに志操堅確にして動かすべからざりけん、一日或人之れに問ふて、世上汝を山師といふ、如何なることぞやといふを以てせしに、即ち答へていへるやう、婦女の身を以て遠く墳墓の地を離れ、山川を跋渉して、この東の地に來り、當地未だ曾て聞かざる方法を以て、世人を敎導かんと試む、世の人々山師と視て、山師といはゞ山師なり、辯者といはゞ辯者なり、何疑ひ候ふべき、以後は恐れ愼み度き事どもなり云々と、弟子等重ねて、忠孝の道を傳ふるを山師といふ、豈にかなしからずやと言へるに、答へて曰く、孔夫子君に禮を盡したまへば、時の人視て以て諂ひ者と爲すと論語にありとかや、大聖孔子の德にだもかくの如し、況んや、物の數にも入りがたき此尼ども、世上の評に預ること、さもあるべき事なり、あしき評議に預ること、誠に我が幸として、以後は恐れ愼みて、及ばずながらも、君子の德に至らんことを願ふものなり云々、其の確乎たる志以て奪ふべからざるを見るべし。

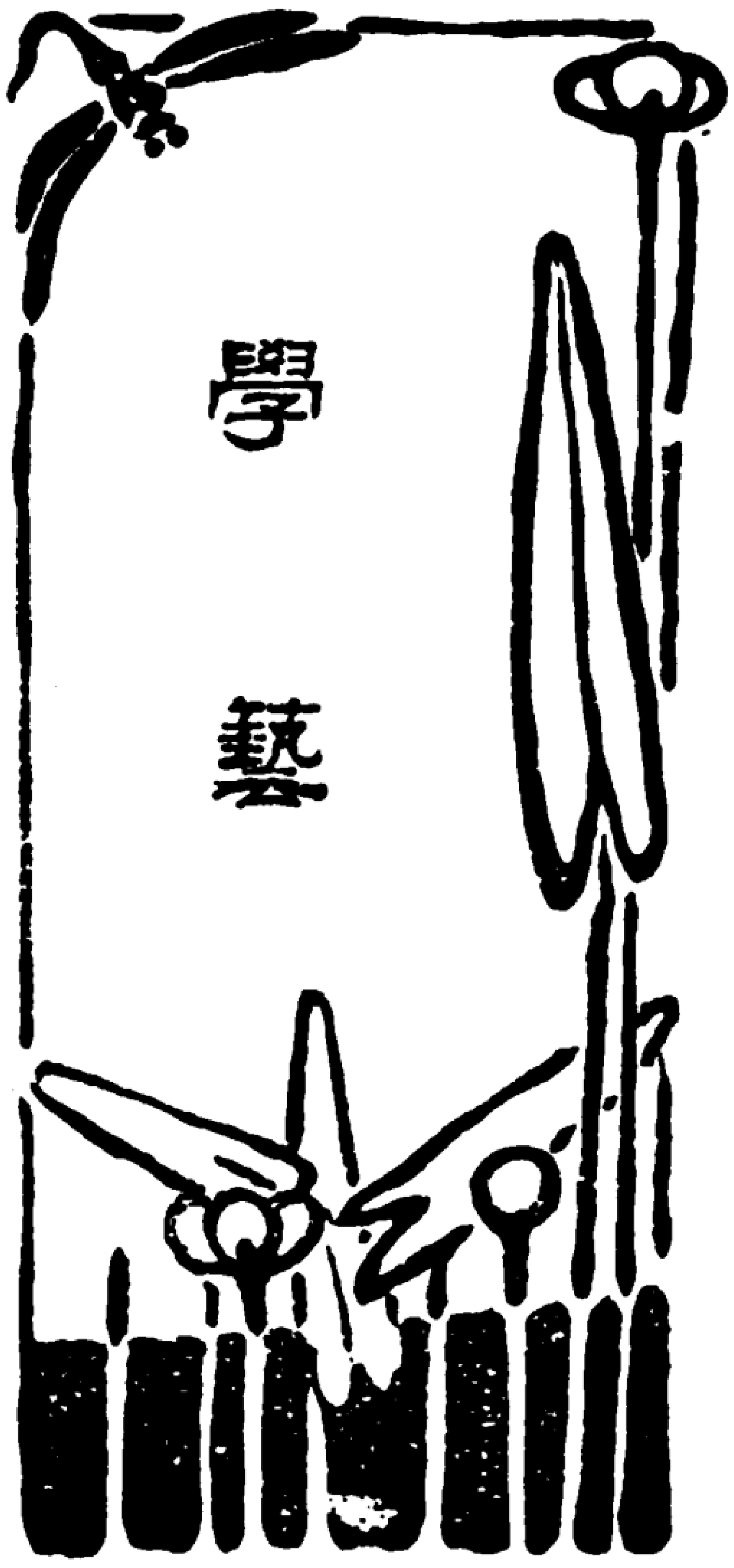
當時女子敎育としいへば、其の程度極めて低くして、且つ普及せざる際に於て、たま〳〵この堅志にして而かも博學に、よく世敎道德に心を寄せて、社會救濟を以て一生の目的とせし女丈夫を見るは、實に女性社會に於て、偉大の勝事と稱すべきなり。

抑、心學なるものは、是れより先き享保の年間、石田梅巖といふ人、當時社會一般に驕奢淫靡の風に陥り、道德の衰退大方ならざるを慨し、神儒佛三道を混和折衷して、世敎道德の補益を爲さんと企て圖れ

る、梅巖俗稱を勘平といひ、丹波の人なり、幼少の時京都に出て、或る商店に仕へしが、兼て救世の道に心深かりけん、暇ある時は神道を學び、又儒道老莊の奥をも探り、然も其の商務を忽にする所業はつゆ程もなく、勤めたりしが三十五歳の時に及び、了雲禪師に參し、佛心見性の道を辿りてより、終に精勵工夫を凝らし、四十三歳にして主家を辭し、數年考慮の末、享保十四年四十五歳にして、初めて自性見得せりと稱し、一種の道德を講するに至れり、其の説く所神儒佛老の四教を調和し、根基を心を空ふすといふに立つるより、名つけて心學といふ、始めて耳にする者は、奇異の思を爲せしも、當時社會道義の鼓吹者乏しき時とて、聽衆漸く集り、其の説く所の平易にして且つ至極なるより、士庶翕然として其の下に集ふ、此教法は早くも世の急需に應じて、偉大の感化を社會に及ぼすに至りたり、而して此感化の大にして特に稱揚すべきは、此蒹葭尼が心學を江戸に傳道せし一事是れなり、後四十餘年にして中澤道二の再び石門の衣鉢を受け、江戸に來り、亦平民的道德を唱道することあり、されど、關東に心學の種を蒔きたるは、實に此慈音尼蒹葭を以て嚆矢と爲すなり。

そも慈音尼蒹葭が、かく健氣にも江戸に下り、當時世人山師など指彈せし中に處して、泰然自若として心學を講ず、其の言尋ぬべきなからんや、即ち、其の著作として道得問答四卷あり、其の言多く師梅巖の所説を引用して講演せるが故に、又自から謙して蒹葭反古集と名づけ、以て平易適實の裡に人倫日常の德義を述べたり。

要するに元文寬保の間に、俄然興起せし心學が、よく世の急需に應じて、其の任務を全うせしは、實に異數とすべく、而かも女性なる慈音尼が此福音を傳へられたる偉績は、決して沒すべからざる事蹟なり。



和泉式部の歌

栗島狹衣

我文學史に於ける中古の女詩人をすぐつて、六歌仙とでもいふやうなものにして見たならば、先づ自分丈けの考では、左の人々であらうと思ふ。

小野小町、伊勢、和泉式部、赤染衛門、
式子内親王、俊成女、

といふ六大女詩人を撰ばねばなるまいかと思ふが、併しこれは自分の卑見で決して正しい定木に宛てたといふわけでも無いから、立派に斷言をするのではない。けれども小町や伊勢などは誰でも撰ぶとすれば、式部赤染も矢張り其列には洩れぬと信じて居る。殊に式部は一種獨特の風姿を有してゐる丈け、むしろ小町に次ぐ程の人物とも思はれるので、聊か其歌に就て研究した結果を記述してみたいのである。曾て自分が二十一代集中に載せられてある、一流又は二流の有數なる女詩人が作歌の數を比較した事がある、これは兎に角詩品を論ずる一例證ともなると思ふから、今こゝに掲げてみやう。

小野小町（六一）

古今集 一六	續後撰集 三	新千載集 四
後撰集 四	續古今集 七	新拾遺集 三
新古今集 六	玉葉集 四	新後拾遺集 二
新勅撰集 六	續千載集 一	新續古今集 一
續後撰集 二	風雅集 二	

伊勢（一七六）

古今集 二二	續古今集 八	新拾遺集 三
後撰集 六五	玉葉集 九	新後拾遺集 二
拾遺集 二五	續千載集 三	新續古今集 二

新古今集一五　續後拾遺集三
新勅撰集六　風雅集二
續後撰集六　新千載集五

伊勢大輔

後拾遺集二七　續古今集二　新拾遺集三
詞花集二　玉葉集一　新續古今集一
新古今集七　續千載集一
新勅撰集二　續後拾遺集二
續後撰集一　新千載集二

五一

和泉式部

拾遺集一　續後撰集一三　風雅集七
後拾遺集六七　續古今集三　新千載集四
金葉集五　續拾遺集六　新拾遺集四
詞花集一六　新後撰集一四　新後拾遺集四
千載集二一　玉葉集一九　新續古今集三
新古今集二五　續千載集六
新勅撰集一四　續後拾遺集五

二三七

赤染衛門

拾遺集一　續後撰集六　風雅集五
後拾遺集三二　續古今集三　新千載集一
詞花集八　續拾遺集四　新拾遺集五
千載集六　玉葉集六　新後拾遺集一
新古今集一〇　續千載集二
新勅撰集一　續後拾遺集二

九三

小式部内侍

後拾遺集一　玉葉集一
金葉集一　新千載集一
詞花集一　新後拾遺集一
續後撰集二

八

式子内親王

千載集九　新後撰集五　新拾遺集四
新古今集四九　玉葉集一五　新續古今集三
新勅撰集一三　續千載集二
續後撰集九　續後拾遺集五
續古今集八　風雅集一二
續拾遺集五　新千載集三

一四二

相模

後拾遺集四〇　續後撰集五　風雅集二
金葉集四　續拾遺集一　新千載集二
詞花集四　玉葉集七　新拾遺集一
千載集五　續千載集四　新後拾遺集一
新古今集一〇　續後拾遺集三　新續古今集一
新勅撰集一八

一〇八

俊成女

新古今集二九　玉葉集七　新後拾遺集五
新勅撰集八　續千載集六　新續古今集四
續後撰集一〇　續後拾遺集五
續古今集七　風雅集五
續拾遺集九　新千載集五
新後撰集七　新拾遺集二

一二五

歌人	集	數	集	數	集	數	計
待賢門院堀川	金葉集	六	續古今集	五	風雅集	二	六五
	詞花集	二	續拾遺集	四	新千載集	一	
	千載集	一五	新後撰集	二	新拾遺集	二	
	新古今集	二	玉葉集	六	新後拾遺集	一	
	新勅撰集	五	續千載集	二	新續古今集	一	
	續後撰集	七	續後拾遺集	二			
二條院讃岐	千載集	四	新後撰集	三	新後拾遺集	一	七〇
	新古今集	一六	玉葉集	八	新續古今集	四	
	新勅撰集	一三	續千載集	三			
	續後撰集	三	續後拾遺集	二			
	續古今集	六	新千載集	二			
	續拾遺集	二	新拾遺集	三			

先づ重な十一家を列べて見たが、これに依てどういふ事柄が認め得られるかといふのに、第一は『其人の作歌の數量』第二は『其作歌の頒布範圍』第三『所屬の時代』といふ三大要項を認められるのである、併し第一の作歌の數量といふ者は、其人は澤山歌を作つたから上手だといふ例證にはならないが、達者に歌を詠んだといふ例證にはなると同時に、勅撰集の撰に入るほどの歌が斯程あつたといふ事が判るではあるまいか。そうすれば自然どれほどの歌よみであつたといふ有力な資格にはなると思はれる。第二作歌の頒布範圍といふのは、其人の作歌がどの位ひろく行き渡つたかといふ區域をいふので、乃ち二十一代集中のどれ〴〵の集へ載せられてあるかといふ問題であるのだが、これには年代の相違に依て其廣狹は無論生じて來るのだから、同時代の人物を比較した上でなくては、相互の優劣はつけられぬのである。次に第三は其最盛時代乃ち作歌の多く撰入せられた歌集に所屬して居るといふ事を示すので、何々集に入撰歌が多ければ何々集時代の歌人といはねばならぬといふ意である。表に直線を加へて注意をしたのが夫である。そこで前の表に立戻つていへば、和泉式部は勅撰集に載せてある歌が總計で二百卅七首其數に於てはたしかに女流作家中の第一位を占め

るものであつて、同時代の伊勢大輔、赤染衛門、相摸等に較べては、最も達者によんだといふ點丈けでも立優つて居るといふ事が會得されるのである。そうして見ると當時に於ける女詩人としての資格は、又彼等よりも一段上位にあつたと斷言しても憚らぬではあるまいか、而して第二の作歌頒布範圍に於ても、彼の作歌は彼以前の勅撰集たる古今後撰の二集に入らぬ許りで、他の十九代の勅撰集へは一つも泄れなく入つて居るのを見ると、これも女流作家中の第一位を占めて居るもので、同時代の人々に較べても論なく彼の右に出づるものはない事が判る。そうすると區域の點では尤も廣い舞臺と有して居つたもので、どの勅撰集の撰者も彼の歌は見のがす事が出來ず、又どの撰者にも見のがされぬほど多くの名歌を有して居つたものであつたに相違ない。それから第三の所屬問題に移ると、彼は後拾遺集に六十七首の多くの歌を有してゐるから、後拾遺所屬の女詩人で、同集時代一流の女流作家として取扱はねばならぬと思ふ、それにしても彼の巧妙な歌は自分の研究した結果によれば多く此集にあつめられてあるといつていゝので、其例證を示したならば、

立のぼる烟につけて思ふかな
　いつ又我を人のかくみむ

小式部のみまかりてうまごどもの殘りけるをみて

とゞめおきて誰をあはれと思ふらむ
　子は勝るらむ子はまさりけり

今はたゞそよ其事と思ひいでゝ
　忘る斗りのうきこともがな

黒髮の亂れも知らず打臥せば
　まづかきやりし人ぞ戀しき

あらざらむ此世のほかの思出に

今一たびの逢ふよしもかな

我といかにつれなくなりて心みむ
　つらき人こそ忘れかたけれ

人の身も戀にはかへつ夏虫の
　あらはに燃ゆとみえぬ計りぞ

白つゆもゆめも此世も幻も
　たとへていはゞ久しかりけり

男に忘られて侍りける頃貴船にまゐりて
みたらし川に螢のとび侍りけるをみて

物思へば澤の螢も我身より
　あくかれいでゝ玉かとぞみる

といつたやうな歌柄いづれも渾然たる高潔の理想詩である。まだ此外の集でも自分がいゝと認めたのは、金葉集雜歌下

小式部内侍うせてのち上東門院より年頃給はりけるきぬをなきあとにも遣はしたりけるに小式部内侍とかき附けられたるについてよめる

諸共に苔の下には朽ちずして
　埋れぬ名をみるぞ戀しき

詞花集冬歌

鳴く虫の一つ聲にも聞えぬは
　こゝろ〳〵にものや悲しき

同集雜歌下

入あひの鐘の音をきゝてよめる

夕ぐれは物ぞ悲しき鐘の音を
　あすも聞くべき身としらねば

千載集雜歌上

獨のみ哀なるかとわれならぬ
　人に今宵の月を見せばや

新古今集哀傷歌

彈正尹爲尊親王に後れて歎き侍りける頃

寝覺する身を吹き通す風の音を
　　昔は袖のよそに聞きけん
新勅撰集春下
　月のわかき夜花にそへて人に遣しける
いづれともわかれざりけり春の夜は
　　月こそ花の匂なりけれ
續後撰集春中
おしなべて春を櫻になしはてゝ
　　散るてふ事のなからましかば
續古今集戀歌
　忍びて人に物申し侍りける頃
何事も心にこめて忍ぶるを
　　いかで涙のまづしりぬらむ

以上の作に對して彼の詩才を窺つて見れば、舒事詩又は舒事的舒情詩といつたやうな、形式の複雑な内容の單純なのを採らないで、純舒情詩乃ち主觀詩の領域に主として心を傾けて、形式は多くの風物をかりて來ない丈け單純な詠方ではあるが、内容は極めて復雑な理想を表示してゐる。それ故に風物の配置は至つて簡單でありながら措辭の餘りに腕曲でないに拘らず非常に釋義に苦しむやうな歌がある。たとへば

とゝめおきて誰をあはれと思ふらむ
　　子は勝るらむ子は勝りけり
おのが身のおのが心に叶はぬを
　　思はゝ物はおもひしりなむ
身のうさも人のつらさも知りぬるを
　　こは誰が誰を慕ふなるらむ

といつたやうなもので、何等風物の配置はない、純然たる舒情詩であつて、辭の上に些も飾りちらしたあとはないから、形はいかにも單純に見えるが想は崇高な理想を表示してゐるので頗る複雑である、而

してこれが彼の特色ともいふべきところに相違ない。併し彼が作中で辭の上の工夫を凝らして、形式上に複雜を來した歌がたゞ一首ある。それは、

千載集秋上

人もがな見せも聞かせも萩がはな
　咲く夕かげの蜩の聲

といふので初句へ意味の轉還して行く間に、『見せも』と『聞かせも』とに對する風物が箇々別々にあるのは、舒景詩としても體が餘程かはつて居る。さて形の上の複雜なのは殆どこれ一首で、あとは想の方がみな複雜であるといふのは、約りその詩風は理想の方面に傾いて居つたもので、或は難澁迷晦の失點を生ずるかも知れない丈け、又一方には金言に富んで居る、一句々々が美妙の眞理をいひあらはして居る、斯いふ風であるから四季の歌には傑作がない、自分が傑作と感じたのは第一哀傷歌第二雜題歌第三戀歌第四離別歌である。哀傷の歌は殊に愛子小式部を亡つた以後の歌、及び戀人たる爲尊親王を亡つた以後の歌、この二つに關した時のものが一番すぐれてゐる、併し彼の哀傷歌がいゝといつても一體の歌が悲觀的ではない、たゞ人情の至微をうつすといふ心理的の鋭いところに長けて居る、從つて戀歌でも圓滿な戀をうたふのよりも、戀のさとりといつたやうな理窟のあるものゝ方がうまい、今その例證を一つ二つあげれば

玉葉集志五

かはらねば文こそみるに哀れなれ
　人の心の跡はかもなし

夕暮は人のうへさへ歎かれぬ
　待たれし頃に思ひ合せて

續千載集雜上

うらむべき方たに今はなきものを

いかで泪の身に殘りけむ

後拾遺集戀四

世の中に戀てふ色はなけれども
深く身にしむものにぞありける

我といかにつれなくなりて心みむ
つらき人こそ忘れがたけれ

此等は戀に醉ふたといふ上の戀歌ではなく、戀にさめた後の戀歌であるから、『人の心の跡はかもなし』とか『戀てふ色の身にしむ』とか『つらき人こそ忘れがたけれ』とかいふのは一つとして戀愛哲學上の至言でないものはない。又斯いふ理窟をはなれて極々我國歌にあり勝の一種の頓才に就ても、實にわざやかに甘いところがある。

君こふる心はちゞに碎くれど
一つもうせぬ物にぞありける

泪川おなじ身よりも流るれど
戀をばけたぬものにぞありける

道貞にわすられて後みちの國のかみにてくだりけるにつかはしける

諸共にたゝましものをみちのくの
衣の關をよそにきくかな

花さかぬ谷の底にもすまなくに
ふかくもものを思ふ春かな

和泉式部が加茂にまゐりけるにわらうづに足をくはれてかみをまきたりけるをみて

千早振かみをば足にまくものか　　神主忠頼

これをぞしものやしろとはいふ　　和泉式部

といふので『一つも失せぬ心』とか『泪が戀とけたぬ』とか『谷の底』とかけて『深く物を思ふ』とかいふ類さては連歌の『下の社』など一種の頓才で多くの歌人に

は慣用されて居るが、式部のつかひ方はきび〱しく上手で些の難澁のあとがない、これはたしかに其才氣を證明すべきものである。

こゝに於て彼是の例證から其如何なる詩人たる事を歸納してみると、彼は位置に於ては小町以後の第一流の女詩人、風姿に於ては純主觀派の詩人、理想詩の舞臺にあつてはむしろ小町以上のところがあるといつていゝ、たゞ戀愛詩などの熱情が乏しいのは小町などとは異る點であらうか。（完）

通俗土佐日記（承前）

北海道廳師範學校教諭　兒玉彌三郎

斯く上る人々の中に、京より下りし時に、皆人子ども無かりき、到れりし國にてぞ、子生める者ども有り合へる、人皆、舟の止まる處に、子を抱きつゝ下り上りす、

○斯く上る人々　とは京の近づくを喜びつゝ上る從者等一同を指せるなり、

○京より下りし時に云々　紀氏に隨ひて下りし時には、從者の妻に子なかりしものども、任中に子を生めるものども多しといふなり、

○到れりし國　とは土佐國なるを例の愼みて明言せざりしなり、

○有り合へる　とは其の多きを思はせたるなり、

○舟の止まる處に　とは舟の夜泊まる處は勿論、途中にても時々止めたるをも併せていへるなり、

○以上は、紀氏の愛兒、下向の時には伴はれたりしに、土佐にて死亡せしかば、此の從者の妻等は之れに反して子を携へたれば、下文復た亡兒のことを言はん爲めに書きたるなり、其の羨ましさ察

するに餘りあり、若筆亦頗る巧みなりといふべし、

之れを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、

　無かりしも有りつゝ歸る人の子を
　　有りしもなくて來るが悲しさ、

と言ひてぞ泣きける、父も之を聞きて、如何あらむ、斯樣のこと、歌好むとてあるにもあらざるべし、唐土にも此國にも、思ふことに堪へぬ時のわざとか、

○昔の子の母　とは紀氏の室なるを、是れも紛らして書きたるなり、

○無かりしも云々　有無は子の有無なり、

○人の子を　とは廣く從者等の子を指せるにて、をはであるにの意なり、

○有りしも無くて　は亡兒のことなり、

○一首、深く亡兒のことを歎きたるにて、不幸なる任の歎きに又此の悲哀さへ加はれるをいふなり、

○如何あらむ　とはいかばかり悲しかるらんといふにて、記者の女、父の心中を察したる詞として、悲しきは母のみにあらじとの心を書きたるなり、

○斯樣のこと云々　是れも記者の評なり、愛兒を亡ひたる如き總て死別を一括していへるなり

○歌讀むとて云々　いかに歌ずきなりとて、歌を多く讀みたるにて濟まさるべきものにはあらじとの心なり、あるにもは濟むといふ程の意なり、前後此の亡兒に關する歌多ければ、記者の女が其れを誹りたる樣に書きたるなり、

○唐土にもこゝにも云々　和漢詩歌共に、唯思ふに堪へざるときにこそ作れ、其の餘は、聞く人に

も遠慮して、讀みたくとも忍ぶべしとの評なり、是れ亦紀氏の自記ならざる樣に、紀氏夫妻を第三者としたるなり、

今宵、鵜殿といふ處に泊まる、

○鵜殿　は前に出でたる鳥飼御牧の附近なり、

○此處も、都へ早く歸らんと思ふに、其れに反して泊まれる歎きを示せるなり、

十日、障ることありて、上らず、

○是れ何の障りなるか知り難し、思ふに紀氏か其の室かの、亡兒の歎きの爲め昨日來病起りて、人人看護せる故にてもあるべし、然らざれば、斯くまで急げる舟なるに滯留する筈なし、

十一日、雨聊か降りて止みぬ、

○是は昨終日舟を止めたるなれば、今日亦雨の爲めに舟出し難きにやと懸念したるに、意外に早く止みたるを喜びたるなり、

斯くて、棹し上るに、東の方に、山の横ほれるを見て、知れる人に問へば、八幡の宮といふ、之れを聞きて、喜びて、人々拜み奉る、

○山の横ほれる　とは今の横たはるといふにて、山の、横に長く引けるをいふ、男山の横たはれるなり、

○八幡の宮　は男山の石清水八幡宮なり、

○喜びて　とは年來拜み得ざりし宮を拜むことを得たるを喜びたるなり、

山崎の橋見ゆ、嬉しきこと限りなし、

○山崎　は後に大渡といへるにて、昔は淀の橋無くて此處に橋ありしものなるべし、古は此處にて舟の乘り下りを爲しゝが故に、此處にて上陸し得

らるゝことを思ひて嬉しさ限りなかりしなり、

此處に、相應寺の邊りに暫し舟を止めて、兎角定むることあり、

○相應寺　は山城國乙訓郡に在り、權僧正臺演、奇縁に因りて舊佛像を得、遂に此の寺を建立したるなり、

○兎角定むることあり　とは上陸すべき支度、入京の用意等の爲め、屬官從者等に談じ且つ命じたるなるべし、

此の寺の岸の邊りに、柳多く有り、或る人、此の柳の影の、川の底に映れるを見て讀める歌、

さゞれ波寄する紋をば青柳の
影の絲して織るかとぞ見る、

○さゞれ波　はさゞれ石などの如く小さき波といふにて、後世さゞ波といふは省けるなり、

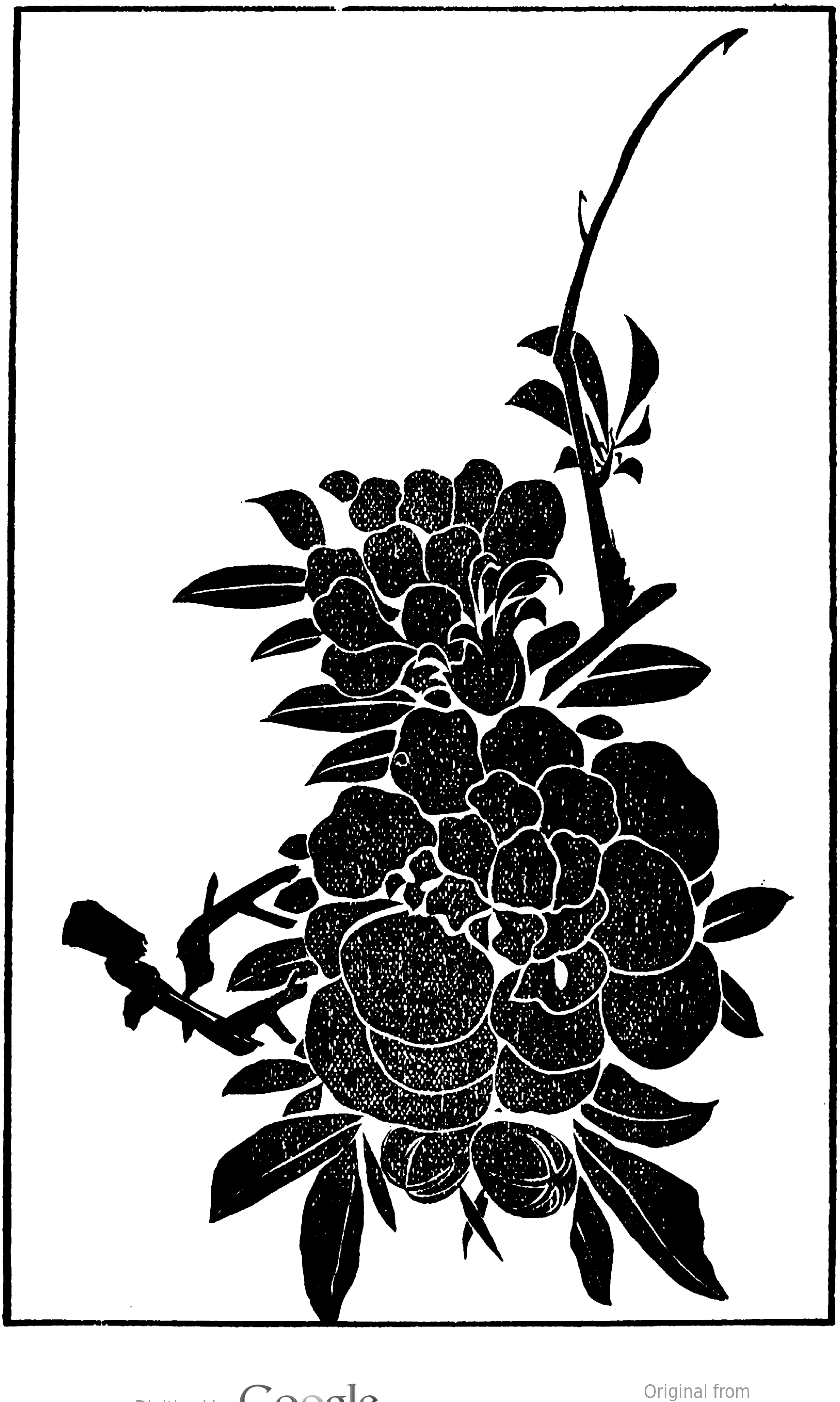
○寄する紋　とは小波の仕わざにて寄する模樣なり、

○青柳の影の絲云々　は青柳の水に映れるを絲と見立てたるなり、

○一首、小波の作用にて織る綾なるを、影の作用の樣に見誤まりたるを、我が眼の明なき爲めと淺間しく思ひたるなれど、寓意は、人の身の上にも斯かる類ありて、甲の功を乙の功に見做さるゝ場合に、甲の心に口惜しかるべきが如く、今此のさゞれ波の心いかに口惜しく思ふならんとの心にて、紀氏の身にも嘗て這般の境遇ありしものなるべし、

和畫通信教授

山崎隆子





職業及び娯樂

女子高等師範學校教授　後閑菊野

女子の職業に關して、私の考ふる所に依れば、一體日本の婦人は、其營むべき業務の割合と云ふものは餘り過重に失するではないかと思ふ。乃ち一人前の人間として爲すべき仕事の外に、婦人として擔當せねばならぬ事柄も多量あるからである。言ひ換ゆれば、一家に於ける業務は、殆ど巨細輕重の別なく婦人が擔任せねばならぬと云ふ工合で、少しも力を他に伸ぶる餘裕を有せないのである。であるから特別な管理者を置く所ならば兎に角、其他の家庭に於ては、業務多くして人手の足らぬ結果が、女子本來の任務と云ふものも自然粗略に陷らざるを得ざる譯である。殊に日本人は外國人とは慣習抔も大に違つて、其生活は不規則に成立つて居る故に、自他の業務上種々不都合なことも生ずるのである。例令ば訪問時間と云つても、

別に一定しては居らぬ。だから何か鳥渡業務に就いて居ると云ふやうな場合でも、之を中止して來客を迎へねばならぬ。之が爲め不體裁、不利益を來すことも尠なくはない。かゝる弊風は追々改良して往かねばならぬ事と思はれる。西洋抔に於ては、訪問の時刻は一定して居る。其時間中は、人を訪問しても、又他の訪問を受けても差支ないやうに、一定の制裁が有りて、之が社會を司配して居る。我國のやうに何時でも氣儘勝手に往來すると云ふ様なことは、爲ないし又出來ない。要するに、婦人の負擔を今少し輕減すると云ふ事と、不規則な生活を規律正しく改善すると云ふ事とは、我國の社會改良上決して忽諸にすべからざる事である。



次に如何なる業務は婦人に適すべきやと云ふに、第一は教育家となると云ふことである。婦人は誰人でも一度は必ず子女の教育に當らねばならぬものであるから、縦令直接に教職に就くものでなくとも、子女の教育法と云ふものは、是非一と通り心得て居らねばならぬ事である。且つ教育家中に在りても、小學教師抔は婦人は殊に適任であるやうに思はれる。日本では未だ教員に女子を衆く採用して居ら

ぬが、歐米にては小學校教員抔は寧ろ女子の方多數であるさうだ。獨り小學校のみならず、高等女學校抔も矢張りさういふ風で、夫等の校長等になつて居る婦人も數多あると聞いて居る。かゝる事情なれば、我國でも將來女子の教員を衆多養成することは肝要なことで、有益なる職業を求めんと欲する女子は、今後大に之を志望して欲しいものである。又婦人の職業としては、音樂、裁縫、繪畫の如き技藝や、女醫者のやうな職業は最も適當であらうと考へる。特に小兒科、婦人科の如きは女醫に適して居るに相違ない。これは現今の處では極少數で衆多ありませぬけれど、今後大に奬勵して然るべき職業と信ぜられる。

併し將來婦人の職業を大に擴張し且つ發達せしめんとするには、一般婦人に對して、之が基礎となるべき職業的教育即ち實用的智識を十分授けることが何より必要である。就ては公私各女學校とも今少し實際に役立つやうな教育を施すやうにしたいと思ふ。どうも現今の狀態では、高等女學校の如き、主に中流以上の家庭に生活すべき奧樣風の教育で、實用的方面より見れば、隨分立派な學藝は修めたが、家政の實務には却て不得手であると云ふやうな弊害がないでない。考へて見るに、右は畢竟日本の家庭教育がまだ不完全で、家族の如きも教育思想乏しき者多きより起る結果だらうと思はれる。今日では、當然家庭にて授くべき教育までも、皆學校に於て擔任せねばならぬといふ實況である。夫れ故教授の方に比較的骨が折れるので、應用實驗の點に十分手を伸ばし得ぬのは已むを得ない。西洋にては家政上の智識慣例は家庭に於て仕込まれるから、學校に於ては特別に之を教授する必要はない。從つて夫れ丈けの勞力時間をば他に使用するといふ利益がある。此點は日本と歐米とは餘程趣を異にして居るやうに考へられる。私等の學校

に於ては、數年前より特に家事專修科といふものを設け、之には高等女學校の卒業生を入學せしめ、其學科の如きは生徒の志望に應じて自由撰擇に任せてあるから、誰人でも十分に希望の職業的教育を修むることが出來る。之が若し我國現今の女子教育の缺陷を補ふ一機關ともならば至幸である。方今の女子教育は全體より之を見れば、公私各女學校共概して貴族的の教育法を施して居るといふ弊は免れ難ひ。之は一は教師たる人物の伎倆經驗にも關することであるが、現時の女教師は一般に多方面の智識に缺けて居つて、大抵其管掌する所の學藝丈けに達するのみなれば、その結果學科を多く分割して教授せねばならず、分割して教授すれば、從つて時間の使用上にも頗る不經濟を來すことを免れぬ。科目の多いのに加へてか丶る現況であるので、應用實施の方面に對して十分盡し難いのは遺憾な譯けである。願はくは、公私各女學校共今後は今少し學科の負擔を輕くし、力を實驗應用に用ゐ、生徒の修得したる智識が可成多く實効を擧ぐるやうに致したいものである。

人間は一方に重大なる業務を帶びて身心を苦しめる已上は、其疲勞せる身心に休養を與へ精力を回復することも亦た緊要である。で女子の娯樂につきて少々述べて見やうに、之も我國の家庭に於ては、之を求むべき道は大に缺けて居る。西洋杯では、公會と云はず、私宅と云はず、音樂は大變盛に行はれて、貴賤を問はず、大抵皆樂器を備へ附けて居る。遊戲の時刻に至れば、家族一堂に集ひ來りて、親が樂器を採りて奏すれば、子女は之に合唱し、一個の樂隊は忽ち其處に成立するといふやうな工合で、その他利益もあり、興味にも富める種々の娯樂が多種ある。然るに日本では此等の道は未だ發達して居らぬ。何とか良い方法

を設けたいものだ。最も之には經濟上の關係もあるべく、職業上の都合もあるべく、一概に批難することは酷であらうと思ふけれど、兎に角日本の婦人は今一層音樂的修養を積み、嗜好を培ふやうに注意して貰ひたい。夫れから四季折々の好時節には、婦人同志互に連れ立ちて近郊に出で、散策、運動、探勝、實驗抔を試むるとも、確かに高尙なる娛樂の一と考へられる。又和歌の會合抔を催して、語學を習ひ友誼を結ぶのも惡いことではあるまい。又近來は室內遊戲用のテニス抔も出來てあるから、此等も家庭の一娛樂法に供せられる。其外四季と云はず、講學の爲め憊れた頭腦を時々運動散步に出掛けて慰むるといふ事は、生理上に於ても極めて肝要なことである。日本の婦人は一體引込み勝ちであつて、已むを得ぬ事でもなければ、外出することを忌がる癖がある。成るべく氣を附けて矯正せねばならぬ。又婦人仲間の交際抔も今少し奬勵して盛にするが宜からうと考へる。女子の運動に關しては、學校に於ては銳意奬勵して居るので、往時のやうな不規則なことは許さない。然るに一旦學校を卒業して他家に嫁ぐといふと、前日と全く反對の生活を爲し、運動も散步も總べて懈りて來る。殆ど全く廢止する樣な人もないでない。殘念な次第である。這は我國家庭の事情之を許さゞるより起る弊で、結構なことでは勿論ありませぬけれど、さればとて一時に改革することも困難である。現今の生活狀態では、婦人は專ら家庭に在りて、力を家政に盡し、可成僕婢の手を藉らざるやう自ら働き、以て一家の富强和樂を計ることを以て最大任務と爲すべきである。さう致せば、自然肢體の運動も助け、又一方に於ては幾分か家計の補ひにもなる譯けで。此等は先づ現時日本の家庭に適合し、何人でも實行し得らるゝ事柄だらうと思はれる。

女子の手藝に就き

實踐女學校副校長　青木文造

多年貴社が女子教養に資せんとの熱誠より發刊せられたる雜誌女鑑は、今般改善を計られんとの企てありて、其の一端として、女子の手藝にも獨習の便を計らんとて、其の向々の人の投稿を寄せくれよとの申し入れは、先つかた承知致し居りしが、生憎暑中休暇にて、其れ等の人々或は歸省、或は旅行など致し〻ゆゑ、各の行先に書面を發して原稿を求め置きしが、何分八月末日までには間にあひかぬる恐ありて、空しく貴囑に背かんことの本意なきにより、御斷りかたぐ、右手藝に於ける短見を陳べて、小引に換へんとす、記者幸に之を諒したまへ。

元來本邦の女子が、其の手藝として研究し來りしものは、主として裁縫の一科に屬し、其の傍、少しづつ刺繍、或は押繪等を學ぶもありしが、是等は女子全體の上より云へば、極めて少數にて、殊に之等を學ぶの輩は、稍資財ある家の女子に限られたるが如くにして、申さば一の慰み稽古の如くなりゆきしは、都鄙其の轍を同くせしが如し、されば造花または編物、其の他の如きは、只其の向きの職人のみが、僅に其の技を修むるに止りて、一般女子には殆んど用なきもの〻如く看過されたり、尤も裁縫科の女子に必要なるは、今日にても尙他の手藝に比して、一般家庭の望を屬すること重きにあるにも關らず、其の研究は單に新しき反物の裁ち縫ひに止り、補綴または美術上の關係などは、全く女子各自の才幹に任せたるは、人皆今更の如き感も多かるべし。

此の如く女子に最重要と感じ來りたる裁縫すら、其の教授の上に至りては、尙不備の感なき能はず、況

して其の他の研究に至りては、從來女子の身上に於ける總ての方面に就き、其の結果の如何なることなど顧みるものなかりしは、是れまた餘儀なき次第なりしが如し。

この頃教育の進步に付ては、百般の教養上まづ身體の健康を保つを基として、手腕の研究之に次ぐと云ふ有樣なれば、百般の教授も改良より改良と唱導せられ、隨分もの珍らしき器具も出で來ぬれど、是もまだ完き望を達せんこと頗る難きが如し、されば手藝の研究の如きも、各自に尙充分の研究を積み、其の得たるところは、兎も角之を世間に公にして、互に智識交換の實を擧げんこと最も肝要なりとす。

說くもの曰く、各自の研究は、今日頗る行はれ居るも、漫りに之を公にすれば、批評の聲四方に沸き、忌む者は却て之を以て同業者を誹謗し、或は之を冷評して獨自高ぶるが如きは、世間その例少なからず、故に研究の眞價は割に收得し難きが如しと。

然り、世間には往々此の如きつまらぬ人物少しとせず、然れども是等の人を恐れて、各自に尻込みするは志あるものゝ敢てすべきことに非ず、故に余は志ある人が漸次教授の順序を研究して之を有りのまゝに寄稿し、一は以て獨習者の便を計り、一は以て斯業の上に一發達を期せられんことを望む。

尙特に一言したきは、今日の女學生が漫りに冊子を繙くことのみを事として、學校の卒業證書に滿足し、父兄もまた其の女子の前途を鑑みるの明近きに走るの弊わらんこと是なり、顧ふに今日の日本は、まだ中流家庭の女流が、單に交際場裏にのみ狂奔して爲濟したりと思ふべき時に非ず、又單に學理の研究にのみ汲々として、獨り理想をのみ高むべきの時に非ず、要は邦家の財源を扶殖して、今少しく社會の活動を進むるに在るなり、或は云はん、普通の知識を養

はずんば、技藝あるの女子また何の用をか爲さんと、其れ然り、技藝者はまた其の技藝に必要なる智識を要し、且つ女子としは嗜むべきの智識は、素より備へざる可らず、然れども學習年限は、無期限のものに非ず、故に其の歲月を打算して異日女子の天職を盡すに於て、又其の身分の如何に鑑みて、教養の道を研究し置くべきは父兄たるものゝ須臾も忽にす可きところに非ざるべし、然るを今日の女流は動もすれば、淺薄の教育を高として、女子の天職たる業務を輕んずるの傾あるは、識者の常に憂るところたらずんばあらず。



蓋し今日の日本に於ける中流の男子にては、多く衣食の爲に奔走するものにして、一たび其の職を失へば則ち垢衣破履、僅に飢寒を凌ぐにさへ困苦を訴ふるものを見るに非ずや、然るに其の職に在るの日に於ける生計を察すれば、男子の狂奔に對して、女子は充分に内助の實を擧ぐるもの多きかと云はゞ、否定の聲都鄙共に少しとは云ふ可らず。然らば其の婦人の素養はと問へば、曰く何々學校の卒業生なり、曰某校にありし時の優等生なりと、嗚呼是等は果して女子の本分に向ひて、卒業生たる可き人か優等生とて厚遇せらる可き人か。

されど、此の如きは獨其の女子たるもの丶みの過とも云ふ可らず、寧ろ敎養の時期に於て、黽勉事に當るの習慣を養ひ置かざりし罪に歸せずんば非ず。

以上陳べしところの事、皆人の解するところなるに、今日の女生にして、尙曰く手藝は末技なり、良家の子女たるものは、此の末技に汲々たるの用なしと、焉ぞ知らん、其の見て末技とする所のもの、異日却て一身を保つの基礎たるに至る塲合なきに限らざることを。

今貴社が女鑑の編輯に改良を加へらる丶に當り、先づ手藝獨習の便を計りて、勤儉の主旨を誘導せられんとするは、實に女子の習俗上、大に影響するところあらんことを喜び、敎授順序の集輯に先ち、聊一言を添へて、編輯員諸君の机下に寄す。

われときて遊べや親のない雀　一茶

家庭小話（上）

堀内新泉

（一）涼しき家庭

いかに結構に出來た家でも、風通しがわるかッたり、或ひは洒掃の行屆かぬ爲に、何んと無く暑くるしいやうな家もあれば、また極めて粗末な小ない家でも、風通しの善いやうに出來て居り、洒掃が行き渡つて居る爲に、太く涼しさうな家もある。

これと同じやうに、いかに立派な邸宅の内に起臥をして居らうと、また何んな贅澤をして居らうと、家族の間に一片の涼しい風が吹き通はずに、召使ひのものまでが、常に主人の殘酷しい待遇に堪へかねて、はッ〳〵と熱い息を吐くやうでは、他の見た目も何んと無くその家は煩熱さうだが、況んやこんな家庭に親しく起臥して居る人は、恰是夏の日盛に、

風通しの悪い家に住んで居るのと同じやうに、毎日心に一種の苦痛が、深く食ひ入つて居るに違ひ無い。

これに反して、家は何んなに粗末であらうと、また如何やうに貧しからうと、一家常に和合して、家族の間にソヨ〳〵と、一片の清涼しい風が吹き通ふて居らうならば、他所の見た目も如何に涼しく、また親しく起臥をして居る人は、翠吹く濱松風の音を枕に、スヤ〳〵と午睡の夢を結んで居るやうな氣持がするに違ひ無い。

さて、石菖の葉も凋れるまでに照りつける炎暑をば、涼しく凌ぎ得られるやうに爲やうと云ふには、先づ家を風通しの好いやうにして、常に清潔を旨とするに在つて、睦じい涼しい家庭を作らうと云ふには、一家互ひに親切に、我が赤心を盡し合つて、家族の間に何日も〳〵、絶えず一片の濱松風の吹き止まないやうにするのであらう。

（二）兒童と植木

或る老人は斯う云はれた――。

兒童教育と云ふことに就いて、近頃大分いろ〳〵なお説があるやうですが、私どもの考へでは、兒童を育てるのも、植木を育てるのも、つまりは同じ理合のものだと思ひます。私は植木を育てるのを、不斷樂みの一ツにして居りますが、いろ〳〵工風を凝して遣つて見ると、實に興味のあるものでございますよ。

先づ一本の若木を移し植ゑましても、これに四方から突張棒をして置くと云ふと、木は直ちにその棒に依頼して、風雨の節に自ら働きませんので、突張棒をした植木は、根の張方が甚だおそいばかりで無く、若し中途にして、突張棒を取去れば、わづかの風にも堪へかねて倒れ、少し旱に會つても、水分を

吸收する根の張方が足り無いために、直ちに枯れて仕舞ひます。

人もまた丁度この通りでして、小兒の時から餘り父兄が大切にして、突張棒を仕過ぎると云ふと、その兒は直ちに依賴心を生じて、少しも獨立自營と云ふ、これあればこそ世の中を濶步することの出來る大切な氣慨を自ら養成仕ない。これを木にたとへて云へば、少しも根をば張らないのです。

それでは何うすれば、若木は、その根を張るかと云ふと、勿論他にもその原因はありますが、常に烈しい風雨に揉まれて惱むのが、根を張る一ッの藥です。人も早く獨立して、いろ〳〵な困難な場合に出あふ度毎に其の人物をあげるのです。そこで私の植木の育て方は、初めから突張棒をせずに、充分風雨に揉ませるやうに仕けるので、我が家庭の兒童敎育法は、幼少の時から兒童の心に、成る可き突張棒をせぬやうにして、少しも早く獨立心を養成させるやうに仕かけるのでございます。

少しお話が重複するかも知れませんが、植木を枯さないやうに爲やうと云ふには、一本でも多く根を張らせるのが肝要でございます。根さへ十分に張つて居りますれば、風が來ても雨が來ても、また何んな旱に會ひましても、容易に枯れるものではありません。それには只今もお話を仕たやうに、成るべく他から餘計な突かひ棒を爲ないやうにして、多年風雨に揉ませておくと云ふと、木は自からその間にしつかりと根を張つて、何んな暴風雨にも、また何んな大旱にも、よく堪へ得るやうに成るのでございます。

さて珍重すればこそ、我が家の庭にも移し植ゑて、朝夕眺める植木に向つて、突かひ棒の一ッもせずに、多年風雨に揉ませるなどゝ云ふのは、いかにも

愛情の乏しいやうに聞えるかも知れませんが、是非ともこの木は立派なものに仕立てやうと云ふには、この仕方が最も妙だ、と我が多年の經驗上から堅く私は信じます。

我が兒を教へ育てるのも、また丁度こんなもので、是非ともこの兒を一廉の人物に仕立てやうと云ふには幼い時から勵まして、獨立自營と云ふ、人に取つて最も貴い氣概の根をば、胸一杯に張らせるのが、何より以て肝要なことだと思ひます。人は胸にこの氣が十分充滿ちてゐりますれば、假令何んな困難なる場合に臨みましても、決して脆く屈するものではありません。それには成る可く幼少の時から依賴心を起させないやうにして、多年世の中の風波に揉ませておくと云ふと、工風にも富み、勞働にも馴れ、また世事にも次第に熟練して、即ち諸方に我が一身を支へる丈の根を張つて、何んな困難に出會つても、見事打勝つことの出來るやうに成ります る。

さて可愛我が兒に、此方から求めて苦勞を爲せると云ふのは、少し慘酷なやうに聞えるかも知れませんが、是非ともこの兒を人物に爲やうと云ふには、この教育法が最も妙で、世話に謂はゆる「可愛兒には旅をさせろ」と云ふのは、植木ならば突かひ棒をせずに、多年の間風雨の揉ませて、早く我が一身を支へ得る程の、根を張せよと云ふのであらうと思ひます。

(三)兒童と寒牡丹

また我が小園中の寒牡丹に就いて、前のと殆んど同じやうな小話を聞いたことがあつた――。

昨年十二月七日の朝だつたと思ふ。隣家の老人は白髯を撫しながら自分の宅に見えて、今やそろ〱と霜の溶け初めた掌大の庭を眺めて云はれるには、

「あゝ此方のお庭の寒牡丹には、嚴重に霜蔽がしてありますな。牡丹を思つてわざ〳〵成さつたのではありませうが、ためして御覧なさい、霜蔽をしたよりは爲ぬ方が花の色が美しいです。ハヽ、寒牡丹を育てるも人を育てるも同じことですな。」

自分は深く老人の忠告を謝して、二株の牡丹の中、試みに一株は霜蔽を撤し、一株はその儘にしておいた。

所が今年の一月初旬、庭に二輪の紅を見るに及んで、老人の言葉の通りに、一ッは秀でゝ色美しく、而して大切に霜蔽をしておいた方は、遥かに色が劣つて居つた。



（四）家庭と娯楽

「樂み無くては勤まらぬ」と云ふこの一語で、何んにも申す必要は無いが、よく世の人の云ふことを、その儘此處に書いて見やうか、——。

激しく廻す機械には、是非とも時々否な屢ば、油を注さねば成らぬやうに、人も亦激しく勞働ぐばかりでは、所詮身體がつゞかない。折ふしは氣になぐさみを與へて、精神を新に仕ないと云ふと、油の切れた機械を無理に使ふがやうに、所々方々が毀んで來て、再び修覆の出來無いやうに成つて了う。

而て見れば折ふしの氣保養は、徒らに遊ぶ爲では無くて、後日大いに稼がん爲で、斯う云ふ遊びは個人に取つても、また一家に取つても、實に大切なことである。人は何が一番大切だと云へば、おそらく身體の健康であらう。然るに我々の身體は、たゞ美食や適度の運動ばかりで、何時も健康で居られるもので無い。イヤ身體はそれで保てるだらうが、氣は單に美食や運動ばかりでは養はれない。言ひ換へて見れば、身體の滋養物は食物であるが、精神の滋養物は娛樂である。氣のなぐさみは、能く人の心を轉じて、能く人の心を養ふものだ。娛樂の我々に必要なことは、勞働の我々に必要なのと同じことだ。而て見れば能く遊ぶ人は、即ち能く稼ぐ人で、能く遊ばない人は、即ち怠惰者だと云ふに近い。能く廻轉いて居る機械は、必ず油を要するやうに、まこと不斷よく稼いで居る人ならば、折ふしは自分の好きなことをして、心に娛樂を取る必要を感じなければ成らぬ筈だ。この必要を感ぜぬ人は、即ち何時も正直に稼いで居ない人であらう。

但しこゝに云ふ娛樂と云ふのは、清くして健全なるなぐさみを云ふので、卑しい遊びは眞似も善くない。然らば家庭的の娛樂としては、何んなことが最も適當かと云ふと、これは何うも一口に、それが好い、これが好いと云つて極める譯には行かぬ。人人に依つてその好む所は異つて居る。けれどもこれは何うか個人的の娛樂を一致させて、希はくば家族的の遊びにしたいと云ふのは、心ある人々の一般の理想らしい。皆研究して居られるやうだ。我々の小家庭に於いても、近頃窃かに遣つて見て居る。まだ今日の所では、その方法等に就いて、公然御披露するまでに成蹟はあがら無いが、兎に角一週中の土曜日の夜を樂んで、一家は待ちわぶ程に成り、小供な

ども不斷は成る可く金錢を無駄には遣はぬやうに成つて來た。

（つゞく）

女學生服裝談

梶田半古氏談

◎現今女學生の服裝は海老茶袴が目を惹きますが色も形もよく年頃の女子には適當して居ます。十年前私も其の色が好で、アノ色の袴を穿きました。尤も今のカシメルでは無く、或絹の厚い織物を其色に染めた物でしたが、其後彼方此方で女學生が穿くやうに成つたので、此度は黑色に染め直して今でも用ゐて居る位に海老茶色を非常に好んで居るのです。

◎で、此の袴の穿きやうにも、始めは多く紐を前で結んだのが、横で結ぶやうになり、次に結を隱して卷たやうなのが行はれるやうです。それから以前は胸高に穿たのが、近來男の袴の樣に下げて穿くのを見受ますが、之は矢張胸高の方が、其人の丈も高く見え自ら高尙の風になります、どうも下げて穿くのは、形もワルク甚だ下等な姿に見えますから以前の通にしたいと存じます。

◎又袴の後の紐飾を脫つたり、或は同色の紐飾を付けるのも有ますが、之も元通り白の組紐の飾が調和する樣に思ひます。

◎突飛な人は袴の裾へ二段或は三段位の襞を附けたのを見ますが、アレは甚だ醜いです、ハイカラ式の積りか知らぬが、どうも不調和千萬です、又裾を殊に短かく穿く人も有ますが、アレも衣物の丈位に足の先だけ現はれるやうに穿いた方が適當でしやう、袴の下から衣物の裾の見えるのもよくありませんから、袴を穿くに當つては充分衣物を短く端折つて穿くがよいやうです。

◎それから此袴には長い袖が調和します。學生が在校中に用ふるには、遊戲等の必要上筒袖の方がよいかも知れませんが、左もない時は長袖の方が立派です。袖の長さは大抵妙齡の人は一尺八九寸位がよく見えませう。

◎衣服に就て申しますと、夏は中形よりも飛白縞などが引ッ立ちます、凡て此袴は形よりも模樣ともつかぬ飛白のやうな柄が調和します。

冬は大概縞の秩父紬を用ひますが、質素に見えて艶で無い所が却て又た高尙なものです。

◎襦袢ですか、……以前は下へ白襟を着て、其上へ紅襟(但し無紋)を重ねたのが通常で、ソレを極めて堅く合して居つたが、實に正しく見えました。然るに近來形のある襟を用ゐますが、襟に形のあるため、自然襟を餘計に現はすやうにするので、前から比べると、どうも下品になつたと存じます。ツマリ

模樣の附いた襟は下等ですから、無論海老茶袴には適當しません。襦袢の袖は前には赤や淡紅色などが流行しましたが、今は白のモスリン等行はれます。之は今が進步して居るやうで、八ッ口に襦袢の白い袖がヒラ〳〵見えるのはイカニモ優美ではありませんか。

◎靴下の色はヤハリ海老茶袴には黑の長い靴下がよく配合します。近來色變りなものを見ますが、どうも黑でなくては不可ません。

◎次に去年あたりは前髮を極く高くして髱を詰めたのが流行し、髷も一時S卷が行はれましたが、今では前髮の低いのが持て囃されます。が之は以前のやうに高くするがよからうと思ひます。併しS卷は餘程適當するやうです。

◎髮飾は銀杏返しや島田から比べますと、實に簡單で釵一本に櫛丈けで濟みますが、釵は以前の花釵よ

りも、今の花束を挿んでさすのが高尚です。又以前から金屬製のものに玉飾をした品や、小さい造花を列ねた釵があります。前の玉飾の方は感服出來ないが、造花を列ねた方は質素でよい所がありますから、花束に代へて折々用ふるがよからうと存じます。

◎櫛ですか……左樣之も後差二枚を用ゐて之に大概ガラス玉などを列ねてあるやうですが、甚だ野卑ですから、寧ろ玉の飾りなどは無い方が宜しいです。それから之を洒落の積で一枚しか挿して居ない人もあるが、ヤハリ二枚でなければ立派に見えません。で又此後差二枚を用ふるには、髱さしの小櫛がありますが一枚用ゐたのも温順しく見えてよいものです。それに近頃出來た後差の二枚繋がつたものも、髱留を兼てはゐるし、見た處もいゝから追々女學生中に流行するでせう。



◎リボンも種々ある中に束髮の髷の下へ結んで、飾を用ゐたのがありましたが、之は十五六の小女に最もよく似合ふやうです。リボンの飾を用ふるならば、其色と釵の花の色とがよく調和するやうに注意することが必要だと思ひます。

◎頭にはなるべく油を用ゐないてとにしたいもので……尤も香料として香水位は宜いでせう。

◎肩掛……イヤ近頃夏期用のが出來ましたが、ソレは中々美くしいもので、奢侈に

流れる嫌がありますに依つて學生には如何でせうか。次に冬の肩掛は三角形のは不可ません。あれよりも細長い三角形のがよいやうです。又眞白な毛糸で襟巻のやうに細長く編んだのがありますが、白菊を長く列ねた如くに見えて、餘程高雅なものですから女學生には似合ふだらうと思ひます。之を留るには、ゴク小さな留針なども面白いが、近來出來た鼈甲擬ひの櫻の形や心臓形などは卑いから宜しくありませんです。

◎白粉も薄く裝へばよろしいが濃く塗れば下等に見えます。……ハア女學生の化裝といふことですか私の考では少しの化裝を施すのは決して惡い事ではなからうと思ふので……固より服裝に於ける彩色や形狀と申しますのも、即ち裝飾の觀念より來たのですから優美と云ふ點から化裝は許してよからうと考へます。

（完）

月見の食卓

岡野知十

月は八月十五日に限るのはむかしからではあるが、中には中秋はやゝ寒涼の氣が加はりすぎる、暑ならず冷ならず中元の月が最佳だとする詩人もある。暦が陰陽と並べ用ゐられる上に今年の樣に閏でもあると、中秋が十月になり後の月十一月となる、感じの上に何となく觀月の興が殺れる、後の月見などは自然に年中行事からのぞかれて仕舞ふ事にならう。月の賞翫は中元中秋のうち年一度に止まるやうにならう、芋名月も栗名月もひとつにならう。

月は團圓、家庭は團欒の春の花見に對しては、秋の月見は家庭のこよみには樂事のひとつとしてかぞへる

のはよろしい事であらう。折から豆も、栗も、芋、きの子も皆風味づく、家庭の月見には材料がたつぷりして居ます。そこで食膳の上につみあげべきものは、普通左の品々です。

(一) きぬかつぎ　(二) 枝豆　(三) 栗
(四) 梨子　(五) 葡萄　など

梨子、葡萄は水菓子なればそのまゝ、きぬかつぎ、枝豆、栗はゆでしまゝなり。

▲枝豆のゆでかた。景色に枝のまゝゆでるもよけれど、うまくゆでるにはひとつ／＼鞘のあとさきをはさみ、摺鉢に入れ手にてかきまはし、水にてあらひケバをのぞきのち鹽を加へてゆで丶笊へあげ、再び鹽少々を加へ火にかけてカラ煎をするなり。

▲きぬかつぎもゆで丶鹽をふりかけてもよけれど、もし八寸などへ用ゐ、酒の肴にするには、ゆで丶金網へのせ醤油をつけて燒くもよし。

▲栗もまだ走りにて、ゆで栗にするには高しとならむきてしぶかはをとり、フクメにあまく煮るもよろし。

これ等は他の食ものとのつりあひにてこれを主に用ゐるが、あるひはこれはとりあはせに、景色に用ゐるかは見はからひなり。

晩食後の月前の興にはこれだけにてよろしく、これに正宗、ビール、葡萄酒、平野水、ラムネ、などを適宜に用ゐるにまかす。

月見には『團子』を用ゐるとして、この團子はいかにするがよきか、白味噌の汁にもみ大根をあらひゆでてとりあはせとしてす丶むるもよろし、しかしそれも汁にてもるにうるさしとせば、串ざしにして醤油又は餡をつけるもよろし、家庭の月見にはこれがよろしからん。

これだけにても興うすしとせば、五もくずしよし、もし少し洒落れば鯖の丸ずし、又は鯖大なれば三枚におろしたるものを用ゐて壓酢につくるもよろし、鯖にかぎらず鮎、鰶などもよろし。魚ばかりで興なくば玉子、海苔適宜なり。素人の手製し易き酢の製法あり、左にしるす。

▲柱ずし　普通押ずしのワクよりは幅せまくワクをつくる（羊羹半棹の箱の底をぬきたるものにてよろし、底は直にその壓蓋に用ゆ）、これへ酢の飯をつめ、上へゴボウの丈長く切り味をつけしもの、そのほか適宜の種を入れ、蓋をしてグイト俎板のうへ丶押し出すなり。これをきらずに一本のまゝ皿へつける、田舎にて柱酢といふ。手輕くてよろし。



以上酢、團子、枝豆等にて家庭の月見には十分なるべし。

もし贅澤にすれば『アイスクリーム』などもよろしかるべし。菓子は最中、落雁、鹽煎餅、ビスケット、上等には和洋いろ〳〵。もし尚酒に吸物がほしくば蛤を用ゐ、下戸には豆飯、くり飯などもよろしかるべし。

一定の會席としての献立もあれど、畢竟卓の上は雜陳して團欒の興にはこの邊の處が宜しいと思ふ。

雜録

シャトルの一夜

元千葉縣高等女學校長　澁谷馬頭

三令孃、三教師、三女優
三職工

◎私は只今合衆國北部英領加奈太境のほとりに漫遊中でございます。で數日前からワチカム縣のフェア、ヘヴンと云ふ小市街に逗留致して居ます。此秋になりましたらシャトル市へもどりまして、それから桑港へ出まして、來春東部へまゐり歐洲へ渡る機會を手に入れたいと存じます。餘事はさておき御土産の三令孃談を申上る。

◎海より吹き來る風もなぎて、のどやかなる夕方、フェア、ヘヴンの町を離れて山の手に四五町、例のハーモニカを吹奏しつゝ、食後の散歩を致しました。ハーモニカは、出發の際に共益商社の樂器店から貰つて來たもので私が吹奏法を習ひ始めましてからまだ一月半にしかなりませんから、勿論人樣に聞かせ申す程には上達致しませんが散歩の折などには常に携帶して出かけますので御座います。人家はあちらこちらと二三軒づゝ有りまして、今しも乳牛は首にさげた鈴を鳴らしつゝ、おのが飼主の家へ急ぐ、否、あまり急ぎもせず歸る所です。

◎『箱根の山は天下の險』と云ふ曲を吹きすさびつゝ參りまして。『行かん方知らまほしくて』など、跡つけ

て來る古風なものずきもわれかしと心待ちに待つて參りますと、或家の門の邊に二三人集つて居る童どもが、連りに拍手して囃し立てます、其中の一人はやがて踊り出しました。

◎草葉の露にぬれる處までと、尙は奥の方へ進んで參りました。此度は私の吹奏しまする『クラレ』の曲に合せて、家の中から風琴しらべる音が床しく漏れて來ます。見れば怪しの板葺き板圍ひの小さな家で御座います。何者の住家でせうかと、ハーモニカ吹きやめて、とばかり家の入口に立ちとゞまり、かいま見ました。內にはいとなまめいたる、年頃の令孃が三人居ました。心地惑ひにけりと云ふわけでも御坐いませぬが、令孃たちがカム、イン（這入れ）と申しますから、當國の風として、若い男女同士が相訪問しあふのも、別に遠慮すべき事でもないと聞いて居ましたので、早速はいりまして、與へられた席に着きました。一人はミス、ベル、ベルフォードと申しまして此家の令娘、一人はミス、ベッセー、一人はミス、スカット、ともに兩隣の令孃たちです。其職務を聞きましたら、皆學校の敎師だと申しますので、私は愈々落着いて話こみました。

◎シャトル邊では佛語を話すのは娼婦（重に佛國人だと申ます）ばかりだなど聞いて居ましたが、まさか左樣でもあるまい、特に此令孃たちは學校の敎師などするならば佛語を話さない事もあるまいと思ひまして『パーレー、ヴ、フランセー』（汝は佛語を話すか）と問ひかけましたら、佛語で『ウイ』（然り）と云ふ嬉い返事を得ました。そこでマルセーイユズの歌を歌つてくださいと、重ねて佛語で申しましたら、所がこのたびは意味が通じませんのでいさゝか失望致しました。英語に云ひなほしましたけれども其歌は知つて居ないと申しました。で、私に歌へるかと

申しますから、此所ぞと私はキリスマン師から教はつた得意の十八番を歌ひ、且つ風琴をおやつりましたら、令嬢達はキマリわるげに私をうまいと譽めてくれました。それからミス、ベルフォードとミス、スカットの母上たちは獨逸人でありましたから、二嬢も獨逸語を少し話しますと云ふ事で、私も困りました。獨逸語と來ては一向わかりません私は甚だ困りましたけれども、わざと平氣な顔を作つて『それでは獨逸の國歌ヂイ、ワッハト、アム、ラインを歌ひませう』と出ましたのです。令嬢達は此歌も曲もおあひにく様で、私が歌つても和する事が出來ませんのです。併し私は令嬢達が佛獨の國歌を知らないからとて、輕蔑する考へは少しもありません。我國などでは紳士貴女にして『君が代』を歌へないかたがありますと云ふ事ですからネ。各國の國歌を集めた書籍は、何とか國歌集と云ふ標題で共益商社に賣つて居りますから、どうぞ皆様御覧あそばせ。

◎さてそれから打ちつれて英國のゴッド、セーヴ、ゼ、キングを歌ひ、終りに米國のヘールコランビヤを歌ひまして、令嬢達の機嫌を取りました。米國に來ましてから此ブコツ男のうまのかみも、少しは交際術を覺えましたかの如くに自ら感じました。いろいろ米國の國がらをほめまして、又米國の品物をほめまして更に進んで令嬢達の容貌をほめましたら、上機嫌になりまして『あなたの目に左樣見えますか』と嬉しがつて申しますのでございます。我國の令嬢たちに向ひまして『御奇麗な御器量でいらつしやいますこと』とお譽めまをしたら、令嬢たちの御顔は時ならぬ紅葉をお散らし遊ばして『だう致しまして、私のやうなおたふくが』と仰しやいますでございませうが、其所が人情の違ひと申すものでございませう。令嬢達は日本の事物を別に譽めもしませんで御

坐いましたが、それは日本と云ふ事をよく御存じないからでございませう。しかし日本出來の製造品を珍重致します。第一日本の錢をくれと申すので五錢のニツケルと十錢の銀貨とわりましたからやりました。又日本の郵便切手も欲しがりますので三四枚持ち合せのものをやりました。郵便



切手を出すとて、私が懐中をさがしましたら、國から昨日か一昨日か到着しました端書が一枚出ました。これは私が澁谷村の住居で召使ひましたなかチヤンと云ひます女中から來ましたのです。これを令孃たちが見まして、『ネーそれは日本の私レイディからよこしたのでせう』と申しました。

は「如何にも左樣です、マイ、デヤ、シスターからです」と戲れて答へました。中々察しの早いには驚きました。

◎私もいろ〳〵令孃たちの寫眞其他をもらつて、別れ惜うございましたけれども、夜にもなりましたので再來を約してやどへ歸りました。其翌々日約を踐んで三孃を訪問致しました。いろ〳〵面白い遊びをして歸りますときに、日頃親しく海邊や林中に、あそびあひて連れて行つた、九つか十位の小僧等三人に出會ひまして、小僧等の云ふ所をきゝますれば、ミス、ベルフォールト等は學校の敎師ではなく、時々ワチカム町やシヤトル市あたりへ女役者になつて出かける事があり、又はホテルなどで忙がしい時に給仕人にたのまれる事もあると申しますので御座います。越えて昨日になりまして私は、ミス、スカットが腰辨當で、鮭の罐詰製造所へ、働きに出かけるのを見ました。(七月二十四日夜、米國ワシントン州ワチカム縣フエアヘヴン町テンス、ストレート、マッケンジ、アヴニウ、某番地、ニウヨーク、ハウス、第四號室でかきました。うまのかみ)

富士登山の記

女子美術學校幹事 指原乙子

不圖語り出せしことの眞となりて、葉月中の一日といふに、敎頭谷紀三郎氏、學生淺岡とき子、及川かつ代、片岡ゆう子、幷に谷氏の兄君と、一行すべて六人、卯の時ばかりに新橋を發して、御殿場に向ふ。ゆき〳〵て大船に至れば、鎌倉、逗子、横須賀行は乘替と叫び、出でつ入りつする人多く賑し、暫時ありて車は復大磯に着く、德川家手荷物との札に、不圖心づき窓より見出せば、今しも師の君棚橋絢子刀

自、侯爵家の方々と打つれて、彼方の車に入り玉へり、切に訪ひ參らせたく思へど、一人のみおはすならねば、無禮と思ひて打ち噤みぬ。此方は茅ケ崎、彼處は馬入川よなど聞くうちに、箱根の峻嶺に近づく、清う流るゝ川の美しさは、渡りても見まほしう眺むるうちに、俄に闇うなりて、數多き墜道をくゞるなりけり、出ればいつしか御殿場につく。富士屋と云へるに入りて、晝餉などしたゝめつゝ、登山の用意をたのみ、いざとて立ち出づる姿を見れば、海老茶の袴裾短かう、脚半わらんじに、編笠をさへ被りしは、さながら月琴をも携へまほしきに、糸立に掩ふはれて、駒の背にひたと取つきたるさまは、云はん方なくをかし、富士登山東表口と記したる大きやかなる石門を入り進み行けば、やがて杉林神々しき御社の前に至る、男子どちは馬より下りて神前に額づく、神主出で來りて祝言を奏し、御秡をなす、

此處を出づれば或は畑あるは田の面を、駒のあゆみもいとゆるう、鶯の聲のどかなるに、日ぐらしのなくなどめづらしうをかしと、互に顔を見合せて、笑みつゝ行く

　日ぐらしの急ぐ心をとめがてに
　　のどかにうたふ鶯のこゑ

一里八丁といへるに暫時いこひて、復た駒にのり、ゆき〳〵て太郎坊に至る、御殿場より此處に至る道程三里餘りなりとぞ、今まで更に山の姿を見ず、富士がねは何處ぞなど問ふ、こゝよりは林もなう砂地を爪先上りにて、二合二勺にゆく（一合目の間の里程凡廿五丁）黑き砂にところ〴〵緑なる草生ひて、紅の花咲き出でたるに、白雲低うかゝりたる裾野のさまは畫の中をたどる心ちす、駒返しにて馬より下る。こゝよりは砂地を千鳥かけとて、或は右、あるは左へとたどりつつ登る、顧みれば今來し方は白雲に掩はれて、時の

間に見えずなりぬ。

　遠方にのみのぞみし富士のみね高く
　　雲間をよぎてのぼりゆくかな

黄昏に三合目に着く。四合目まではと谷の君のいらち玉へど、今宵早う休らひてこそ、翌日は至り得めなど強力の云ふに、弱虫どもは從ひてこゝに泊る、石を疊み、丸太を組み、頸をも打たんばかりなる低き岩室にくゞり入れば、六坪ばかりもやわらん板敷に席しきたる奧に、夜のもの布きならべたるに、早くつき玉ひしこそ幸なれ、よきざしきへおはせとて請ず、やがて飯かしげば、煙は室の中にみち〳〵て皆涙を流し、あはれ狸とや思ひ僻めにけむなどつぶやくに、谷の君は例の嗔出でゝ止度なし、さてこそ狸の本體あらはしけれと笑ふ、やがて半熟の飯、鹽からき汁、酸き漬物を味はひて臥床に入る、後より三人四人連の、ひし〳〵と入り來りて、處せく打臥したれば、息も苦しうまぶたも合はず、そとあたりをうかゞへば、晝の勞れに皆熟睡したるに、竊に扇などつかひて夜を明す。

丑滿ばかりに皆起き出でゝ、岩室を出づれば、雪風涼しう膚を吹き、有明の月晃々と、あたりは白き靄に掩はれたる、快さたぐへん方もなし。

　雪風もはだえすゞしと岩室を
　　出ればひくきあり明の月

こは名物なりとて出だすを見れば、甘酒なりけり、其の味いと甘し、皆舌つゞみを打ちてこゝを出で、月をたよりにたどり行けば、四合目に達す。曉の霧深う四方も朧になりゆけば、手探りにて、罐詰パンなど出して食ふに、やがて雪白う棚引わたりて、綿を束ねたるとや云はん、はた降り積みたる雪とや見ん、高き低きさま〴〵の形したる、はるか彼方に細く青き水平線のあたりの、赤らむと見るまに、うる

はしうきらめきわたりて日の出でたるさまは、何にたぐへん方もなく、只あと云ひたるばかりなり、

白雲はつもれる雪とまがひつゝ
出づる朝日のうるはしきかな

なはあへぎつつ登るに、五合目よりは、次第に岩多く道も險しうなりゆき、六合目も過ぎ、七合目に達する頃は、息もせはしう、からうじてたどりつき、雪を〳〵と呼べば、器にもりて出だす、其の



味は、天の甘露はものかはと口々に稱へつ

又も世にたぐひあらじな富士がねの
みねの白ゆきいつかわすれん

暫時いこひて又登る、險しさもまし、息もせはしうなりゆく、左の方は屛風岳右の方は駒岳彼方に小さきは寳永山など、聞きつゝ、打ち見やるに、絕頂より八合目に至るの谷間に、白雪の積れるを見出だして、皆走りより、取らんとすればいと堅し、から

うじて金剛杖にて打ちくだきつゝ食ふに、蘇き出でたらん心ちして、やゝしばし此處にいこひ、手に手に雪を包み持ちて、辰の時半ばかりに八合目に達す。いと早ければ、こゝにて晝餉を終らずば、胸突八丁は登りえじなどいはるゝまゝに、又も行李を開きて食事す、こゝには男子にても、例の高山病に罹りて打臥したるもありて、我一行の健かなるを稱す、爰を出づれば九合目とてはなく、胸突八丁のもとに至る、見上るばかりの峻岳を、よぢのぼるに、岩根は火山の名殘にや、焼けし小石の間にゆらめきて、一足ごとに危き心地し、登る者も、下る人も、皆顔色は蒼白となり、息も絶えなむ心地して、雪を含みつつ登る、今迄は六根清淨、御山は晴天など、互に戯れかはしゝも、今は息さへはづませて、谷の君の切にかにかくのたまふにも、いらへする人だになければ、「額は腫れたよ」と不圖云ひ出で玉ひしに、一度にドット打ち笑へり（こは日頃彼君には心を惱し玉ふごとに額腫れ出づるの癖あればなり）からうじて頂上に達すれば、嬉しさの餘り、一度に萬歳を唱ふ

うき道をたどり／＼て頂上に
　雲をふみつゝいはふうれしさ

さきに麓にて、我が行方を歩みし男子三人、いと惡くさげに嘲み嗤ひしが、ゆくりなく今頂上にありて、いとも勞れはてたるさまなりしに、我一行の健かなるを見て、且つ驚き、且つあきれて「あなた方はお早かりし」と、丁寧に云ひたるは快よくをかし、頂上は大なる擂鉢の如き噴火口あり、其の周圍は、親知らず、達摩岩、さては蟻の戸渡りなど云ふ奇石怪岩立ちならび、其のさまは中々に筆にも口にも及びがたう、こを一週りするには五十丁に餘るとかや。

雪よりも冷やかなる銀明水に咽を濡し、又梯をよぢ

て淺間の御社に詣づ、携へし金剛杖に印を捺し、頂上の神符、さては安産の神符など受く、己れ今より安産せば如何はせんなど笑ふ、亭午にもなりぬれば、下り路に向ふに、例の胸突八丁を見おろせば、如何して此處をよぢしにやと、我ながら異しき迄險し、若き人々は身も輕く馳せ下れど、己れは中々にて、一足毎に目もくるめく心地して、彼方此方の岩にすがり、わなゝく〳〵這ひ下るさまのをかしとて、人々笑ふ、谷の君は、強力と共に、此の岩がねより七合目に至る谷間を、雪すべりをなさんとて、糸立をしきて柁を取り、金剛杖を櫂となし、雪の上に下らるれば、直に達す、其の疾き事自轉車も及ばじ、殘りし者はたどり〳〵て八合目より、七合目に至る、此處にて餅を出だせしに、其の味亦美なり、爰より打ち揃ひて、砂走りを馳せ下る、砂の深さは膝に達し、一足毎にすべり落つ、先きなる人の、編笠糸立のひま〳〵より、袖袂など風にひらめきつゝ馳せ下るさまは、彼の雀跳りてふものにも似たりや、三合目の岩室に馳せ入りつ、と見ればわらんじは、いつしか脛にかゝりて、足は足袋のまゝなりけり、皆打笑ひつゝ、わらんじはきかへなどし、暫時いこひて復馳せ下る、二合二勺に至れば、昨日の駒は我れを待てり、打ち乘りつゝ見かへれば、峯は白雲立ち掩ひて、影だに見えず

一度はわれも雲井にのぼりしを
　　など心なく立ちかくすらん

太郎坊も過ぎ、松柏の林を出づれば大野原なり、秋の千草のさま〳〵に、紅匂ふなでしこや、姿やさしき女郎花、さては野百合、藤ばかまなど、咲き亂れたる中を分けつゝ、先なる人は駒もろ共、薄の中に消えゆくさま、馬士歌のひなびたるなど、夢かうつつの堺をわかず、あゝ浮世のさまにも似たるかな、

位高く富める人は、峻嶺の氣ありて天下に豪然たり、裾野の秋の臥床しさ、世に阿らず名を求めず、隱れたる身の美しう、實に仙境の趣あり

百草の匂へる野邊をたどりつゝ
浮世のさがの知られぬるかな

酉の時過る程御殿場に歸る、東へ通ふ車もなければ、今宵は此家に泊る、浴しはて夕餉も終れば、打ちよりて恙なきを祝ひつゝ、かばかり珍らかに愉しかりし旅路は、叉たぐひあらじなど語るにつけ、故君おはしまさばいかばかりなど、そゞろ思ひ出でられて、人しらぬ袖をしぼりつゝ、はた、われとても、いつしかは亡き數にもれぬ身の、せめて幼きものゝため、ありしさまのあらましをだにとて、かくなむ。

うつし身の夢からうつゝをわかぬ世に
さめんとねがふ身ぞはかなけれ

新着の動物園 亞米利加特產の動物

林壽祐

吾此世界の西半球には、亞米利加と云ふ大陸があります、自然南北の二洲に分れ、氣候は寒帶から温帶、熱帶の三帶に跨ッて廣い野原、高い山、長い河などがありますから、色々な動物が拔んで居ります、而かも亞米利加固有の動物、即ち他の陸洲に產しない所の動物が、餘程多く居ります。今年になッてから上野の動物園で、亞米利加特產の、やゝ名高いコンドール、レア、ラマ、ラックーン等の數種を飼養して居ります。若しも其形態、習性等の概略を知ッて居ッたならば、動物園へお出での節、聊か興味があらうと思ひます、夫故予は是等の動物に就き、ざッと述べて置きませう。

△コンドールは、鷲の一種で、猛禽類の中では最

も大きく、身長四尺に餘り、頭に冠を戴き、頭の後から頸は殆んど裸で、桃色を帶び、僅かに短かい黑毛を生やし、少し皺が寄ッてゐます。羽毛は一體に黑いのですが、唯翼の風切と腕羽に當たる所が灰色を爲して居ります、そうして頸の下の方には、後から白い羽毛を繞らし、恰度吾々が白い襟卷をつけた樣であります、此鳥の翼は非常に長くて尾を被ぶせ且つ頗る巾が廣いのでして、兩翼を張ると、端から端まで、八九尺から一丈餘り、時としては一丈三四尺位のがあるさうです。眼は割合に小さくて、鷹や鷲の樣に烱々としては居りません、けれども視力甚だ鋭く、又鼻で嗅ぐ力強く、高く蒼空を飛翔けながら、能く地上の餌を見出すのです、鷹や鷲は大抵自分で殺した動物の、新らしい肉を喰ふのですがコンドールは縱令他のものに殺された饐肉でも、頓着なしに食ふのです、否新らしい肉より、古い方を好むさうです。嘴と爪は、鷹や鷲程には鋭くありません、爪の如きは、やゝ鷄の爪に似て居ます、けれども嘴も爪も大きく、其上體力は甚だ强いのであります。鷲は普通、兎、猿、犬の兒などを食ッてゐますが、コンドールは、鹿、山羊、綿羊、豚などを殺し、小牛やピユーマ(一名南米獅子)などを惱ますこともあるさうです、實に鳥類の王と稱すべき鳥であります。

此鳥は、常にアンデス山とて、南亞米利加の南北に亘れる高山の頂に棲み、高さ二三里位の所を飛び廻はり、平地に來ることは容易にない、アンデス山といへば、富士山より高い、他の鳥でこの位高い所に棲むものはありません。で腹が減りますと、先づ遙か下なる平原を見下だし、餌となるべきものを見付ると、天から彈丸の落つるが如くに飛び下り、餌を攫むと再び高く飛歸ッてしまう、勿論持ち上が

りきれない餌は、平地で貪り食ふのです。此鳥は雛を哺むに巣を造らないで、卵をば唯ボロリと岩の上に産み、其儘抱めるさうです、一體コンドールは性強く、傷を受けても容易に斃れない、それ故亞米利加の土人は、平地に來るのを竢ち、罠を以て巧に捕えるさうです。

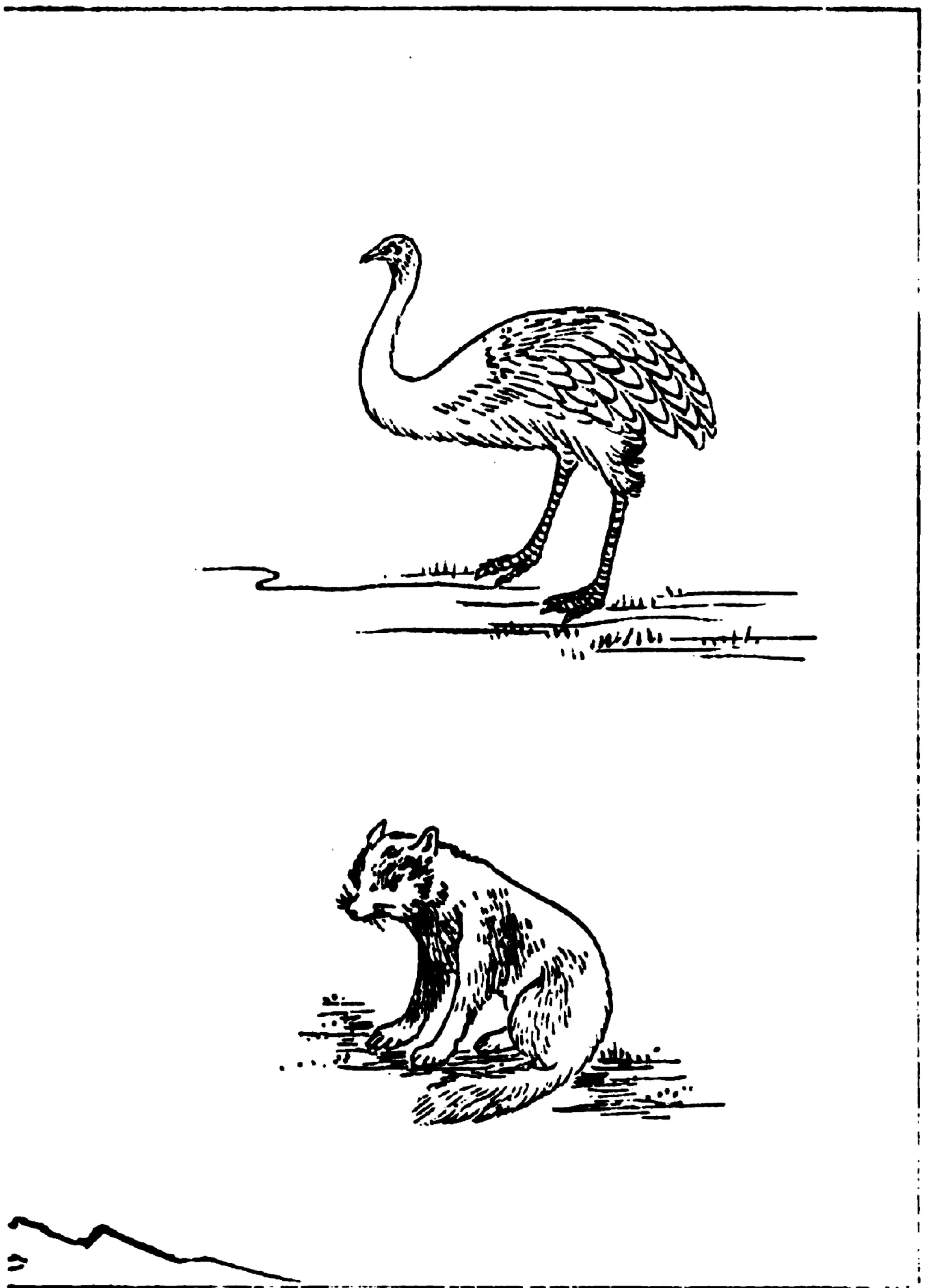
東半球に産する兀鷲は、形から大さまで、能くコンドールに似て、矢張り頭から頸の邊が禿げてゐます、けれども其禿げてる部分は、桃色でなくて青白く、羽毛は一面黑色であります、其剝製標本が、上野の博物館に備えてありますから、よく比べて御覽なさい。

レアは、亞米利加駝鳥ともいひ、形は阿弗利加駝鳥に能く似てゐますが、遙かに小さく、身長五尺許りで、先づ濠洲産の食火鷄の大さと略ぼ等しいのです、矢張り翼も尾も短く退化してしまツて、體には唯細長い羽毛を、鬣の毛の樣に被ツてゐるばかりです、で食火鷄は眞黑ですが、レアは灰褐色であります。頸は非常に長くて、蛇の樣に自由自在に曲げられます、阿弗利加駝鳥は足の趾が二本で、一本が大きく、一本がズッと小さいのですが、レアの趾は三本づゝあります、こゝが阿弗利加駝鳥と亞米利加駝鳥の區別される所で、阿弗利加産を、二趾駝鳥ともいひ、亞米利加産を、三趾駝鳥ともいふて居ります。

レアは、常に群を爲して平原を駈け廻ツてゐますが、足が長いから駈けることは頗る速いのです。性貪食で、何んでも食べる、阿弗利加駝鳥と同じく、砂を掘り、共同の巣を造り、三四十個の卵を産んで孵えすのですが、太陽の温熱のみには任かせないさうです。レアは、阿弗利加産の駝鳥、濠洲産の鴯鶓及び同洲新幾內亞産の食火鷄と共に、走禽類といふ

一部類を爲し、何れも翼が短縮してしまッて、飛ぶことは無論出來ないですが、其代り足が能く發達して、駈けることゝいッたら、そらア及ぶものはありません。

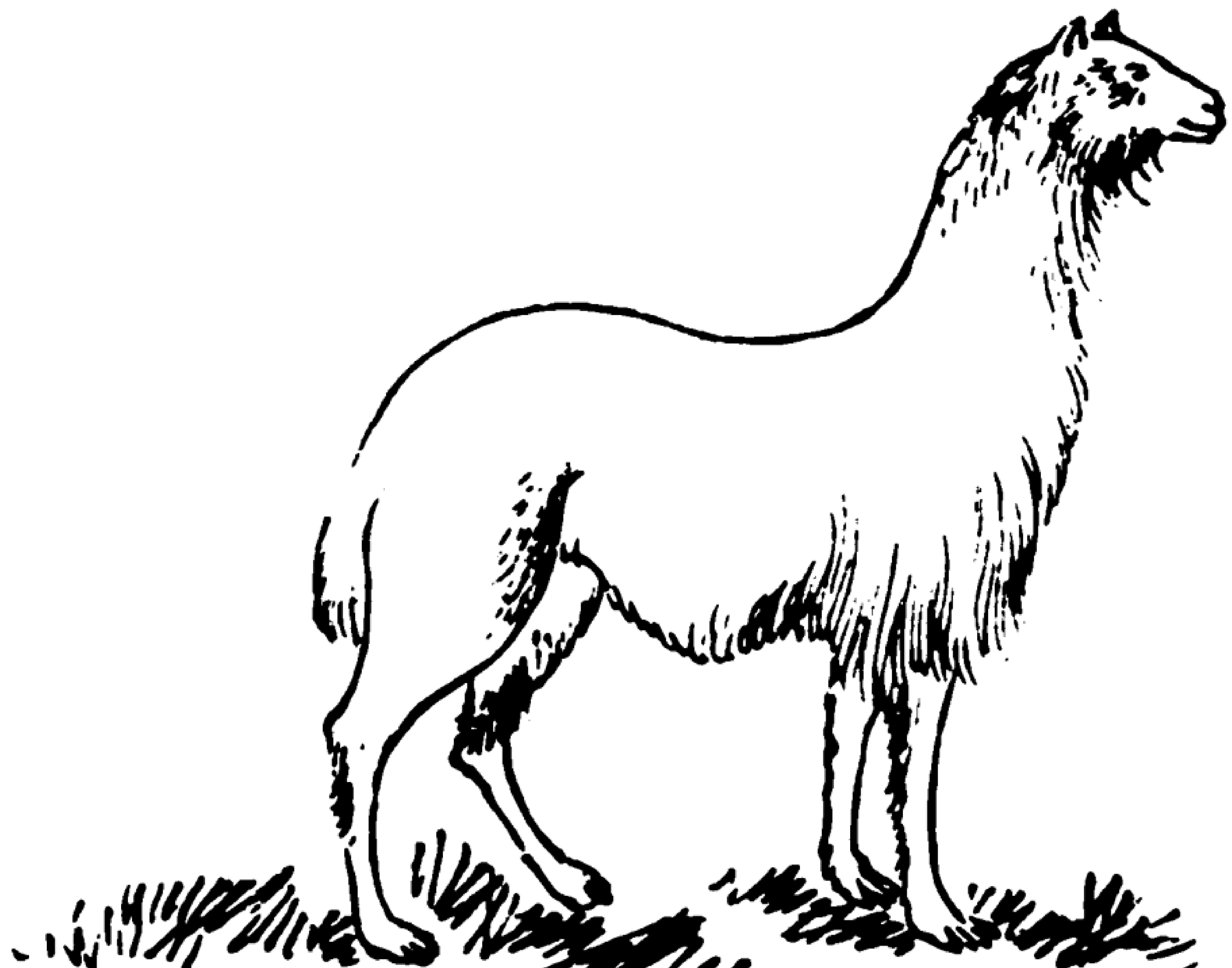
ラマは、羊駝ともいひ、駱駝の一類でありまして、南亞米利加、殊に白露國に多く產しますから一に白露駱駝ともいひます、形は駱駝と鹿と羊を雜せ合はせた樣で、大さは駱駝より遙かに小さいが、鹿や羊よりは大きいのです、駱駝の如く

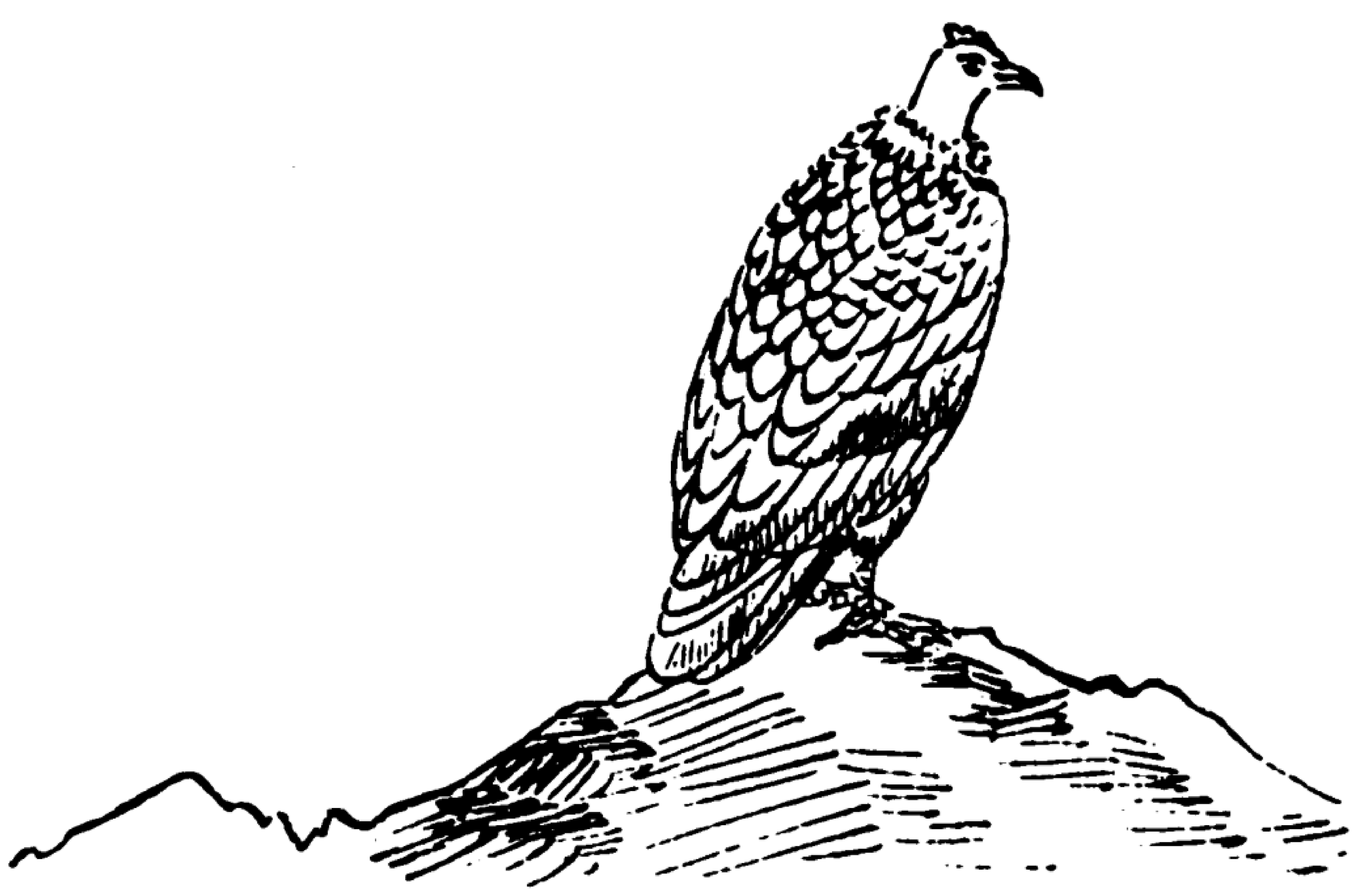


頸と足が非常に長いですけれども、背上に肉峰はありません、趾は駱駝に比べると、小さくて甚だ狹い、で全身へザラザラと毛を被ぶッてゐて。特に胸の毛は長いのです。

ラマは平常山や野原に群を爲して駈け廻はり、時とすると何百頭といふ程、群ッてることがある、で奇體なことには、糞を一ッ塲所に溜めて置く癖があるさうです。一體性質が溫和しいから、南

米の土人は飼ひ馴らして家畜となし、人を乗せたり、荷をつけたりするに使ひます。白露國では嘗て戦爭のあッた時、馬に代用させたが、山を越え谷を渡り、なかなか能く働いたさうです、それ故外國で此ラマの種を殖やさうとしても、初めのうちは容易に外國にやらなかッたのであります。此獸は唯に働くのみでなく、體の毛が長くて多くて、且つ丈夫であるから、織物の原料には適當して居るのです、肉も定め





しよい食料になるでせう。

南亞米利加には、ラマの他ウキクグナ、グアナゴ、アルパカの三種ありますが、皆ラマの即ち羊駄と同種類のものです、就中アルパカの毛は、洋服の裏地になるので有名であります。是等有益なる獸は、牛や羊の樣に、遂には世界各地に蕃殖するやうになるで厶いませう。

ラックーンは、浣熊ともいひ、熊の類でありま

す、けれども熊より遙に小さくて、形は寧ろ猫や狸の方に近いのです。熊の尾は非常に短いですが、ラックーンの尾は頗る長く、足は甚だ小さくて、樹に攀ぢ登るのが上手です、性活潑で人に馴れ易いさうです。

此獸は多く北亞米利加に產し、晝のうちは樹の上に潜んで丶、夜になると彼地此地と步き、餌を探がし廻はるのです。餌は小さい獸だの、鳥の卵だの、蟲類だの、魚類や介類などであります、又好んで汁液の多い果物を食ひます。で妙な癖には、餌を拾ふと、必ず水の中へ入れてから食ふのです、そこで「アラヒグマ」といふ名をつけられました、そうして若し水がないと、餌を食はない、それ故沼や池の邊河の岸、或は海の磯に近い所に捿んでるのです。此獸の毛皮は、洋服の裏或は、敷物或は帽子に製へられたりするのですから、効用は廣いのであります。(終)

太宰府參詣記

（浪花及中國）

高瀬羽皐

停車塲へ三木福亭、山機凌、渡邊芦庵等の人々來りて香春樓に案内す、こゝは俗に眞田山と呼ぶ、元和慶長の役に眞田幸村が出丸を搆ひて關東の大軍を苦しめたる古跡也、樓上より河內、和泉の遠山を眺望すべく古戰塲は一望の中にあり、こゝにて出迎の人人と晝飯をたべる

向　伊勢海老、なすび　ゐんげん　　椀　あい鴨

皿　鯛のつくり身　　二の膳「ヲムレット」

菓子　びわ

酒のみて今昔の物語に半日を消す、新澤庵曰く今

この地に來る人一人として博覽會を見ざる人なし、千人來れば千人見物す萬人來れば萬人見物す、滔々たる世俗凡下の習ひなれば左もあるべし、吾等は素より非凡の高士なれば凡俗と其揆を同うす可らずこゝへ着て彼等と共にゾロ〳〵と博覽會へ入るは平生の抱負に似合ぬ事なれば一切博覽會見物やめにすべしと云ふ、大阪の友人大に反對して議論となる、余云ふ實は吾等も博覽會見たくなし、吾等は羽阜山中閑居の隱者なり、當世に何等の望もなければ新發明の流行のと云ふもの見て自ら益する處なし、新澤庵に贊成すべし、わざ〳〵大阪へ來るは何の爲なるか分らぬ話なれどこゝへ來て見ぬが趣味のある事なり、來らずして見ぬはもとより當然なれば少も不思議はなし」こゝに於て大阪黨も爭ふ事をやめて口を閉づ、この日終日樓上より眺望して談話に餘念なし。

七日曇　朝の献立

椀　芋とろゝ汁　　坪　らッきよう漬

皿　さわらのあんかけ　　玉子二ツ

大阪の友人、書畫及び刀劍ども數十品携きて見せる、氣に入りたる物一品もなし、夕景市中を散步する。新澤庵は飲すぎて晝寢したる儘起出ず、夜に入りて皆々打集ひて夕膳をたべる。

向　海老具足煮　　皿　鯛つくり身

椀　鯛　うど　　皿二の膳　梨の實

皿「つう〳〵」

新澤庵膳毎に洋食一品づゝ添るを罵り、料理の水臭きを罵り、女中の活潑ならぬを罵り、階子段の長きを罵り、車夫の驅かたを罵り、枕の低きを罵る、梶の屋大人さうグズ〳〵して居ては困りやすせ、早く出かけやうせ〳〵と催促頻りなれば、明日出立と一決す、新澤庵大阪にて不平多く狂歌一首もなし。

八日雨少しふる、不用の物ども東京へ送り返し兩人身輕に裝ひて朝餉の膳に向ふ。

汁　白味噌摺芋　　皿　さわら葛かけ

向　生玉子二ツ



九時に玉造より汽車に乘り、梅田にて乘かへる、大阪の人々梅田迄送り來る、こゝより兩人となつて例の氣散じに復る、新澤庵云どうも大阪は面白くないあんな俗臭滿々たる處に居ては、此方迄が贅六になつて仕舞ふから危險でたまらない、是から東海道の調子で洒落のめさうト甚だ上機嫌、神戸は近くなるト

　　ゴム枕げに氣さんじな旅なれや
　　　寢ころんで見る淡路島山

神戸へつく、湊川神社を參拜せでは叶ふまじと兩人俄に下りて參詣す、忠臣楠子の墓を拜し、公の御在世悲憤の事ども多かりしを憶ひて

　　世にませし昔おもへはたてまつる
　　　ぬさにもかゝる吾涙かな

斯く吟じてさて再び停車塲に至るに中國線の夜行は七時廿分なりと云ふ、夫まで何をして暮すべきやと云緊急問題起る、布引の瀧見んか牛肉喰ふべきかト云ふに、牛肉に決す。一小亭に登りて先づ一盃を傾け、牛肉の鍋を命じ兩人にて三人前たべる、新澤庵

　　ふり立てゝ賞るかうべの牛の肉
　　　うましといはぬ人なかりけり

七時廿分に發す、酒機嫌なれば兩人程なく枕につく、されば途中は夢の中に過つゝゆく、岡山にて新澤庵

　　うたゝねのよい氣み團子賣る聲に
　　　目は覺にけり岡山の里

廣島に着たるは四時三十分也、長沼支店に休息して、六時より市中を見物す、舊城及び泉邸といへる淺野家の庭園を見物す、やがて歸り朝飯をたべる

汁　かは鉾(白みそ)　椀　鯛の切身米澤麩

坪　まめ　皿　いかのうま煮

(未完)

文字の書き方

林　恒　山

三　字の畫を增減する事

法帖其他に字畫を增減したるものあるより、習慣となりて世に行はるゝものあり是等は妄りに增減すべきものにあらず今多く用ゐられ居るものを擧ぐれば京の口を曰とし、明の日を目とし映の央を英とするが如きは一畫を增したるものなり

於の方を才とし勞の生を主とし爲の灬を一とし莊を庄とし此を此とするが如きは一畫乃至數畫を減じたるものなり

此外高、離、棄、亮、豪、冨、鬲、等の口及び厚の白を日とし面は却て口とす橋の香を有に、筆、答、箱、算、等の竹を艸とするも著と箸、荀と筍、藍と籃、藉と籍、苔と笞との如きは全く別字なれば最も注意すべきことなり

四　字の形を變ずる事

字の形を變ずるも法帖などには多きことなるより世に行はるゝもの多し是等も妄りにすべからざるは云ふ迄もなく今習慣となり居るものを擧ぐれば

右左に置き替へるは秋、晩、和、蘇等あり

上或は下と横とを置き替へるは峰、嶋の山を上にし、岸崖の山を横にし裙、群の君を上にし、嶋の山下に置き鵞の我を横にする等あり然れども吐と吉、栖と栗、駟と駡、棘と棗、暉と暈、衿と衾等は全く別字なり、

口と厶と書き替へるは松、捐等の厶を口とし員、損、圓等の口を厶とす然れども吉と去、勾と句、兄と允等は全く別字なり

隹を鳥とするは雁、雞等あれど是も唯と鳴、雅と鴉とは全く別字なり

無、焦、烈、然等の下を火にすれど熹と煬、烝と烝とは別字にて慙を立心扁とすれど忘と忙、忠と忡、息と怡等は別字なり又滅、況、決、減、涼等の三水を二水にすれど冶と治、と准と淮とは別字にて此三水は水なれど江と汞、泊と泉、汨と沓等も別字にして毛物扁は犬なれど、猶と猷等は別字なり又手扁も手なれば拜の手を手扁にし劒の刄を立刀にし罰の立身を寸にし冠の寸を立身にし瀨の負を頁にするが如きあれど是も決して妄りにすべきにはあらず。



五　字の畫を省略する事

字の畫を略するを省文といひ簡便なるもの世に行はるゝもの多く是れは聞き書寫し書等の時簡易にせんが爲めに作り出せるものなるべし枝幹を支干とし距離を巨离とし逍遙を肖岳とし齟齬を且吾とし慫慂を従臾とするが如きあり。歳を才とし絲を糸とするが如き他の字假用せるものあり。此外傳の專を云、敎の孝をメ、獨の蜀を虫、圓の韋を井、澤の睪を尺、驅の區を丘、猶の酋を尤、

燈の登を丁、儀の義を叉、黨の黒を儿、養の食を刂、逃の兆を外、假の叚を反、讀の買を冗、國の或を玉、廬の盧を戸、覆の復を伏、圓の員を亠とし對、難、歡の扁を叉、辭、亂の扁を舌、獻の扁を南、劉の扁を文、鐵の作を夷又失、趨の芻を甬、醫を医、體を体又躰、寶を宝、舊を旧、當を当、華を芲、實を実、邊を辺、齊を斉、雙を双、應を応、圖を図、關を関、齒を歯、區を区、聖を垩、賢を吴、夢を梦、靈を灵、歸を皈、經を圣、過を过、還を还とするが如し然れども乱、与、仏、証、埜、庿、図、尒、显等は古文或は別體にして省文にあらず。

六　字畫の誤り易きものある事

字畫の誤りなることを氣附かずして常に使用し居るものあり。

員の口をムにして本字のムにあらざることを氣附かず瀨の負を貟にして本字の負なることを氣附かず垂の下を山とし淫の壬を缶とし全の上を入とし宜、宂、富、寵等の宀冠を冖冠とし廈、廁等の广を厂とし曆の禾を木とし兎の刀をノとし、貪のヲを爪として本字を氣附かざるの類多し。恥の如きは耻として俗字なりと玉篇にもあり殊に福の如きは田一項あれば衣食足れりといふ字にて衣扁なるべきを示に从へるは俗人の誤りのみならずと古人も云へり其他豊は豐にして曲にあらず縫は斗にして丰にあらず降は丰にして斗にあらず寄は大にして立にあらず苗は田にして由にあらず變は文にして又にあらず、栞は爪木にして采にあらず策は束にあらず達は羊にして半にあらず聖と望は壬にして王にあらず尋は口にしてルにあらず祇は氏にして氐にあらず憲は手にして王にあらず徹はルにして口にあらず佞は二女にして妄にあ

らず原は白にして曰にあらず嘗は旨にして甘にあらず歳は一少にして少又山にあらず勇はマにしてコにあらず冥は日六にして具にあらず牀は丈にして點なく嗅は犬にして點あり約は點にあらずして一なり此類頗る多けれど略す。

（完）

清國見聞談

阿多廣介

清國見聞談も玆年の暑さには閉口して中絶しましたが是非首尾を纏めよとの事ですから此度は蘇州より武昌に至る迄の間の見聞を一纏めにして、御話することに致しませう。今回の口繪に載せましたる寶大橋は恰も我が會津の日橋川に架したる十六橋の長いものと見て宜しくありますが十六橋は會津勢が官軍を防禦せんとして破れた處ですが寶大橋は李鴻章が長髮賊を破つた處で丁度似寄りたる處があります。

蘇州城の景は居留地近邊を寫したるものでありますが綢緞紗の製造場は官業で中々盛大であります其處に我農商務省より派出されたる留學生がありますが大に熱心して自ら職工を勸め又小賣の練習をもなし全で土人と異りませんが誠に末賴母敷き人物でありますがどうか斯樣の人が澤山輩出されん事を望まはしくあります。稅關は英國人の管理に屬してありますが土當歸の大木とは此事でありましよう大國の體面として誠に情けなき話であります我が邦の居留地の事は前に御話しましたが丁度此稅關の上流にあります近頃の通信によれば既に縱橫に道路が開かれ櫻樹が栽ゑ付けられたそうです。然し寂寞たる事は同じ事だそうです河を遡るのは大東會社の滊船ですが之れ許りは稍々人意を强うしますよ同會社は近頃又鎭江に新航路を開きましたから私は其滊船に搭じて參

りました。蘇州迄は同行者も有つて餘程便利でしたけれど、これよりは單身で異鄕を遍歷するのであるから、少しは心細く片語交りの支那語や筆談で辛うじて用を辨じました。然し人に鬼はなしとやらにて支那人の船長や事務員は大に心切にして呉れましたよ、斯くて無錫常州丹陽を經過しましたが、此地方は江蘇省中の富源であつて、殊に米穀類は最も豐富な土地ですけれども、我が國人には未だ大なる取引する者はありませぬ然し他日防穀例の解かるゝときは大に有望の土地でありますから國民の記臆に存じて置かねばならぬ地で此の間の運河は段々狹く且つ永年浚渫もしないのに加ふるに船舶の出入が頻繁だものですから、船頭が船を操つるのも餘程困難でありますが然し其船を操つるの巧妙なる事は格別で緩慢なる如きチヤン先生も油斷はなりませぬよ、一回は淺洲に乘り上げましたが俊寛の二の舞になりはせぬかと獨り心を痛めましたが船員は非常に難儀をして六時間位で漸く離礁しました斯くて十二時間位で達する筈の鎭江に十八時間もかゝつて着きました。

鎭江は江蘇省に屬して五十年前の天津條約によつて開いた港で、揚子口を溯る百五十六哩大運河（北淸に通ず）揚子江の會合點で、且つ安徽省、江西、湖南、湖北等の諸省に到る必要の土地で、南京と相對して居り、大船巨舶容易に碇泊し殊に南京に入る門戶であるから南淸地方の貢米は悉く此の地を經過して、大運河に行くのであります。

外國の居留地は運河の岸に沿つて盛なる樣であるけれど、我國人は二三のゴロツキが支那人に名義を借して租稅を脱し密賣の如きものをして、益々信用を失墜するそうでありますが、有力なる商家は一軒もありません。併し領事館の分館も設置せらるゝ計畫もある樣であるから着目しなくちやならぬ土地と存

じます。到着した晩は英國皇帝陛下の御誕生日で、港内は盛に球燈を垂るして恰も英國の港のやうな感を起しました。

此の地は一寸と瞥見して直に又支那の蒸汽船に乗り揚子江を横ぎり南京に行きました長江は想像以上で我々には形容は出來ませぬが河幅は千五百メートル深さは二十七フート五千噸以上の巨船が織るが如くに上下して居ります大國人と島人根性の差別のあるのは斯る境涯が影響するには違ひありませぬが何だか此河を渡てから私の氣分も太つた樣ですが皆樣是非一度は御見物になりまして國民の肝魂を遠大にしたいものです。斯て九時間にして南京の港に着きましたが苦力馬丁が群集して乗車を強ゆるのは何もうるさくて堪へませぬでしたが彼等を叱咤して漸く一輛の馬車を雇ひ坦々たる大道を驅り南京城内の領事館を訪問して、其所に宿泊しました。南京は明の舊都で、揚子江の南岸に在つて、江蘇安徽二省の首府で、兩江總督が此處に駐劄して居ます。氣候は寒暑の變化甚だしく風俗は温雅で、文人墨客が多く、從つて文學が盛なさうであります。

城壁は明の太宗の經營せしもので、高さ十丈位厚さ三四丈長さ九十三清里(我が十三里)の城壁を以て圍み實に宏壯偉大を極めて居ます。人口は五十萬ありて大阪位です、市街は現在僅かに西南の一隅を占て、全面積の大半は田園荒蕪の地でありますが、居留地には追々と西洋風の建築が見えて居ります。我が國人は領事館郵便局員のみで、商人等は一人も見かけません。唯本願寺より派出されたる村上といふ人が東文學堂を組織して、七八十名の學生を教育して居るばかりです。私が參りました時は丁度劉坤一が薨せられて張總督が到着せられた當座でありましたが、機敏なる張總督は直に改革に着手せられ、老朽

官吏は戰々兢々とし若手の人は却つて意氣揚々たる有樣でした。其の翌日は丁度西太后の萬壽節で有まして、水師學堂に於て盛宴を張られました。私も同學堂總辦の兪明震氏に伴はれて拜觀に參りましたが、百坪ばかりの講堂滿面に菊花を飾りつけ、清洋折中の料理は所謂山海の珍味を集め張總督は如才なく外賓を接待して殊に邦人に對しては、切りに厚意を表して、大阪博覽會の事抔を談じられて居ました。



學校は水師學堂、武備學堂、江寧學堂抔で、私は其の江寧學堂の徐乃昌と懇意で拜觀に行きました。目下師範學校の組織にするといふことで、改築の工事が終りて中々壯大な學校でありまず。茲に奇異なる感じを起しましたのは從者の寄宿舍であります恰も厩舍の如きものが列ねてありますが支那の學生は皆官吏の子弟でありまして官費を受け從者を率ゐて來るのだそうです、丁度我邦の維新前の學生の如きものです之れでは迚も國民敎育の普及官民平等の時期に達する事は覺束なく存じますが切に注意を喚起して置きました今年の春は此學校の主もなる職員が我が邦に見えて敎育制度の取調をなし、又白河文學士も赴任になりまして、追々

に盛大になると云ふことを聞きました。實に清國の教育制度を改め男女教育の普及を計るのは我邦人の勤めねばならぬ事と存じます、此の地で見物すべき所は莫愁湖、雨花臺杯ですが、莫愁湖は所謂美人莫愁が琴を彈じたといふ遺跡でありまして、丁度我東京の不忍池を小さくしたもので、辨天樣見たように莫愁の社もあります。雨花臺は城外の最も高地で、馬頭を山上に立てゝ、眼下に南京城を見降した有樣は、叡山の紫明岳より京都を望むだ樣な心地がしました。此處より鐘山、清凉山を眺められます、明の太宗の廟は其鐘山の麓で、今は荒廢に屬して哀れな感を起させます。

南京は所謂南京繻子の製造せらるゝ所で、中々製造が盛で其の安値な事は驚くばかりです、上等一本が我が國の九圓位で其れで我が婦人の帯が二ッ半位取れます。其外天鵞絨、緞子、筆墨紙陶器等の製造が盛大を極めて居ます。南京より獨逸船瑞泰號に搭じ揚子江を溯りましたが三時間にして蕪湖を過りました。此處は安徽省南部にある繁華の地で、三十年前に芝罘條約に依つて開港された所で、將來有望の地であります。次に十時間を經て九江に着き上陸しました、九江は江西省に在つて天津條約によりて開港され、揚子江の南岸にあります。鄱陽潯陽の二大江を擁し、揚子江の中堅を控制し、南部支那の貨物を揚子江の上下の地方及び北清諸省に輸送する要衝に當つて居るから、船舶常に輻輳し、廬山は天の一方に聳えて風景絶佳であります。五老峰、香峯の勝白鹿書院の舊跡は此處を去ること遠からず、殊に潯陽江は白樂天の琵琶行を以て有名の地であります。此處は生糸茶の產出地方との交通が自由ですから揚子江岸に於て、第三位を占める繁盛な地でありまして、殊に陶磁器の製造所として著名で、景徳鎭の陶

器製造所は唯一の帝室御用製造所として北京政府より特に人を派して監督を致して居ります。製茶の業は全く露人の營む所で、製造所は三ヶ所ありて輸出額は三百萬兩に上ると云ふことです。九江より漢口に至る迄の間も、十時間を要しますが、沿岸の景色絶美で唐詩選に關する勝地も少くないから、一層の愉快を感じました。殊に黄石港の近邊に赤壁の遺跡もありますが、其所から又遠からぬ間に我邦に於て採掘せる大冶の鐵山があります。漢口は湖北省に屬して、天津條約により開港された所で楊子江の北岸に在つて、北西より奔流する漢水會合の地で、最も繁昌であります。其の南岸は武昌と相對し又僅に漢水を挾みて漢陽を望み、三府鼎足の形をなして、一大市街の觀をなして居ります。港の北には有名なる大別山が有つて漢水は其の麓を流れ、長江に會流するものですから水量に富み、巨大の船と雖も碇泊せられます。從つて遠近諸省の貨物は悉く輻湊し、再び又諸水に依つて内外に輸出せられます。所謂九省の會といふことは此事であります。從つて埠頭の數が甚だ多く汽船の埠頭でさへ數十個あります。我が大阪商船會社の埠頭も數個ありまして、船舶常に集つて少しも空所を殘さず、實に帆檣林立の有樣です。殊に又蘆漢鐵道の本港より起工した部分は既に我が五十里位進行して、江南の境に達し、運轉をなしつゝあります。數年の内には竣工致すでせう。又粤漢鐵道が完成するに至れば、本港は實に十八省否な世界の一大停車場となり非常な盛大な地となるでありませう。氣候は空氣が稍乾燥で健康には宜敷く、夏は暑氣強けれど、沿海地方の如く烈しくはない。冬も大抵氷雪あるさうですけれど餘りそれが長くない風俗は勤勉で、利を重んじ、中々鋭敏ださうであります。

府城は一里四方位で、城壁は一丈三尺堀を以つて圍らして居ります。英國の居留地は揚子江に瀕して下流にあり、其れに隣して稅關、其の次に佛國其の他の居留地があります。輸入品の主なるものは紡績糸、金巾、日本の綿物、海產物、樟腦、洋傘、陶磁器、玻璃器、砂糖、其の他の雜貨で、輸出品は豆、麻、繭、茶、白蠟、毛皮類であります。製茶業は盛に露人が經營して其の數六つあります。其の外マッチの製造所、竹木金銀の細工業は精巧を極めて、殊に製鐵所と武器製造所は甚だ盛大なもので東洋一と稱せられてあります。

本港は山水明媚で名勝古跡に富み、南は漢江を隔てて大別山あり、禹王廟と晴川閣とは山下に相對して、西は月湖の雅境あり、黃鶴樓は今はないけれど先きに女鑑の口繪に揭げた通り、以前は江東に聳立して、天下第一樓の名を縱にして居たそうであります。

居留地は市街の東北端にありて、中々よく整頓して居ます。我が國は馬關條約の結果此の居留地を得ましたけれど、最も東端にあつて不便ですから草茫々として、一軒の我が商店を認めないのは實に感慨に堪えませんでした。我が邦の主なる建物は日本領事館、大阪商船會社と郵便局と東肥洋行とが他の租界內にあるのみであります。

私は東肥洋行內に宿泊して、大に種々な便利を得ましたが、此の東肥洋行は元と肥後の有志家の設立にかゝりまして農商務省の物產陳列所も引受け雜貨の商賣をなして、長江沿岸に於ける日本唯一の商店として內外の信用を博し淸國帝室よりは名譽なるメタルを奉戴してありましたが、惜しい事には、其の後火災に罹つたさうであります。

漢江より一衣帶水を隔てゝ、武昌に行きました、茲に

は學友戸野周次郎が敎育顧問としてありますから三泊致しまして種々なる便宜を得ました武昌は湖廣總督が駐在して、人烟稠密商業繁盛で交通の便なることは漢江と同じく、氣候風俗も大差ありません。張總督の奬勵の結果、文物隆盛を極め、殊に武備學堂、師範學堂、農學堂、自强學堂抔は我が國の文武官を招聘し、盛に經營して居ます。又留學生の我が國及び外國に派出されたものも最も多いさうであります。目下張總督は南京に赴任せられて、端方氏が巡撫兼總督署理とし梁鼎芬氏が知府をして居ましたが、大に兩氏に厚遇せられ數回面會して、敎育上の意見を述べました。殊に兩氏は女子敎育に付いても熱心で、女子師範學校の設立計畫もなしつゝあるとの事で、梁知府邸に於て宴會を催されたときには家族の人々も引見されましたが十歳と八歳になる愛子には臥薪、嘗膽と命名されてありますが之は同氏憤慨の一端を發せられた者と存じますが私は兩子を相手として種々應問をなし我邦の幼稚園の事を話しましたれば大に羡望され是非設立したいとの事でありまして私に設計して呉れとの事でありましたけれども滯在日數も少いものですから萬事戸野顧問に一任せられよとて惜しき別れを告げましたが歸るに望んで種々なる贈物抔を受けました。近頃戸野顧問が歸朝されて話しますには既に男女高等師範學校も設立され更に二箇の師範學校五箇の小學校などを計畫されてあるそうで兩湖書院は大學組織にするとの事であります、其の他文武の官吏と數次會合して、種々なる裨益を得まして、御話し申したい事も澤山ありますけれども、餘り下手な長話になりますから、之で支那旅行談を終りと致して御免を蒙ります。（完結）

秋風やむしり殘りの赤い花　一茶



小説

貴夫人

廣津柳浪

（上）

そろ〳〵木々の梢が色づきかゝつた秋の末の事でありました。

江戸時代から名所の一に數へられた日暮の里、花の頃や納涼の頃とは違ひ、崖に臨んだ掛茶屋に客を見る事も尠いのか、僅か其中の一軒に、見すぼらしい老女が、御休息所の汚れた旗を掲げて居ました。

秋と云へば、其文字を見たばかりでも、何となく淋しい感の發るものでありますのに、社の屋根の上にも、さら〳〵と木の葉の落る音が聞こえ、地の上にも一杯に散布いて、犬の歩むのにもさく〳〵と音するので、四邊は唯淋しさに包まれて居るのでありました。

崕の下の鐵道線路を走る瀛車の音を聞き乍ら、掛茶屋の老女が涙まじりの欠伸をしました時、花見寺の彼躑躅の崕を登つて來られたのか、黒い門から年の若い美しい貴夫人らしい方が見はれました。其後には四十近いのと十七八のと二人の女中が、丸髷と島田の頭にも謹愼の體を示し、頸も思切つては伸さぬと云ふ風で從いて居りました。

貴夫人は二十二三歳にもなられませうか。髪は前と鬢とをふツくり膨らした束髪に何の粧飾もなく、黒の紋付に織物の帶、緋の鼻緒の雪駄を穿いて居られる樣子が、殆んど神々しい迄に見受けられました。丸髷の女中は氣遣はしげに、貴夫人の歩の運を注視致しながら、

『御前さま、お疲勞遊ばしは、』

『いゝえ。』と、夫人は微笑みながら、『お前方こそ御疲勞ではないかね。』

『私は何とも御在ませんけれども、』と、島田髷を見返つて、『初音さんが、おはゝ。』

『わらツ、澤野さんが何樣事を仰有つて。』と、島田髷は顔を眞紅に致しました。

夫人は輕く笑を漏しながら、『初音が御疲勞なら、彼處へ參つて、少時休息致さうね。』

『御前さま、私は草臥なぞは致しません。澤野さんが、』

島田髷が爭はうと致しますと、夫人は何は笑ひながら、『初音、お前の、彼處へ參つて、休息致してもよいのか、問ねて呉れるように。いえ、私が草臥れたのだから、早く參つて問ねて呉れるが可い。』

澤野が傍から支へ、まして『彼樣な處に勿體ない、彼處に寺が御在ますから、彼寺の書院でも借受けまし

て。』

夫人は唯微笑まれたのみで、歩を掛茶屋の方へ移されるのでありました。

初音は早くも駈抜けまして、彼茶見世の老女へ話を致して置いて、夫人を迎へました。

老女は此夫人が大名華族斯波家の奥方である事を、豫ねて知つて居たものと見えまして、夫人が茶見世に腰を卸された時には、土下座をせねばかりに蹲踞んで、初音に命ぜらるゝ儘、戰々として働くのでありました。

夫人は遠く荒川の流、尾久村の在家、近くは堦下の平田數十町を一眸の下に望みて、氣も伸々とした體で、其美しさが一入増した樣に見えました。

夫人は澤野を見返りまして、『實に快い心持ね。』

『私なども御蔭さまで、佳い保養を致しました。』

『彼處に見ゆるのが、日光へ參る滊車の線路だらうね。』

『左樣で御在ませう。ねえ。初音さん。』

初音は澤野の指して居るのが、田端から千住へ走れる線路であるのを見まして、『左樣ではありませんでせう。日光へ參りますのは、王子まで堦下ばかし通りますから、彼線路は違ひますでせう。』

夫人は首肯かれて、『左樣、左樣ね。初音のお云ひの通りだらう………。』と、訝しさうに線路の末を見て



居られました。

初音は老女を見返つて、彼線路の何れに向ふものかを問はうとした時、老女は犬か猫でも追ふかの如く、低聲で叱ッ〳〵と叱かるのでありました。

十歳ばかりの少女と、七歳ばかりの男の兒と二人、何れもぼろ〳〵した單衣——縞柄も形も分き難きまでの襤褸巾をはぎ〳〵の筒袖、顔に血の氣なく、眼ばかり光るばかり鋭く、今しも見返つた初音の顔を、凝乎と見た時には、初音は覺えずぞつとしたのでありました。

少女は初音へ向ひ『施してお呉れねえな。』

初音は何とも云得なかつた。

老女は其處に在つた草箒を取上げまして『此餓鬼どもは……打ばたくぞッ。』

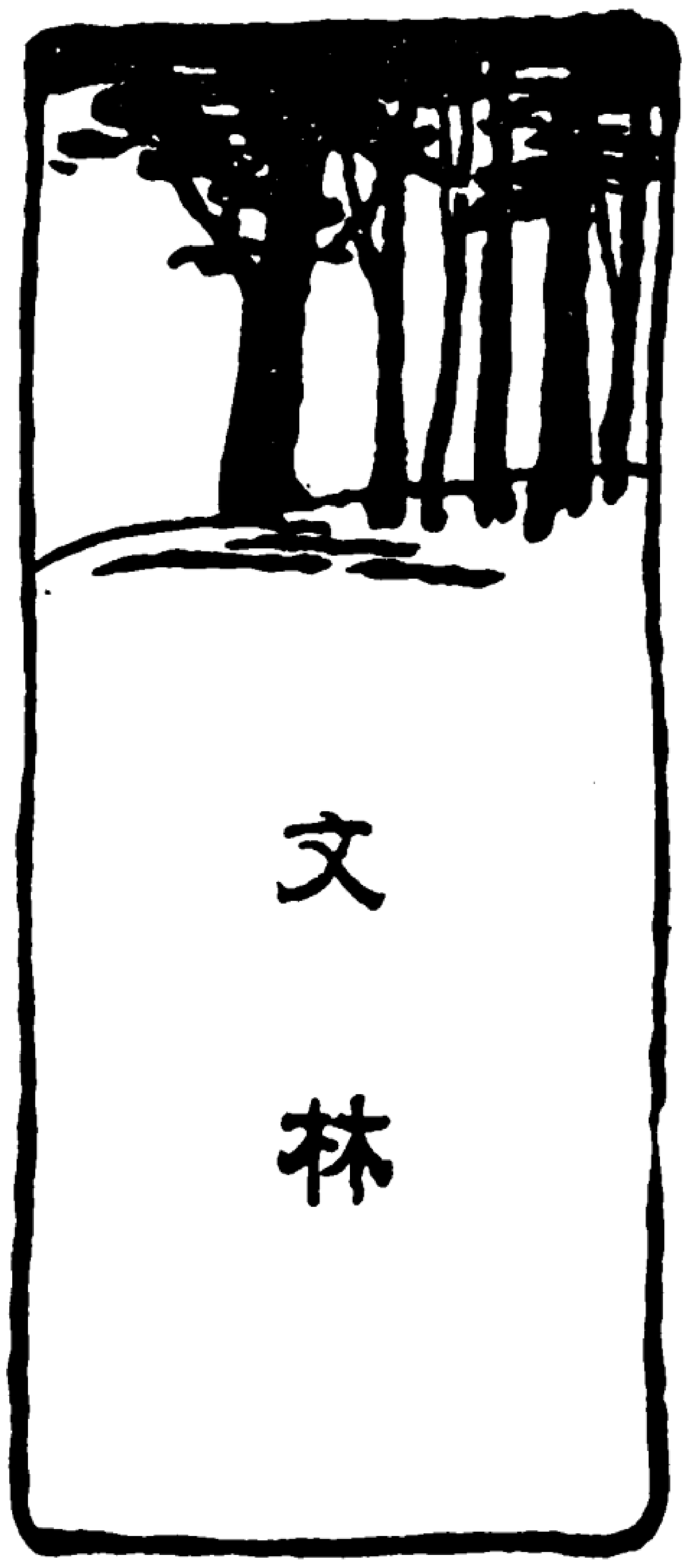
老女の聲は低かつたけれども、夫人は吃驚きながら見返りました。

『奥さま、施してお呉んねえな。』

少女は臆する色も無く、夫人の顔を見て、斯う云ふのでありました。



（つゞく）



燐寸　東久世通禧

みな人のいまはすり火の便り得て
燧ふくろもすたれけるかな

浦鶴鳴月　蜂須賀茂韶

難波かた浦わのあしのはのかにも
たつか音たかしありあけの月

朝露　津輕承昭

朝風のふきたえしより小はきはら
むすひとめたるつゆのしら玉

戸外朝顔　長谷信成

まはらなる柴のあみ戸も朝な〳〵
咲てつくろふあさかほのはな

山館秋雨　宮地嚴夫

村さめにあはすはかゝる山かけの
やかたの紅葉いかてみるへき

松平樂翁　坂正臣

大江戸のうみのにこりも白かはの
みつにやしはし澄かへりけむ

野霧　芝葛鎭

もすのなく聲よりほかの物もなし
明ゆく野へはきりにかくれて

稲　植松有經

足ひきの山田のいねをかりてほす
ころしも空のかきくもりつゝ

刈稲　加藤義清

千町田のたりほのをしねかる賤の

とかまの音もにきはひにけり

谷霧　岩崎勝従

野へにゆく心もいまはなくなりぬ
にほふ千くさの園にあそひて

女學校　近衛貞子

箒木になりなむのちはみとり子の
おくれす生る陰にやあるらむ

ねさめに虫をきく　前田朗子

むくらふの虫の聲のみさやかにて
寐さめさひしき秋のよはかな

遠樹紅　柳原愛子

近からはまはゆからまし遠かたの
ひとむらもみち夕日さすなり

駒迎　南郷柳子

ひさかたの月毛の駒もけふこそは
雲井のにはにひかれいつらむ

雁來　常磐井文子

我かとのわせ田もいまた刈ぬまに
ことしはかりの渡りきにけり

夜殘暑　保科節子

手まくらに荻の上かせき丶なから
のこるあつさにたえぬ夜は哉

林鹿　佐藤艶子

紅葉みるひとやかへりし小はやしの
あたりさひしきさを鹿のこゑ

離薄　田中瀧子

ゑけりそふまかきの薄ひともとは
風のやとりにかりのこしてむ

秋園　小川直子

おりたちてくものい拂ふ花その丶
垣のむらきくにほひそめたり

雨中萩　服部磯子

朝ぎりは雨にかはりてやまざとの
かきねの萩のちりみだれつゝ

エバンジェリン

ロングフェーロー氏作
河越輝子譯

（一）

其名も古き「アカデヤ」の
グランドプリーの里村に
薔薇花さき鳥うたひ
野良は實りて果しなき
青海原に立つ霧の
白き裳裾を引はえて
アカデヤ人のまどゐする
樂しき園を覆ふとき
夕靜けき夏の日の
業をいそぎて女等が
亞麻紡ぎつゝ謠ふなり

あはれ優しきエバンジェリン
花にもまして美くしき
其顔は村人が
土地のほまれと誇りにき
まだ十七の春の花
浮世の風は知らねども
波寄る額に七十路の
冷たき冬を示すなる
父が雄々しき腕もて
鋤鍬とればけなげにも
自から酒を運びつゝ
野良へと父をなぐさむる

妙へなる花の香を聞けば
罪と知りつゝ折る習ひ
雲井の雁の他所に見て
思ひに焦るゝ若人の
數もさはなる其が中に
鍛冶商ベッシルが息子なる
いとも雄々しきゲブリエル
幼なゝじみの親しさに
いつしか胸の打とけて
かたみに慕ふ優しさよ
黄金の秋も過ぎ去りて
夢路に似たる冬の空
流れも暫し音を止め
遊ぶ小鳥もうなゐでも

世はおしなべて和らかき
低き調べに眠るなる
いとも靜けきさる夕
心優しき少女子は
父のかたへに寄添ひて
亞麻紡ぎつゝありけるが
折しも聞ゆる足音に
胸の秘密の破られて
ハッと赧らむかむばせを
そむくる隙もあらばこそ
父なる人は立上り
「能く來たまひしベッシルよ
いざや此方により給へ
君が笑ましきかむばせは
實りゆたけき夕暮れの

秋の月にも似たる哉」
ペッシルは片頰に笑浮けて
暖爐の側に坐をしめつ
「如何に我友ペチアクト
四日を過ぎぬ早や既に
英國人の大船の
錨をおろせし其日より
何の願ひやもたらせる
大砲むけて威をしめし
明日なん我等が會堂に
人皆集への命なるぞ
あな恐ろしや魔神の
程なく襲ひ來らんに」

「恐るゝ勿れ我が友よ
親み結ばん爲ならめ
秋の收穫の乏しくて
我等が秣草に飼はんため」
「否とよ武器は取去られ
甲冑はさかれ殘れるは
君が小鎌に我が小鎚」
「祖先の築きし堤防の
中に平和の神居ます
甲冑は無くも武器なくも
秣草は滿ちて米足らひ
村の童が强き手に
堅く作れる我家を
那邊の敵の襲ふべき

楽しからずや我友よ
我等が子等の美くしき
愛情に満てる様を見よ」

ほのかに開いて少女子が
顔赧らめつ戀人の
手に寄り添ひて立てりしか

晝顔

下田春興

あさがほはあしたに咲きて
あしたにはしぼむとすれど
ゆふがほはゆふべにさきて
ゆふべにはしぼむとすれど
あらかねのつちさへさくる
みなつきのあつくてる日に
たゞひとりときめくはなの
ひるがほはあはれ
しがはなはあかがねかも
しが葉はあをかねかも
あさがほにはなこそ似よれ
ゆふかほに名こそかよへれ
あらかねのつちさへさくる
みなつきのてる日さかりを
たゞひとりときめくはなの
ひるかほはあはれ。

初秋月

佐々木濱子

よひ〳〵にそはん光りも初秋の
はつかしげなるつきのかげかな

教の庭

九月十五日兼題

樞密顧問官正三位子爵黑田清綱先生撰

殘暑

天

肥後國菊池郡城北村 佐々小琴子

あさ夕はあきのけしきになりぬれと
てる日さかりはなつにおとらす

地

肥後國菊池郡城北村 徳永萬壽子

手ならししあふきはなほもすてかねつ
なつにもまさる今日のあつさに

人

下野 岩森米子

秋來てもそよふくかせのおともなし
いつまでのこるあつさなるらん

甲

伊豫 梯たけ子

秋たてとまたぬきかへぬころも手の
ひとへにかせのまたれぬるかな

東京 大枝康子

立いてゝいはゐのしみつむすへとも
のこるあつさはしのきかねつゝ

香川 林靜子

あき風もたえて照る日のあつければ
なつにかへりしこゝちこそすれ

東京 三好珍子

みそきせし後のかはかせおとたえぬ
なつのあつさやなほよとむらん

東京 大町律子

みそき川なつはなかれてゆくみつの

よとむやのこるあつさなるらん
攝津 大岡花子

萩の葉にかせはかよへときのふけふ
のこるあつさはあきとしもなし
東京 岩谷淺子

わさたかる時はきぬれとひさかりは
いまなほなつのこゝちこそすれ
東京 牧 象子

何となくそらのけしきはあきなから
あふきのかせそいのちなりける
東京 安井京子

秋はまた淺茅かつゆもおきあへす
てる日かゝやく野邊のあつさに
東京 大木貞子

なか〳〵に殘るあつさそ去のきうき
こゝろにあきとおもふものから

乙

いつまてものこるあつさを山さとの
いはまのみつになかしてしかな
長崎 八尾いへ子

秋といふなのみたちつゝあつけさに
あふきのかせそいのちなりける
東京 松本きく子

あさゆふはあきのけしきに成ぬれと
日かけになつはなほのこりけり
東京 山崎文子

秋といふなのみ立ちつゝなか〳〵に
あつさはなつにかはらさりけり
栃木 壬生淑子

秋たゝはすゝしきものとおもひしに
あつさはなつにかはらさりけり
栃木 岩間きよみ子

かしましく蟬のこゑしてかせもなし
いつまてのこるあつさなるらん
栃木 岩間壽子

秋立たはすゝしからんとおもひしに
なつにまされるあつさなりけり
下野 菅沼とく子

風もなきけふこのころのあつけさは
あきとしもなしなつにまさりて
下野 菅沼せつ子

花すゝきほにあらはれてあきたてと
あつさはなつにかはらさりけり
香川 大山豊子

秋きても清みつむすはぬひまそなき
なつにもまさるひるのあつさに
肥後 德永多瑠子

露もおきむしもびとこゑなきぬるを
いつまてのこるあつさなるらむ
埼玉 横田秋子

朝ゆふにあきの氣さしのみゆれとも
のこるあつさはたへかたくして
埼玉 横田音羽子

いつまてをなつとやいはん定めなき
あつさにあきのくるよしもなき
肥後 德永廣子

あきかぜはそよとたてとも堪かれし
あつさはいまたはらはさりけり
肥後 佐々有鄰子

てりわたるあつさは夏にかはられと
さすかにあきのそらそほとなき
肥後 岡山登壽子

朝な夕なかせはふけともひるのまの
のころあつさはなつにまされり　肥後　坂本豊子

打ならすあふきのおとのひまなきは
なつにかへりしあつさなるらん　東京　牛山素子

あさほらけ今日のあつさも知れけり
うすきりはらふかせたにもなし　宮城　大槻初音子

秋のたつけしきのもりはなのみにて
つゆけきかけにかせをまつかな　大阪　桝田登子

鳴くせみの聲はいつしか消えぬるに
あつさはかりはいかてのこれる　攝津　大岡幸子

あつけさもまたさりやらて久かたの
てる日のかけはあきとしもなし　攝津　駒井登雄子

秋來てもなほまつかせのおともなく
あつきひかけはのきにのこりて　東京　山田婦美子

秋きぬとゆるむこゝろにいとゝなほ
のころあつさのしのかれぬかな　熊本　田代綾子

秋といふ名のみはあれとなか〱に
あつさはなつになほまさりけり　山口　田村多豆子

夏といふなのみすきつゝかはらぬは
あふぎをたのむあつさなりけり　茨城　中里希武子

よな〱の月とむしとはあきなれと
あつさはなつにかはらざりけり　壬生　岡　久子

塩かたきのころあつさをさけんには
かせまつほかそことなかりける　奈良　小走貞子

山もとのみつもあつさにわきいつる
おつるいつみも湯とそなりける　東京　荒井あさ子

たへかたきのころあつさに鳴むしの
こゑきくたにもあはれなりける　東京　同　こと子

たへかねしあつさもいまはうすらきて
ゆふひのしたやたもとすゝしき　東京　荒井満武子

なか〱にしのきかねてや網かはの
みつくみむすひころもすてぬる　東京　荒井讃久子

秋きてもまたたへかぬるあつけさに
にきはひまさるおほいそのさと　東京　杉田繁子

秋來ぬとおもひのほかに今日もまた
あつさはなつにかはらさりけり　名古屋　木下鶴子

秋かせのふくとしもなきこのゆふへ
ならの木かけのたゝまうきかな　東京　積山きやう子

しほたるゝ秋のころもゝかはくらん
のころあつさのてる日つゝけは　大和　栗山しゆん子

けふもまたのころ暑さのくもたちて
そてにおほゆるかせもなきかな　大和　栗山たか子

かはほりのあふきの風にあきまても
のころあつさのはゝきなりけり　東京　河合象子

秋きてもたへぬあつさにたちいてゝ
なれししみつをむすひくらしつ　東京　金原玉城子

秋きてものころあつさにたへかねて
ゆふくれをのみまつのしたいほ　東京　山口學子

秋といへどあつさはいまた夏にして
しみつかもとそたちうかりける　濟國　稲田絃子

初あきのかせつよからてきのふけふ
もとのあつさにかへるころかな　東京　青木たま子

あき立ちて荻のうはかせそよけとも
のころあつさの塩へかたきかな　長野　所　季子

秋立ちてわせのはしり穂みゆるまて
なほ去りやらぬあつさ苦るしも　薩摩　松原峯子

秋といへとはきの風たにおとつれて
のころあつさそしのきかてなる　若松　川島謙子

秋といふ名のみたちつゝひるのまは
なほあつくしてあきとしもなし　北見　中川伊代子

秋かせのたちしゆふへのすゝしさに
なほもあつさのきえのこるらん　筑前　ふさ子

ほに出てゝ秋の實のりのうれしさに
のころあつさもいとはさりけり　秋田　三浦さわ子

吹かぬ日は殘るあつさにたへかれて
いとへるあきのかせもこひしき　秋田　佐藤かつ子

秋かせの入りにしそてにいつまてか
のころあつさの身にそこたゆる　秋田　三浦ふさ子

秋たてとそよとおとするかせもなく
なほもあつさのたへかたきかな　秋田　小島いわ子

あきたゝは涼しからんとおもひしを
なほなつかしきまつのしたかけ　秋田　和田りつ子

秋きぬときゝしはゆめかきのふけふ
いとゝあつさのたえかたきかな　松山　水木友子

秋たてとまたたかゝらぬせみの音に
なつのけしきのなほのころなか　伊豫　黒川重子

今もなほあつさのいかてさらさらむ
野邊はむしの音つゆもやとるに　伊豫　黒川かめ子

去りかたき夏のあつさにもろひとか
うちはゝなさてかせをまつなり　水戸　富好梅子

あききてもなほかしましき蟬の音に
ことさらあつきこゝろこそすれ　水戸　富好雪子

秋きてもまたころも手はかへさりき
のころあつさのたへかたくして　水戸　酒井すゑ子

夏さりてあききにけれといまたなほ
はなちかれたるあふきなりけり　中林英子

丙

秋きぬといふことのはは名のみにて
あつさはなつにかはらさりけり　東京　安井あや子

あき風はにはのくさはにおとつれと
なつのまゝなるあつさなりけり　東京　後藤喜代子

秋をあさみ照日はあつくおほゆれと
ゆふへすゝしきをきのうはかせ　東京　永井房子

秋來てもあかぬはしゐのなつころも
ふきかへしてよはきのうはかせ　東京　永井さき子

あつしとておこたりなせそ秋なれや
つゝれさせてふむしもなくなり　埼玉　前野きく子

秋たちておのかこゝろのゆるひしや
ひとしほあつきこのゆふへかな　兵庫　鹽見文子

夕されはつきすみのほるあきのひも
なほさりやらぬあつさなるかな　栃木　金子すみ子

日さかりのあつさは夏のまゝなから
さすか夕への涼しくもあるかな　栃木　中島景子

秋かせのたちてのゝちもとりなれし
ねやのあふきはわすられぬかな　栃木　渡邊ちゑ子

秋立ちてをきふくかせのおとならて
のころあつさにわすられさりけり　伊豫　吉眞貞子

夏ころもぬきかへもせてけふもまた
ひとへにかせをまたれぬるかな　愛媛　高市もと子

まちまちし秋はたてともかひもなし
のころあつさはなつのまゝなる　伊豫　小松千代子

つゝれさす針のはこひもともすれは　たゆむはかりにあつきあきかな　東京　篠田圓子

はこれやま夏はいにしときゝつるを　みやこはあきのすゝしくもなし　東京　山本茂子

をきのはの風は身にしむおとなから　たちかへかたきせみのはころも　東京　岩谷梓子

すみはわろ月のなかめのなかりせは　のころあつさをなにゝわすれん　東京　田村みつ子

ともし火の影もあつしとはしぬして　よな〱つきにあかすころかな　長崎　重原はろ子

なつの日にあき風たてとなか〱に　あつさはかりはのころころも手　長崎　岩田春子

秋きてもまたひとへなろころもてに　すゝしきかせを待ちにけろかな　長野　岡田千穂子

夏はゝやなかれてすきしきのふけふ　あつさはかりはなほよとみけり　筑後　武田龜子

暑さをはさけしたひよりかへりきて　のころあつさのたへかたきかな　河内　辻本ひさ子

秋かせはくものかよひに見ゆれとも　あつさそのころやまのしたいほ　野州　佐野てつ子

夕されはこすゑにかせはさはけとも　のころあつさをふきもはらはす　下野　佐野まさ子

秋たてとなほもあつさのくろしさに　しみつかもとはたちうかりけり　鳥取　大塚信子

秋なからこすゑにのころせみのねに　またもたちよろまつのしたかけ　東京　河田いし子

秋くれはすゝしきものとおもひしに　なほたへかたきあつさなりけり　筑後　武田外代子

秋はまたあさちかうへにおくつゆの　ひろはあつさのたへかたきかな　筑後　鐵山増代子

秋といふ名のみたちつゝ手にならす　あふきはなほもかはらさりけり　下野　川連美喜子

いくたひか岩間のしみつむすふらん　のころあつさにたえかたくして　下野　菅沼德子

夏去りてあきは立てともいまたなほ　あふきのかせにあつさのこらん　下野　菅沼淑子

ひろの間は夏のあつさにかはられと　つきのすかたやあはれまされろ　下野　菅沼まつ子

みそきして蟬とゝもにもはらひしを　なほあつけさののこりぬろかな　大阪　吉田英子

あふきもてはらふとすれとなほ殘ろ　あつさにけふもたえかたきかな　美濃　吉村せむ子

きのふけふ秋とはみゆろそれなから　なつにかはらぬあつさなりけり　名古屋　水野そう子

なか〱にたちうかりけり秋きても　なほゆふかせをまつのしたかけ　和泉　福原すみれ子

またのころ暑さそいとゝたえかたき　みきわのあしをわけてすゞまん　横須賀　上田雪子

秋立てとなほしたはろゝいはしみつ　のころあつさをわすれかれつゝ　横須賀　岩橋花子

つきふみてよな〱かよふ浦なみに　けさはやのころなつのあつさを　三河　堀田伊勢子

天のかはしろくなかろゝよひ〱も　あきとはいはしのころあつさに　三河　白井よし子

いつまてか夏とほのめくはきの葉の　うへふくかせやいつちいにけん　但馬　田尻保代子

なくむしの聲きくあきとなりぬれと
あつさはなほもかはらさりけり　丹波　大槻房野子

秋かせのはやたちにきとおもひしは
あさ日出ぬまのしはしにそある　東京　數島うた子

秋きぬとなのみはきけとわかやとの
あつさはなつにかはらさりけり　東京　牛山業子

ことさらになほ堪えかたき暑さかな
うきにもまさるあきの日さかり　陸前　鈴木しき子

秋なからまたぬきかへぬころもてに
のころあつさそたゆまさりける　陸前　登原つる子

ちりそめしひとはに秋の見えなから
なほかけたのむきりの木のもと　宮城　大槻慶子

あさゆふのつゆには秋としらるれと
ひるまはなつにかはらさりけり　三河　永井さい子

桐の葉はみつよつちりてあきたてと
あつさはなつにかはらさりけり　熊本　田代鶴子

きひしくもものころ暑さはあさゆふの
めくみのかせそしのきよきかな　陸前　三浦ゑん子

日くらしのこゑもかすかにきこゆなり
またこんなつにこゝろのこして　陸前　前田みさを子

この夏もけふをかきりとうつせみの
なこりをしけになきわたりける　陸前　前田河千年子

また殘るあつさをよそにこよみには
なとかはあきとしるしたりけむ　山口　村上操子

なつすきて秋のはしめとなりぬれと
うちはのかせをわすれやはする　大阪　長野悦子

殘りたるあつさはらはてむなしくも
をきの葉にのみかせそよくらむ　松山　上原のふ子

秋ときく日よりこゝろのゆるひてや
のころあつさにくるしみにけり　東京　小松むら子

かはほりをうちすてかたききのふけふ
いつくにあきの立ちやしつらん　東京　小松ひさ子

秋來てもそよとおとするかせもなく
なほあつけさのたへかたきかな　壬生　森岡ふで子

棚はたをまつれるたけにあきかせの
さーとおとするたよりたになし　壬生　岡りん子

秋くれとのころあつさのきひしさに
にはのくさきもしほみたりけり　東京　荒井千代子

日のうちはたへかぬれとも朝ゆふは
すゝかせそふくはつあきのころ　東京　荒井幸子

今日も又くれゆくそらをまちにけり
日かけになつののころかきりは　長野　山本基子

秋たちていく日もすきれなほのころ
あつさはなつにかはらさりけり　長野　小泉みつし子

秋來てもあつき日かすのおほけれは
なほゆふかせをまつのしたいほ　長野　山本直枝子

秋の日のあつさにつゆもおきかねて
にはのくさはもよはりかほなる　三河　服部萬子

秋たつとおもひなしにや日さかりは
なつにもましてあつけかるらむ　三河　服部正子

たえがたきあつさは夏にかはらすよ
あきはたちぬといふはかりにて　三河　本多きさ子

秋といふ名のみはたちてなか〳〵に
のころあつさのたへかたきかな　三河　鵜野くわ子

ゆふ日かけ入てものころあつけさに
かさへつとひてあきとしもなし　三河　河合ぬひ子

秋かせはまはきかうへをわたれとも
ひろはかはらぬなつのあつけさ　播磨　和住千鶴子

あきたてとまた暑けれはなか〳〵に
あふきのかせのたのもしきかな　東京　林　艶子

秋たてとなつのまゝなるあつさかな
たのむあふきのかせぬるくして　東京　林　環子

あなたゝみ手向けの山に閼伽くみて
かへりのみちのあきまたあつき　三河　石原逸子

あきといへと日かけになつはのこりつゝ
かせなつかしきゆふくれのそら　東京　椎野秀子

秋もなほすゝしきかせをまつかけに
またろゝほとのなつはのこりて　東京　椎野鋭子

荻のはの音はあきなるにはかせも
いとはぬほとのなつそのこれる　東京　椎野薫子

あきなから日影はなほそうとまるゝ
くるゝまかきにかせのまたれて　東京　椎野ぬき子

葛の葉のうらふくかせもなつの日に
いかてかはらむたへぬあつさは　東京　深見愛子

きてみれと秋なほあつきまくすはら
うらふきかへすかせそまたるゝ　埼玉　前野壽賀子

秋かせはきりのひと葉をさそへとも
なつのあつさはなほのこりけり　埼玉　前野ふさ子

いつしかに秋のけしきはたちぬれと
あつさはけふもかはらさりけり　三河　石川ます子

おきあへてまたすへひろのそのもとに
かせをともとしくらしぬるかな　三河　石川ぬい子

あき來ぬといへとあつさになかつきの
なかはをはやもくらしけるかな　三河　石川代志子

あき來てもまたひとへなるころもてに
いとひもやらぬかせそふきける　三河　石川代志子

穂にいでゝいろにはあきをみせなから
すきにしなつをまねきかほなる　河内　竹内けい子

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

山家に月を觀て記す

天　本郷區湯島天神町二丁目五番地　山口琴子

秋のあはれは、ふかき山道に、こそはあなれとて、つねにむつましき友どち、かいつらねて、ふりはへものしつ、あるじ待よろこひて、庭の落栗軒の山柿など、處せきまで、とりならべて、もてなしのねもごろなるに、道の程のつかれもしばしわすれて、をかしうおもふほどに、百舌鳥のなくころも、しめりて、くれんとする、向ひの岡の檜原に照りて、さし出たるますみの鏡の、すみわたりたりと、おぼゆるは秋のもなかの月なり、見捨てはたゝまくをしく

て、

　山里の軒の紅葉のあかるたへ
　　月の照るたへよにたくひなき

よるの錦を、あはれと思ふに、あるじのいたくとゝめて、君たちかへりまさば、あたらこのよも、くろうなりなむに、一夜はあかして、かたらひ給へと、そゝのかすも、うれしくて、唐やまとのうた、うたひ出でたる、はれたる空に、かぎりなく、心ゆくよのさまなりけり、かくて千夜をひとよにと、おもふにからすの鳴を聞けばはやしのゝめになん。

人

下谷區御徒町三丁目三十四　岡田柳子

山松の木の間よりもれ出し月影いとさやかに柴の折戸を照して、いざ入りませと知るべなしたらん様なるに、あな床しと打見やれば、懐かし我友の、静けくすめる庵なりけり、いと嬉しうて、おとなへば、よくこそ來ませし、今しも君待つ蟲のなき出たれば、今宵は必ずきまさむと待ち侍りしをとて、迎へますは我友なり。やがて端居して眺むれば、向ひは山々連り續きて、限りもなう月はいよ／＼さやかにすみ登り、蟲の音もいよ／＼しげく、鳴きたてつる月に、哀れをかこつにやあらん。げに靜けきは深山の住ゐよ、今宵はなく蟲と共に、一夜あかさまほし、我友よ、此あかき月の前に、君が妙なる一曲奏で給ひてはいかに、心あらば月もさこそはいならめと、切に乞ふをいなみ難うてや、さらばとて手なれの小琴取りいで、かきならし給ふ音は、雲井に響き、峯の松風も調べあはしたらんやうにて、身は恰も嵯峨野の奥に入りぬらむ心地して、あはれ小督の君が奏で玉ひけん樂も、斯やありけむと忍びいづれば、折しも吹きくる秋風にたぐへて、床しき笛のねさへ聞えくるこゝちして、そゞろ折戸近うたちよりたりしか。

優等

大阪 桝田益子

岑の松風、軒端の荻の音づれて、秋の頃は山里はかり、樂しきはあらじ。霧立のぼる夕べは淋しき物から、都大路の閙しきよりは、中中に心慰むるふし多かり。化は盛を、月は隈なきをばと、云へりけん物から、今宵塵斗りの雲もゐず、望月のいみじう照り渡りて、飛ぶ雁の數さへ見えつべう、ねぐらの鳥も浮れいづるを、徒らに寐て明すべきかはと、草の菴を立出れば、枕の山は眠るが如く靜に、筧の水は音澄み増りて、夢を覺すに似たり、綻べる花の秋、小草の末に結べる露は、さやけき月に光を磨きて、五百つま玉をぬき亂したらん樣に、鳴しきる虫の音は、秋の哀れを盡し、しみ立る森は遠く煙りて、道のべの玉笹の露、星ときらめき、高嶺の松は、塵なき空の匂と成りて、葉越しに見ゆる桂の光は、言ひ知らすかなしく、心唯浮れに浮れて、千々の思も、老となるてふ事も忘られて、去年馬山に物せし折、其のなり處にて見給へしは、かゝりし、某の汀にて眺めたりし節はしかなりしなど、面影の浮び出るも、げに月こそ怪しき物なれ、見る人の心々なるからに、處から其折ふしの情も、さし添ひて將たかなしさも、眺れる哉と、獨言つゝ入るさの影の、いとゞ惜しう、山の端にげてと、打語るまほしうなん。

肥後 佐々有都子

此ころの世塵をさけて、片山かげに、柴扉をひらきて住む人あり。名を秋汀の媼といふ。九月の空なれど照月影を詠めんとて、二人三人ともなひ車にものらで、歩行よりぞいで立ちぬ、夕日のくたちに、柴扉にはつきけり。天地のむた、見はらして、媼が物がほなるもをかしや。夕飯のころなれば、庭の竹床に腰うちかけ、四方を眺てありければ、媼は庭の落栗、軒の椎實に、自製の茶をそへ持出てもてなし、心おきなく、むかし今のものがたりなどして、浮世のちりをはなれし風情おもしろし。東の空の夕霧は海の如く、千里もひとつに棚びきたる、沖より、一きは白く見えつるは、月出の光なり。西の黄色は、日影の名殘なるべし。となりから人まつ虫のこゑ／＼、しきりに、風に音なふ鈴むし、武夫が駒ひきたつる轡むし、秋草の花の錦織る、はたはた、くだまくこゑのきりきりす、きくも賑けき秋に、影にほひぬる今宵の月は、望の夜なり。おもひきや吾家をいづるころは、何の心も中垣ゆはぬ、友どちなりしが、別て、さやけき光見んとは、影中空にみちて、まばゆきばかりになりぬれば、茄子うま煮、柳川鍋などとり出て、月下の宴をひらき媼にすゝめて、一二杯をかさぬるもたのしや。

肥後 徳永康子

秋の夜はいづこもおなじ月の光の、わきてみゆるは心からにや。げに誠ならずや、今宵は望夜とて、日頃まちにしほどに、入相まちかねがほに、差出る月影を、みるだにうたてき、我山陰の軒ばより、さやけき光さし來るも、いとうれしく覺えぬ。さはがしき。浮雲かからぬ庵とて、秋夜の感、こと更ふかき思ひなかこつらん。千草の花には、鈴虫の鈴ふるこゑ、ゆかしきに、あこがれいでし、はらからが聲あらそひて草村を唄ひまはるもいとゞをかし。松枝に銀かけたらんやうに、月の姿のきよきも、おきあまる露の玉なすも、住なれし我ふせいほともおぼえぬばかりうるはしきを、心高きみやび男に、みせまほしきなど語りあひて、歌人あらば此月を、繪師あらば此けしきをと、言の葉ぐさも、月にのみ心ひかれて眠もやらず、ながめあかしてなん。

東京　金原玉城子

山里に、なり處もたる、人のもとより、まだ住なれぬ、家ゐなれど、ことしの秋は、かならすとふらへと、せうそこありしを、おもひ出で、よはなれたる、けしきもゆかしう、ひとよの旅寐を、せまほしう、思ひなりて、いたりにければ、あるじまちよろこびて、なにくれのもの語りして、くだ物などとり／＼に、出してもてはやしたれば、みじかきころの日影も、いつしか入相の鐘に暮ぬ、こよひはこゝにめづらかなる、木の間の月を、見て明さばやとおもひて、かたらふほどに、むかひのなかより、にほひ出たるは、かねて待つる望月なりけり、むら雲もかゝらぬ空にてりわたりたるは、この世のほかの心地にてやまと唐歌よみかはして、空のみあふぐにあるじのよめる、

夜よしとゝ今更誰につげやらむ
　まち出し月に友もつとへば
山里の杉の立枝にやどかゞみ
　かけしと見えて月の出たる

おもひ／＼に、あまたありしならむか、うろさければかゝす、露とともにおき明して、まきの戸も明ながらになん。

伊藤　梯　たけ子

ますみの鏡か、しら玉かと、歌ひ給ひけん、げにや清らかなる、十五夜の月、木々の梢を洩れて、葎はふ軒を照らしぬるさへ、嬉しきに、いつしか高峯の松を離れて、塵ばかりの雲だにもなきみ空に、澄みたるけはひ、えも云はれず、絵にも寫し得ぬばかりなるを、見るからに、自づから心さえ／＼しうなりもてゆきぬ、あゝ思へば、月は何處の隔てもなくて、同じ光なる今しも、都の姫だちは、如何に眺め玉ふらん。あはれ人に知られぬ、片山里の賤が身なりとも、くまなき月の鏡に對しても、つゆ恥かしからぬやうに、いよゝ心のま玉をみがきあげばやとこそ、思はるれ。

東京　深見愛子

秋のあはれはといひけむ山里のゆふべをまちて鳴しきる虫のこゑ、露けくて軒端なる萩すゝきくさ／＼しげりあひて、とり集めたる折柄のけしきいとをかし。暮れかゝるほどに、向ひの山の高ねの松が枝に、みがきいでたりと見ゆる月影、鏡のごとく澄昇りて、さやかにかゞやきぬ。心のくまさへはれわたり、よの浮雲もかゝらぬ大空をふりあふぎ、見ればたゞならず珍らかにて、いはむかたなし。都にてはかゝるよきながめはあらずなむ。

さをしかのなくね淋くもきこゆなり
　月さしのぼる峯のあらしに

年つきこの山里に住つるかひよと思へば、日頃の淋しさもわすられて。

東京　篠田園子

月は人の心々によりて樂しうも悲しうも見ゆる物なれど、月見ればと古人も歌ひけむ如く、誰が目にも悲しう見ゆる物なりけり。さるをましてや嵯峨野の奥に世を避けて詫しう過しゝみつぼね、筑紫の果てにさすらひて長くも天皇を偲び奉りし君はや、そも如何に悲しう見そなはしけむ。いかに思ひや深かりけむ。かくさま／＼の事を思ひ出でつゝ、或は悲しみ、あるは喜びて、歌に詠じ、詩に吟するが月に對しての樂みなるべし。さはれ月と斯く前後に山川の眺めを控へたる庵に、心靜けく眺めてこそさもありけれ。塵深く物騒がしき都にて見なば、さしたる風情もあらざるべし。あはれ石山に月を友として才筆を揮ひ給ひし紫のおもと、又外國の濱邊に三笠の

山に出でし月かもと歌ひ給ひし君たちは、我が身一つのと悲しみしにもあらねば、其心々や一際床しかりしならむ。などゝ友も訪ひ來ぬ山住の徒然に月に向ひて思ひ浮びたる事どもを聊か書いつけしになむ。

日向　紀藤榮子

げにや流れ行く月日に關守なく、哀れ今年もいつしか、夢のまに打過ぎて、破窓に訪づる朝夕の松風も何となう物淋しく、そゞろに悲しき心地す。まして、軒の露置く草に、又は小夜更けしわが草庵になく虫の音、手に取る如くきゝなしては、哀れ其かみ心有ある人の。淋しさに宿を立ち出で眺むれば、とすさびけんも、今更の樣に身にしみて、秋の哀れは又一しほなり。そゞろ軒近う出でゝ眺むる折りしも、彼　の山に浮び出でし月の限なう冴え渡るに、紅葉の錦、ふみわけてや出でけん、妻戀ふ小男鹿の聲、きこゆかと見れば、友にやおくれけむ、二つ三つ四つ、月影を掠めて南に飛び行く、雁金の悲しき聲は吹き來る風につたへられて、實に秋は都も鄙も、いとゞ淋しき物なるを、まして山家は、見るもの、きくもの、皆哀れならざるはなきぞかし。今宵澄み行く月を仰ぎて、哀れ山里に老いゆく我は、都に物學びにとて旅立ち出でし友の身の上のことなど、はてしなく思ひめぐらすにて有りき。

(以下原稿到着順)

和泉　福原すみれ子

何事も足はぬがちなる山里も、春は花、秋は紅葉とあはれつきせぬ眺めの中にも、わきてをかしきは月夜にこそあなれ。一村雨の過ぎつる名ごり思ひ捨て難くて待つ程もなく、八月十日許りの月はいと花やかに、山の端をさし上りて、あさちが露に宿りて、うちゆらぎたるけに言ひ知らずをかしきに、葎の宿も今宵ばかりは、玉しきの宮にも劣るまじうおぼえて、ゐもねられざるまゝ箏とり出でゝ月に一曲しらぶる折しも、同じ月見のすさびにや向ひの山かげより、笛の音ぞ聞ゆなる、いかなる人のかくも妙に吹きすさぶらんと床しう、そゞろ平氏の昔さへ思ひ起されてあはれなり、垣根の虫はいつもより節面白う鳴きすさびて、遠里のきぬたの音さへさやかに、松吹く風の間に〳〵おくられきて言はん方なし、いつしか夜も更けて月は高く中空に上り、千里の外も明らかに、心にかゝるくまもなう、すがすがしくいよゝすみもて行きて、恰も仙境にあそべる心地になん。あはれ都人よ、此山里のあはれなる月の景色を知り玉ふや、いかに。

下野　菅沼とく子

四季折々月雪花のながめあれど秋の月はわけてたのし、あはれこの月を學びの友として遊ばゝいかに。

今宵はしも待ちにまちにし望の夜の事とて、まいて月の光もきよき物よ、されば池のほとり前栽の風情などいかにおもしろからんなど、おもひやりつゝ文くりひろげたるに、ひるのつかれにいつかまどろむ折からに、山ぎはすこしあからみさし入る光のきら〳〵と映ずるに、何かとおどろき、あたりを見るにはさやけき月の光になん。かゝる山奥に住みつればたゞ耳に入るものは、夜ふけて鳴くむしの音、目に入るものは、千草のつゆにやどれる月かげ、見るにつけてもみやここひしき心地すなれ。

長野　松澤まつ子

ちり立ちやらぬ、山里は、月の光も、何となう貴くあふがるゝよ。まいて此頃は、後の山も、前の岡も、もみぢすればにや、一入はばえしうおぼゆるに、門田のいねは、秋の豊さ穗にあらはれて、黄

金色にかゞやくぞいとほこらしきや。眼を近く庭の面にそゝげば、つくろはぬ垣根の邊りさら〳〵と流るゝ小川に、影をしたして、咲ける、糸萩、やさしう、尾花が袖、又なつかしきに、虫のそこはかとなくなき出でたる。いひしらず、あはれ深し。あはれやげに、今宵の月に向ひて、あるは古を忍びて泣き。あるは、未來を想ひて、ほゝ笑む人もあらん。これ月の光の異なるにか、あらず〳〵、おのがじゝ、心々によりてこそ悲しとも樂しともおもはすらめ。されば己等女子達は、大和女の、ふみ行く正しき心もて、月の鑑に、てらしみて、心のくもりを打拂ひ。よしや都邊りに、生ひたち給ふ、なでしこのごと、香りも高く、榮ねずとも、せめて、秋の野末ににほふ白菊の、世のけがれにそまざらぬやうあらまほしうなど、思ひつゞくる間に、夜や更けぬらん、里の童の聲もたね、遠く近くきこゆる、きぬたの音のみ、我心と共に、いよゝすみまさりぬ。

東京　三好珍子

世に心ひくことのなき山里の、いつとても物の哀れならぬ折はなけれど、秋の最中の月の頃は殊になん。世の浮たる雲もかゝらぬ此清けさよ。のかれこしにはあられど、住詫て身をかくすべき、てふ古歌さへ思ひいでられて、餘りくまなき光かな。目はいつとても見ん人の心々によりて、悲しくも嬉しくもながめらるべきを、千々に物こそといひしは、げに其心からにや。かの名高き紫式部は石山寺の月に心をみがきつゝ、源氏物語てふ書をつゞりしも、世こそかはれ影は同じ此月ならずや。さるをまして日に月に開けゆく大御代に同じ人と生れ同じ影をあふぎつゝこし折歌一首だに心のまゝによみねぬ身こそいと〳〵悲しけれ。などひとりごちしつゝ月にむかへば、さすがに長き秋の夜も、はや三更となりぬらん、大空高くすみ渡りて、いつこともなくたね〴〵に聞ゆるきぬたの音もいと哀れなり。山里の心安さはやり戸もさゝでふし戸にいりぬ。されど目も心も月とともにさねて、いねがたければ、又立いでゝ心にうかびし事どもいさゝかかいつけぬ。

播磨　和住千鶴子

一年の内、月ごとに月は照せど、秋の月こそ、いみじけれ。やがて望の夜となれば、あかねさすひるより、打あふがるゝ天津み空、あだしむら雲もなきに、いとうれしく、ゆあみものして、たそがるゝ頃よりすのこの端ちかういざりいで、月まち居りぬ。庭の千草にすだく虫の音、山里のさう〳〵しさを破りていと哀れなり。なり〳〵通ふ秋風も身にしみ渡りぬ。かゝるひまに、みそらの星の數少なうなりゆくまに〳〵、明るうなりぬる山の端、あなと見るまにさし出る月影いと清く、峯の一木の松が枝に、今しも半を照し、月に松ありやとをかし。見る人の心ごころに任せつゝ空たかく影すみわたりぬ。さやけき光、秋草の露に宿りて、葉ごしの月はらはゞ、玉とちりぬべし。石山寺のいにしへ人、あるは、山の端にげてと云ひけん、みなこの月をめでにき。げにやこの月、久方の雲のうへも、あまさかるひなの伏屋も、けじめなく照らすなる、いとめでたし。たがすさびなるらん、なり〳〵聞ゆるつま琴のねに、いとゞ軒もる月の、小督が昔ぞ忍ばるれ。さよふくれども、いもねられず、いざこよひはさやけき月と共にあかしなん。

三河　石原逸子

都に病を獲てしより、此の山里にやすらひて、もはや二月あまり七日をぞ過ごしぬる、いためる足もしだい〳〵にかろやかに、今や朝夕山近き瀧つ瀬あたり、さすらひうるやうなりぬ。山里は殘れる秋の暑さの薄らぎやすく、涼風わたる夕つ方よりは、單衣一枚にては

うら寒くおぼゆ來りぬ、今宵明らけき月はひむがしの茂山より匂ひいでゝ、其の放てるしろがねの箭もて、三千萬里殘る隈なく射り始めぬ。

あたかも此日、遙か都のあたりより訪れこされたる、親しき舉業女史の君と、簀子の端近かういざり出で、月にかたらひ、歌を詠じ、一杯の遊茶一片の干菓子に夜の闌るをも知らず、圓かなる月の、杤ちかゝりたる軒端にかくれ、佛法僧のしきなくに、およびて、涼しき枕をなめて臥しぬ。

隣の室の時計にや、十二時をしらせぬ、またく忘れゐたりし足のなやめるを思ひ浮びぬ。

三河　石川代志子

日もすがら訪ふ人の、道遙く有ぬれば、野山の景色あさりつる其日暮るゝの、いとほしうなん侍りける、春は花と散り、夏は川の流れと諸共に、昨日や、今日と、過ぎ行きて、今は桐の葉裏に吹風の、いと身に染みて、溪川の流や、月に嘯く虫の音も、何と無う、見るからに、聞くからに、山住の身の、いとひも、覺ゆ侍りぬれど、又友と眺める、月をやと、ふりさけ見れば、望月の、賤の伏屋や、松が枝を、さやかに照す光さへ、草の葉末の露毎に、千々と碎けて、蕭もあざむくばかりに、窓の燈の影淡く、實に仙境に入たる心地せられ、故事のそゝろ思ひ浮ばれ、先つ頃古文、ひもときける、其が内に、

去年今夜侍清涼。　秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今此在。　捧持毎日拜餘香。

斯く賦しける紳の、大宰府にましく〱ける時や、如何計りなりけん。我も亦、流罪の身とし思はれ、同情の念止み難く、衣手絞る其露に、又もや映る月影の、友と賴みし甲斐もなく、いと憎ましうなん、變り行世と知りながら、心に賴みし愚かさよ、公も徒然に文學び給ひけるとよ、吾も文筆友とせまほしうなむ。

三河　石川滿壽子

いつしか秋のけはひの立つまゝに、住馴れぬ片山里の淋しさは、心なき身にも知られぬ、桐の一葉の散り初めしより、正木のかつら色づきて、荻の葉風も身にしむ今日此頃、鳴きしきる虫の音、冴ゆ渡る月の影こそ、離れがたなの友にぞありける。都の空にては、たださやけき物とのみ、おもひて深くも感ぜざりしに、かゝる深山に住居して、淋しき月日を暮しぬるに、月のさやけき此ごろは、いぶせき伏屋をも照して、徒然を慰めぬるよすがともなりつれば、床しくも、慕はしくも覺ぼゆるになむ。况して今宵は十六夜の、月の光もいと清く、草葉にすだく虫の音も、いひ知らず哀れに覺ゆて、そぞろ涙を催ふしぬ折柄、何方やらむ打すさぶ砧の音さへ聞ゆぬれば、人傳にのみきゝし身の夢にだに知らざりし賤の女のなりはひの程忍ばれて、さらぬだに露けき袖の、一入ぬれ勝りてなむ。あゝ、樂しとも見し月を、今は哀れと見る如く、樣々に移り變る世の中に、月のみは、よゝな照して變りなきめでたさよ、いでや吾身もこの友のごと、いつ迄も塵の世に染まで、變りなうあらまほしきを、切に祈るになむ。

淸國　稻田綠子

げに、月ほど人にめでらるゝものぞなき、秋は更なり、月々に相見る月も夕月の頃より、日毎に今夜〱と待わぶるばかりにていづれおとりまさりのなきながめにてなん。しかはあれど、山里の月こそわけてめでたけれ、わらは事過ぬる七月なかの頃より、此地の山深闇てふ處より凡そ一里ばかりはなれたる二郎山てふ處に、一家こぞりて、避暑にとてまかりぬ。山里の景色はいつ地もこゝちよきもの

の、此里は北濱にまれなる風景とやにて、朝な夕なのながめ、またみやこにて、いぶせしと、いとふ雨の日は、見渡す山々の木々は、降りそゝぐまに〳〵、洗はれて、見る目いよ〳〵濱けく、殊に月の夜は、峯の松風のこゑ、谷川の水のひゞきにつれて、月はおもしろく軒ばの松にかゝりて、心も共にすみのぼり、おのづから仙境に入たる心ちして浮世のちりは、いつこにたゞよふやと、うたがふばかりにてなん。

すみのぼる松の葉こしの月濱み
　宵々毎にいねがてにする

日向　紀藤のぶ子

錦織りなす秋の野に七草の花咲きみだれし野邊を辿る、旅僧の金襴の袈裟吹く風に、亂れ咲きにし藤袴、そよ吹く風に打ちなびく山里の尾花が袖に、置く露のはら〳〵と散りぬるあたり。玉萩の下に、暮れ行く秋を惜みて泣く蟲の音いやほそくなるまゝに、夜もやうやう更けぬれば、隈なう冴ね渡る月影に野邊の千草に置く露も、色ある樣に思はれぬ。折りしも彼方の岡に妻や戀ふらん、子やたづぬらん、鳴く鹿の聲きゝて、誰かは秋の夕の悲しからめやは。心なき身にも哀は知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮。と西行法師の衣の袖を絞りけんもげに理りぞかし。又は光り物凄う冴ねたる月影を遠く掠めて、雁鳴き渡る秋の夕の山里は、又一入なりけり。月見れば千々に物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど。と古の聖のすさびけんも今更の樣身にしみて、物思ふ身には、聞くもの見るもの、なしなべて涙の種にぞ有りける。

友もなきこの山里の月の夕
　秋の哀れを集めてぞ見る

長野　所　孝子

ひれもすなりはひにいそしみし男をゆあみにいやしたのしきまどゐに、くさ〴〵かたり合ひつゝ夕飯したゝめ、いざとて弟妹誘ひ立て涼風入ればやと、障子左右に打ち開けば、あないみじ、空はくまなうはれ渡り、さつと吹き入る心地よさ、ましてや三五夜の月、東の小山の峯に今しものぼらんとして、並木の松の梢をもれて、きら〳〵とさしたる得も言はれずめでたしとも、めでたしや。われを忘れて見る間に、早くも山の端こねて濱き濱き姿を現はし、庭の草木のかげ長く此方の窓に差し入りたるさま、何にかはたとへん。折しも寂たる空をもれて、遠く人聲のきこゆるは、われらと同じく月をめづるみやび心の人にやあるらん、あゝ此月此景、筆の力の強かりなばみやこの友にかいやりてんものを。

東京　杉田繁子

岩ほのなかも、秋風ぞ吹といひけむやうに、何方も、折ふしのよのうきは、はなれずや。」ちりをへだてしと聞し、みやまの里も、秋のあはれはこゝろつくしになん。みしかきころの、日影山のはの雲に、赤くてりてからすの、ひとむられどころに、打つれて行も、はろかに見やらるゝほどに、夕べの光りくらうなりゆけば、蓬がもとの、虫の鳴あらそふも、處せきまでにて、とり〴〵あはれなれば、いさよふ月を、今やと待ほどに、むかひのをかより、まつの木のまに、かゞやき出たり、

すみまさる月の光りは大御代の
　千代もくもらぬ鏡なりけり

此あたらよを、ひとりのみ見るも、いとあたらしくて、

三重　中邨照子

秋の中ば頃、契置きし山里の親しき友がり訪ぶらひて、月あかき夕

べ、向ひの岡に立ち出づるに、思ひしよりもしろく萩、きちかう女郞花など所せき迄、咲き亂れ、尾花の末に宿れる白露は、玉かと輝き蟋蟀鈴虫なんど草むらごとにすだきて、露けき聲は優しくも哀れ深く、一つらの雁はみ空高く渡りて、其數さへ定かに數へつべき、月の光のさやけさよ。

遠の里はに砧打つ音は、月と共にさえ〴〵て、誰が子のすさびなるらん、笛の音遠く向ひの村里よりもれて聞ゆ、われも友も何時しか默し、風も無きに桐の一と葉音して落ちぬるに驚ろきて、面をあぐれば、月はいよ〳〵さえ渡りて、何をか示すさまなるに、感せまりて我は面を掩ひぬ、なげけとて昇りし月かと眺めにし西行の心もけにことわりや、世の哀れをば我が身一つに集めてぞ見る、今宵かな。まこと月は世々の片見なれ、露深き嵯峨野の奥に貞女を照し、又足柄の山に惜き別れを照しゝも此の月なれ。配所に腸を斷しめ、越路の霜に、猛者の心を慰めしも、此の月なれ、あはれ十とせの後、今宵の月をいづ地にていかに眺むるや。あなおぼつかな。

東京　中林　英子

山住程樂み多きはあらじ。海邊なども、及ばさる處あり。木々は繁りて、天然の家根を造り、泉は常に時ならぬ聲とび交ふ。窓を開けば、月は今しも、山の端より出でんとす。その美はしさ氣高さいふ斗りなし。月の雄々しき松と對せる時は、優美なる事常にもまして見ゆ。宜なるかな、身は恰も仙界にある心地す。人も月の如き廣き心持ちたらんには、かなしき事もなく、如何ばかり良からんに、なと、をろかしき事ども思ふまに、いつかふけぬらん、時つぐるかれの音、いとも淋しく、こそきこえけれ。

女鑑兼題豫告

歌　　文

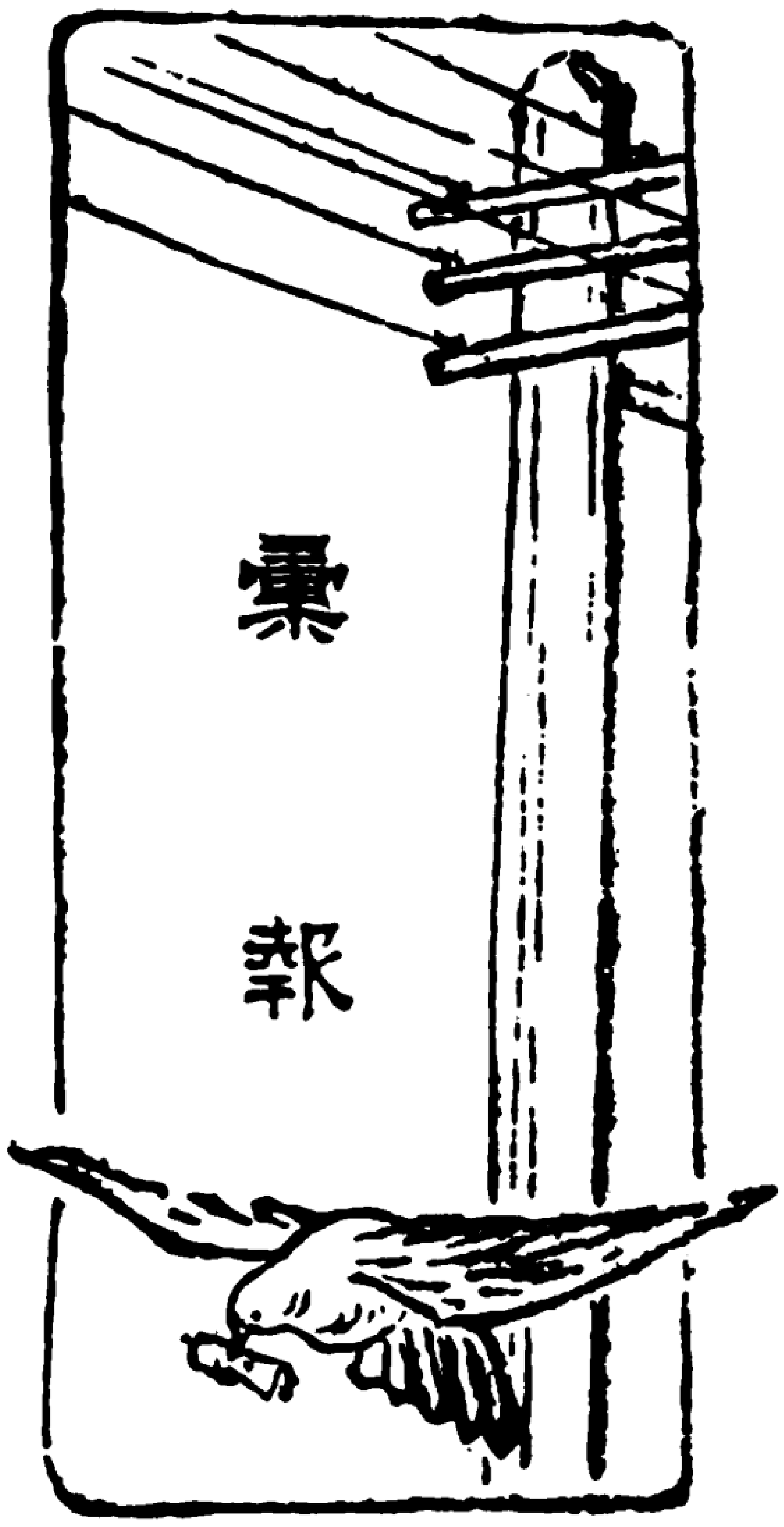
十月
- 一　日…名所鹿　　燈火親むべし
- 十五日…擣　衣　　故郷の母に

十一月
- 一　日…浦千鳥　　野戰演習を觀る
- 十五日…落　葉　　菊花を贈る文

十二月
- 一　日…遠山雪　　冬の家庭
- 十五日…寒　月　　歲　暮

注意

編輯上の都合により拾月分より**和歌投詠〆切期限を廿日前**とす即ち一日の分は先月十日迄十五日のは前月二十五日迄とす遲れたるものは沒書すべし



○家庭上の皇室

皇室と國民とを懸隔する萬里當ならざりし歷史の階勢は、今日尚は一般國民をして麗はしき皇室の御內狀を熟知するの便宜を欠かしむること、吾人の常に遺憾とする所なり、皇室と國民との關係豈に單だ政治の高壇に於てのみならんや、國民たるもの更に個人としての皇室を知り家庭としての皇室を知り皇室と國民と社交的に接近親和するに非ずんば君民同化の理想境に進行すること容易ならず、（毎日新聞）

僅に之を聞く、曩日天皇陛下の神戸に觀艦式を擧げ玉ふや、偶々海道に御保養中なりし皇孫迪宮殿下には某停車場に至りて陛下に拜顏し玉へり、三歲に成らせ玉ふ愛らし盛りの殿下が滿面喜悅の淸波を溢らして陛下の御座近くチヨロ〳〵と步ませ玉ふや、侍臣等皆な其の天使の如き聖容に恍惚たり、而して叡慮如何と見上げ奉りしに、陛下には只た『ウー』とばかり一聲龍音を漏らし玉ひぬ、侍臣等御感の程如何を推察し奉るに由なく、而して發車の時早くも迫りたれば、迪宮殿下の御養育係も竊に不安の念を抱きつ、殿下を擁し參らせて退けり、笛聲一發龍車は直に西下せり、

陛下御歸京の後、一日德大寺内大臣御前に在りて四方八方の御物語申上げ、話頭轉じて觀艦式の一條に入りしに、陛下曰まはく『我海軍の忠良と熟練とを見るを得たるとは元より歡喜する所なりと雖も、而かも今回の旅行中朕の最も嬉しく感じたるは圖らずも迪宮の訪問を受けたるにてありき』と爰に於てか當時侍臣等の疑問たりし『ウー』の龍音は、實に陛下が無上歡喜の御表情に外ならざりしことを了解し、直に此旨殿下御養育係へも電報し、一同胸を撫して安心したりと云ふ、記者は之を洩れ承りて、深厚切烈にして天眞なる陛下の人情に感泣したりしなり、孫の可愛さは賤の伏屋も九重の雲上も、一毫異る所あらざるなり

○皇孫殿下御近狀

箱根に御避暑中なる迪宮殿下には此程侍醫より御體量を伺ひ奉りたるに約八十五匁を増させられ日夜御健勝に渡らせらる又淳宮殿下には過日來少しく御時候當りの御氣味なりしが昨今は全く御快癒に赴かせられ常の如く御用邸内の御運動あり先月來全く御乳人の乳を廢せられ牛乳五合幷に柔らかき米食、輕き魚類等を召させられつゝありと承る、

○富美宮、泰宮兩殿下

箱根宮の下御用邸に御避暑中なる富美宮、泰宮兩内親王殿下には御轉地後益々御健勝に渡らせられ侍醫より一回も御藥を進め奉りたる事なき程にて日々の御運動は毫も怠らせ玉はず過日は强の浦（大地獄の裏手にて御用邸よりは約一里半あり）迄御徒歩相成り其翌日は絶頂湖水畔なる函根離宮に成らせられたり斯く連日の御運動にも全く御疲勞の御樣子を拜し奉らずとて林御養育主任以下何れも喜び合へり昨今は毎日午前六時御起床午後八時より九時の間に於て御寢に入らせられ御食事は朝夕日本料理晝食は洋

食を召させらる御用邸中には四ヶ所に温泉を引き毎日一回づゝ御入浴相成る由暑中は各教師に休暇を與へさせらるゝ御思召より御課業は一切御休止只近侍の人々より御復習を申上ぐるのみと承はる

○世界最富の妃殿下

丁抹の皇太子妃殿下にして行く〳〵は皇后の位に備はるべきルイス殿下は容貌は美はしとにはあらねども之を償ふべき天の配剤にやあらん世界最富の皇太子妃殿下たる好運を有し給へり即ち殿下は御母君たる故瑞典皇后陛下より遺産として七千萬マーク（三千萬圓）を受けしかも其資産は爾來益々増殖しつゝあり而して殿下はたゞに世界最富の妃殿下たるのみならずまた世界の皇妃中最も丈高き御方にして身長六呎に餘り此頃皇太子殿下と共に巴里に滯在ありし時には雲漢を摩するが如き妃殿下の身長は痛く都人の目を欹てしめたりといふ殿下には八人の皇子女あり四人は皇男四人は皇女にして長クリスチャン殿下はメクレンブルグ、シユワリン大公の妹君アレキサンドリア女皇に尙し後の儲けの君として國王の位と母君の遺産を嗣ぐべく次の皇子チャールス殿下は姻戚なる今の英皇エドワード七世の末の皇女モード殿下と聘定の約ありといふ

○奇特なる小學教師　秋立ちぬと云へど正午の日影猶暑き先月廿八日午十二時頃京橋區南新堀町一番地の牛乳販賣兼氷水店沖重吉方へ年齡廿四五の書生風の男入來たり式の如くに氷水一盃を注文して氷削る鐵鉋の忙しきを待つ間にフト見れば彼方の帳場の傍らに修身書を繙きて他念なく讀居る一人の少年あり大方の學校は暑中休暇にて生徒は魚釣り蜻蛉釣りに忙しき折柄この日中に書を讀む少年の心入れ扨も賴しと彼の男はつく〳〵視入りて感じ入りたる氣色なりしが軈て其方に膝押向けて君は中々の勉强家と

見ゆるが當時は何處の學校へ通ふやと問ふ、右少年は主人重吉の甥良一郎と云ひ先年叔父を便りて信州より上京し先頃まで某小學校に通ひゐたるも學費不足の爲め六月以來退校し當時は叔父の稼業の手助する間に責ては習ひ覺えたる書物だけも自修せんとて日々復讀してゐる者なれば問はるゝまゝに其の次第を語りしに客は愈々感嘆して試みに其の書物に就て樣々の質問を試みしに何れも聲に應じて淀なく答へたれば客は洋盃の氷の融けて温むも打忘れつゝ暫時問答に時を移せし後懷中の墓口より五圓紙幣二枚を取出して君は誠に奇特の少年なり其の苦學の所志如何にも床しく慕はしく思はるゝに付き失禮ながら此れ參らせんと白紙に包みて良一郎の前に差置き甚だ輕少にはあれど學費の萬分一にも宛給へ猶此上にも勵み給へ怠り給ふなと呉々も云ひ聞かせて其まゝ此處を立去りたれば良一郎は夢かとばかり驚き且喜び折しも不在なりし叔父の歸宅を待つて斯くと告げたるに重吉も驚き且怪しみ唯此のまゝに捨置かんも如何なれば兎も角も一應は其筋へ屆け置くに如は無しとて取あへず右の次第を永代橋派出所へ訴へ出でたり然るに同夜九時頃彼の男が再び同所界隈を通行したれば同派出所巡査が呼止めて取調べし處右は靜岡縣濱名郡和田村大字安間四十三番地江西藤十（廿四）と云ひ同縣磐田郡二股町高等小學校の教員を奉職しゐるが元來相應の資産家なるより暑中休暇を利用して上京し牛込區新小川町一丁目十六番地矢野鶴藏方に寄留して所々見物する中同日端なくも沖方に立寄りて良一郎が苦學の身を憫れみ扨こそ學費として突然に金圓を贈りし次第と判然したれば彼の十圓の金は其意の如く良一郎が受納する事となりて双方めでたく立別れしと云ふ教育界腐敗と罵らるゝ今の世にも斯る奇特の師もありけり

○孝行なる嫁　埼玉縣浦和高砂町百卅一番地栗原晉松(五十九)は妻マチ(五十三)長男七五郎(廿六)次女ワカ(廿三)三女キク(二十)及び七五郎の妻リキ(廿八)孫ハル(五才)ナツ(二才)の八人暮を爲し晉松は板橋停車塲の旗振りに雇はれワカは先年高砂町織物仲買商海老屋事星野紋藏方に雇はれ近來は同町の鈴木某方へ住替へたるがマチは本年五月頃より病氣に罹り家計困難にして醫藥も給する能はず紋藏は此を見兼ねて同町山村病院長に依賴してマチを診斷せしめ胃癌ときゝて益々哀み金を出して醫藥を服せしめ居ると然るに長男七五郎は此に引換へ日々四十錢の賃錢にて精米所に雇はれながら實母を顧みずして日夜酒色にふけりワカは奉公中の身にて思ふやうにならずキクは性來聾者なるに家を外にし遊び暮し只感心なるは嫁リキのみにて二人の子を抱へながら姑マチの病の枕許を離れず看護を爲し又家計困難なるより毎日拂曉にナツを脊負ひて山林に入り枯枝落葉を拾ひて之を町に賣り或は近隣に雇はれて粉挽をなしなどして日々數錢の賃金を得て病者に奉じ居るにぞ附近の者等此を哀み思ひ／＼に衣食を與へ居るといふ

○有害白粉と無害白粉

(當局者の檢査)

白粉に對する警視廳第三部長醫學博士栗本勝氏の意見を聞くに其要領は左の五項に歸着せり

一、女學生の白粉問題は只外觀上の問題たるに過ぎず從て通學の時を除く外は用ゆるも差支なし

二、衞生上より觀察するも婦女の白粉を用ゆるは敢て差支へなし

三、鉛毒は人の想像せる如く甚しきものにはあらず

四、成るべく無鉛毒のものを用ひて薄化粧するは

精神衛生上必要の事項なり

五、白粉を用ゆるは間接に身體清潔保持の上に影響して所謂衛生に叶ものなり

而して猶同氏の語る處に依れば府下にて製造販賣せる白粉を試驗せしに左記六十六種は多少の鉛分を含み他の二十種は全く鉛分を含まずと云ふ

▲有鉛白粉

吉野香　菊童　きく童　玉の露　若ざくら　雪鏡　ゆかり香　花月香　九重　牡丹白粉　花園　白露　花の雪　富士見形　雲井　キレー白粉　花のつや　東にしき　雪のつや　千代の玉　雪の友　富士霞　八重錦　鶴の友　都の花　花王白粉　新花王白粉　小町水おしろい　ダイヤモンド　佛蘭西美人スノー　雪の梅　音羽菊　小町梅　壽美禮白粉　小町白粉　京の水　ふか磨白粉　小町香　丁子香　白玉粉　天上香白粉　都白粉　玉白粉　都錦　都雪　金明粉　生白粉　練白粉　花の錦　雪の花　初さくら　白牡丹　都の水　ホワイトローズ　玉の花　八重櫻　宮田白粉　飯田白粉　小出白粉　小兄白粉　やまと錦

▲無鉛白粉

無鉛製衛生白粉雪　衛生白粉白ゆり　パンジ　白妙　水晶おしろい　メリー　名譽白粉　御園の雪　やまと櫻　宇森紅葉　すぐれはだ　キメハヅタイ　土屋白粉　雪の膚　夕顔　菊の露(横井)　はつれ白粉　國の花　新式無鉛やまと錦　菊の露(井上)

○袷着新調の見立

秋立ち初めて早や白露の節とはなりぬいざや衣更への時も近づきたれば三井呉服店に就きて當季流行の袷着を紹介すべし

△色合　は春期に比べて差して變りなし婦人向二十歳前後は薄葡萄、栗梅、鍋島柿、錆葡萄、藤生壁の類又三十歳前後の向には鐵納戸御召鼠、生壁鼠等上品なり又十七八歳以下の令孃向は以上の最も淡き色を好む即ち淡紫根、花葡萄、藤鼠等なり

△上着の地質　袷着は縮緬ものを主とす但し近頃は小皺なるを好み大皺物は頗に廢りぬ又近年同店にて新製せし金紗縮緬は其織方竪絲を羽二重織に爲し横絲を縮緬に織出したる羽二重縮緬とも云ふべきものにて袷着として頗る着工合好ければ之を地として島

染又は小紋の類を置けば此上もなき袷ならん次に模様ものは紋羽二重が上品なれど意氣の好なれば倘は縮緬に限るべし昨今流行の絹縮は單衣又は袷羽織のやうのものには適するならんも袷着としては不向なり

△上着の模様　十七八歳の令孃向きは裾模様を普通に後背へ廻し染落しに上げるが流行なり廿歳より三十歳前後までは江戸褄模様を用ひ矢張り染落しに上げたるもの一般の嗜好に投ぜり扨て右令孃向に適する模様の型は裾模様に籬と菊を寫生風に色染となし菊の匂及び葉蘂の所へ刺繍を應用ひたるもの又は南畫風の春蘭を染上げて其花に刺繍を施したるもの或は觀世水に花紅葉を散らし其水紋を白拔に上げて色絲金絲の刺繍を應用ひ若くは秋草の叢生せる模様に紅葉の葉取を地色との境界に配置し其秋草の所へ少しく刺繍を應用ひたるもの等なり（以上二枚重ね仕立上代價五十五圓より六十圓位）又二十歳前後の方にて少しく派出なるを好む向きは江戸褄模様に染上げ其型は淡鼠色の籬に色差しの鐵線蓮を置き又水引草の葉を白拔に上げて其花を彩色に染出し或は石路の葉を鼠色に上げ其花心へ少しの彩色を應用ひたるもの等最新の意匠なり（以上二枚重にて仕立代價五十圓以外）三十歳前後は矢張り江戸褄模様に染上げ其型は淡鼠色の大内霞に光琳の豆菊を置き又は光琳の波に千鳥を白上げに染出し淡墨の彩色を取合せ或ひは結び水引を染拔に上げて之れに金銀絲の細き刺繍を應用ひたるもの等最も上品なり（以上二枚重にて仕立上代價四十圓より四十五圓位）

△襦袢　二十前後の向きは大概友禪縮緬を用ひ地色は路考茶之れに匹田入白拔の荒波を置き其間々へ細き金糸もて七五三の横筋を霞の如くに入れ刺繍したるもの又は地色桔梗色に蔦の蔭陽と櫻花を寫生風の

色染とし其間々へ匹田の紐を模樣の續きとなし巧に配置よく染上げたるもの或は紅地に匹田の荒浪を描き其中央へ白拔の漁網を細長く染出し尙其間々へ櫻花を路考茶、濃納戸、紅色等にて繧繝模樣に染上げたるもの等隨分華美にて立派に見ゆべし三十前後ならば矢張り友禪縮緬にて淡紫根地に霞を金糸にて刺繡し其間々へ蔦唐草の絞りを染出したるもの或は葡萄鼠地へ尾花を白拔に上げ所々に蝶を絞りにて染出したるもの等至極高尙なり（以上仕立上代價二十圓より二十二三圓位）

△同裝飾品　避暑旅行其他にて一時寂寞を極めし交際社會も本月末より回復し天長節前後へかけて最も往來頻繁となる例なれば貴婦人社會にては本年も已に服裝及び附屬品に意匠を凝らし夫々の準備に忙はしき模樣なるが貴婦人社會に於る洋裝は近年稍衰微せしもの丶如く毎年八月中旬より十月中旬までは府

下の各美術品商店へ高價なる腕輪頭飾の注文多きに反し本年は儀式的の外に此等の調製大に減し滯止、櫛、笄、簪、指輪等に大金を投ずるもの多きは畢竟近來勤儉貯蓄の風潮盛なるに連れて上流社會に於ても經濟上より成るべく永く使用に堪へ得るもの及び常に用途多く場合に依りては作り直すも容易なる上自分使用せざる時は何人に與ふるも用途あるものを好むに至りしもの丶如く尙は帶止の金物は菊或は葡萄などを寶石入の彫刻とし指環は赤磨き又は光澤消しの細輪に大なる寶石を裝ひ櫛笄は遠州形と稱する高尙の形に透し彫をなして寶石を裝へるもの多く其他ダイヤモンド淡紅色のルビー眞珠等は例の如く盛に流行せり

○錦秋女塾　今般本郷區元町二丁目四十八番地に設立したる錦秋女塾は地方より出京せる女學生のため誠實と懇切とを以て保護監督の責に任じ通學の餘

暇本人の志望によりて活花點茶其他女子に必要なる技藝も授くといふ塾主は秋間ため子なり

○美人となるの法　佛蘭西のシンクロスと云ふ婦人は歳取れば歳取る程美顔になつて七十を越えても艶や〱して居るので御亭主も不思議に思ひお前どうしてそうなんだと聞くと婦人『始めて申しますが若い時から年が年中フランネルを冷水に浸して洗つて居るからです一日でも休むとすぐ色が惡くなるので知れて居りますと』答へしとぞ

●●●●●●●

○卷頭の書と畫に就て　本誌卷頭に撮出せる少女の畫は少年畫家にして有名なる東京美術學校教員結城素明氏の筆又たかぬのふの丶歌は高等女子師範學校卒業後十數年來女子教育に從事し且つ書家多田親愛氏の高弟として知られたる東洋英和女學校教師宮里三木枝子氏の揮毫されしものなり

○新刊書目

婦女新聞	一七四、五	東京牛込區東五軒町	婦女新聞社
音樂之友	四卷五	府下北豐多摩郡巣鴨村	樂友社
東京經濟雜誌	一一九九	東京々橋區彌左衛門町	經濟雜誌社
小女界	九	同日本橋區本町	金港堂
小年界	十	同	同
偕行社記事	三〇一	同麹町區飯田町	偕行社
女子新聞	三五	同京橋區有樂町	女子新聞社
商家の友	一八	同同南鍋町	時事新報社
家庭の友	一卷六	同神田區南甲賀町	內外出版協會
文庫	二四卷一	同	同
家庭雜誌	六	同京橋區新湊町	由分社
近畿評論	五六	京都市上京區河原町	近畿評論社
婦人と子ども	三卷九	女子高等師範學校內	フレーベル會
時好	二	東京日本橋區駿河町	三井吳服店
京濱商業新報	八	同神田區北神保町	同
大日本婦人教育會雜誌	一五七	同赤坂表町	同會事務所
實驗教授指南	九	同小石川御殿町	教授法研究會
成功	三	同本郷駒込千駄木町	同雜誌社
運命開拓策	全一册	同	同
四日市學事通報	三三	伊勢國四日市教育會	教育會

締切期限毎月十五日

繪畫募集廣告

募集規定

一應募繪畫は日本畫たると西洋畫なるとを論せず、又流派材料の如何を問はずと雖も、成るべく時期に適合せんことを要す

一其の素畫なると着色畫なるとは應募者の随意なりと雖も、用紙の大さは、縦六寸横四寸に過不足なきを好しとす

一應募繪畫は某畫伯に囑托し嚴密調査の上、其中より一等二等の二種を選拔し、當選者へは本社發刊の書籍を贈呈す

一締切期限は毎月十五日とし、當選繪畫は、翌月十五日發兌の女鑑口繪に挿入して發表すべし

一應募者は左記の切符に住所姓名を記入し、繪畫に貼付し、女鑑編輯局に宛て送付すべし

府縣　市郡　區町村　番地

國光社

女鑑編輯局

附録

軍人の妻

谷子爵夫人談

あはれ、嫁しては良妻となり、入つては賢母となるてふ言の葉の、其裏面には、如何に廣大無邊なる趣味を含むで居るでありましやうか？。如何に深甚なる警告を與へて居るでありましやうか？。頃日記者が市ケ谷門外の谷子爵邸に、夫人くま子の君を訪ひまゐらしたのも蓋し這般の趣味を解し、這般の警告を直感せんが爲めに外ならぬのであります。

▲近頃はいろ〳〵な女學校が興つてまゐつて、學問が大層進んで結構の事でございますが、併し其の風俗が、一般に贅澤に爲つてまゐつたのは、又驚くほどであります。第一學校にお通ひなさる方々の服裝と申したら、木綿の衣物を着てる方は無いぢやありませんか、否、偶々あつても笑はれる程ぢやありませんか。妾の家などでは、常に木綿ものばかりを子供等に着せて居りますが、處が現在孫娘なども、十八歳になつて學校を卒業いたしましたが、此二三年前からは、木綿ものを着やうとは致しませんのです。

『貴女、これはお手織？。』

など丶殊更に云はれますと、何だか慊う嫌な氣になります、これは尤もの事で……。それから又お友達からお友達に

『あの方のお衣服には、何々の裾がつけてあるのよ。』

など、批評を下されますと、つまり木綿物を着て居ると、惡く云はれるやうになるのでございます。下田歌子さんが、先年女學校をお興てになる時にも、そのお話がありまして、斷じて木綿ものを着せる事にする、譯はゞ先づ下婢學校と思つて建てるのだと有仰いましたが、今では少しもそれが實行されて居りません、下田さんの趣意に相違してまゐりました。これは詰り生徒の方から破つて了ふのです。實に贅澤な事になつてまゐりました。

併し、東京は其麽ですが、地方には此頃になつて感心な處が出來てまゐりました。彼の奥村五百子さんの主唱にかゝる、愛國婦人會の事に就て、京都支部から是非來て呉れといふので、奥村さんと御一緒に、先達て行きましたが、其時に妾は木綿の紋付を一枚持つて參りましたが、皆さんは、そりや大層立派にして被往いました、而して京都へ往つて見ますと、驚きました、お入でになつた方々は、皆な木綿物ばかりを着て居られたのです。兎に角、綸子か白羽二重かと思ふものも、皆キヤラコと云つたやうな譯です。實に妾は感心いたして了ひました。ですから其他會の準備とか何とかいふものは、凡て實に能く行屆いたもので、妾は感心の餘り、幹事方に其事をお話した事でありました。

それから妾は京都から歸京し、奥村さんとお別れしましたが、後でお話を聞きましたのに、大阪では、鴻池の奥さんあたりが紬の着物を着す位で、あとは木綿が多いさうでありました。それから和歌山へ參りますと、此處は又京都の通りで、なか〳〵行屆いたもの のなそうです。次に名古屋に就いては斯ういふ事が

ございます。

名古屋に居ります軍人で、上京すれば屹度妾共に來る者ですが、其家には十四五の娘があつて、お父さんと上京する時には、いつも種々土産の注文がありまして、それは此方で求めてやる例のやうになつて居ましたが、丁度今年も五月に上京しましたのに、今度は土産の注文が無かつたといふことでした。それから此方の娘から、手紙を以て、何か注文は無いかと問合せました所が、其返事に、今度は小學校も濟むで、學校も變つた所、學校では、白粉もつけては不可ん、着物も木綿、頭髮にはリボンも挿さぬやうにと制められたから、何にも要りませぬ、たゞ作文の本と、外に何やらを一冊買つて下さい。といふ事を書いてまゐりました、是も妾は感心な事と思ひます、斯ういふ風に漸次にキリつけて往つたなら、三百年でも五百年でも此良風を押通して往けるだらうと思ひます。

地方が既に斯ういふ風であるのに、獨り東京ばかりはたゞ愈よ贅澤になるばかりで、一番不可ません。實に何とかしなければなりません。此事に就ては、奥村さんから先年中も

『是非貴女から世話を燒いて頂かなければ………。』

と始中終妾にお話がありますので、二三の者に話しても見ましたが、到底實行する事が出來ません、自分は家で、自ら機を織りまして手織の木綿物を着て居るが、人樣の事までは思ふやうに世話も燒けませんし、隨つて其實行も六ケしうございます。

それで奥村さんのいふには、せめて愛國婦人會では、上の方々は紬の衣服にして頂きたい、上の方々が紬

なら、我々は木綿が當然、といふ事になると言つて居る事であります。
▲妾の家は、御存じの通りの良人の性質ですし、常に半年といふものは、土佐で過ごして居りますから、萬事妾が行つて居るのです、ですか御覧の通り、家などでも此通りです。此應接室なども、日外他から貰ひ受けた熊の皮などを敷いて置きました。其敷て置くのも實は疊隱しですと、或人に申して笑つた事もあるやうな譯、今はそれも取除けて此通りの有樣です。實に人樣にお耻かしい程です。けれどもこれが谷の家風でございます……。

妾は昔良人が五人扶知を頂いて居る時、嫁いでまゐりましたが、今日も尙其五人扶知の時の通りの心持で居るのです。他所の人樣は、大層贅澤を爲すつて被居るが、實に感心いたすのでございます。自分は下婢の代りまでもして居るのですが、他人程には届きません。他人さんは實にお浦山しうございます。他人の奥樣方は、ヤレお花だ、ヤレお茶だと、其麽事ばかしに贅澤を盡して居られますが、妾は夏冬の差別なく、蠶も飼ひ、機も織りまして多少とも良人の手扶をして居るのですが、夫でも奥さん方には及びません。實に奥さん方には感心致して居ります。

妾は明治四年に、此東京に出てまゐつたのですが、其當時は今日のやうに、斯う贅澤な世の中ではありませんでした。

昔は萬事固く八ケ間しい中にも、鄕里の土佐は殊に固い方で、絹布などはなか〳〵着られませんでした。絹布を着る時は、男女の供を連れた時に限つて、其他は一切木綿でした。それで供を連れず絹布を着たり

しては、直に詮議となる位のものでした。
妾共は十一二歳の頃から、姉と二人で、父から家事の事を任され、それから嫁入をするまで、女中を置かずに行つて來ました。ですから少しも何とも思ひません。何でも五六歳の時分から、綿から糸をひき出すことを教へて貰つたのを記憶へて居ます。

ですから子供を遊ばせるにも、七歳になりますと、決して勝手には遊ばしません風習があるのです。まア今申したやうな、綿を一日に二匁とか三匁とか、糸にする事を稼がなければ遊ばせないのです。

妾は十一の時に、何うも機を織りたくて〳〵、母から、其麽に機が織りたければと小言をいはれ、遂に好で覺えましたが、姉も機が好で、今日になりましても、妾の家にまゐつて機を織るやうな譯で、實に永い習ひとなりました、今から昔の事を思ひますと、今はたゞお金を使ふ事が上手になつたのです。他の方は存じませんが、妾共には今の方はお金を使つた程、なんでも能く出來るものとは思へません。孫娘なども、今は卒業をして、花などを生けるのですが、お婆さんの方が上手だと妾に申します。で何時でも妾が、お婆さんは資本入なしでも斯うだし、孫娘は資本入充分でも斯うだ、といふて笑ふ事があります。その代り今は實に氣が樂です。何家の方でも立派な絹を着ながら、只一人で歩行るのですから………。

▲それで、家庭の教育方に就ても、たゞ嚴しくしたとて不可ませんし、殊に今日の子供は、餘程教育が六ケしいやうです。妾は妾が親から受けた教育に就ては、實に亡き父母に感謝して居るのです。當時は、今とは違つて讀書などの事は其麽でもありませんでしたが、女職にかけては、何もかも受けて來ましたか

ら、今日斯うして行けるのです。そうでなければ、此今の世の中には、なか〳〵行けるものぢやありません。

丁度十三歳の時でした、父が申しますには

『女といふものは、朝、親から起されて、手水や其他の世話を焼かれるやうぢや不可い。お前はもう十歳を越したのだから、親などの起きる前に起きて、而して親の手水其他をあてがふ様にしなければ不可い。』

と、斯様に申されましたが、其當時の事が、今以て眼の前に現はれ、耳に殘つて居ります。而して其翌日からは、父の敎を實行しまして、其癖は今日まで及んで居ります。

七八年前までは、女中も七八人使つて居りましたが、其女中をたゞの一度も、寐て居るからとて起した事はありません。起して使ふといふ事が嫌ひなのです。女中が起きなければ、自分が起きて働きます。

今日では、世の中が變つて來たのですから、子達の性質も變つて居るには相違ありません。ですから、自分が親達に受けた敎育を、今日子供に直に應用する事は出來ますまい。兎に角、今日は子供の敎育方は隨分六ケしい事であります。

▲御感心な事……と申すも恐れ多いことでございますが、彼の佐々木伯御夫婦のお預かりになつて居られる姫宮樣には、五六年此方、養蠶の事に御精勵遊ばして被居います。元來佐々木の夫人とは、妾は至て御懇意にいたして居ります處から、初から蠶の種を差上げて居りますが、毎年〳〵

『今年も谷の婆さんから種を貰へ。と斯の様に宮様が仰有いましてね……。』と、夫人が申され、今年も既に献上いたしましたが、其お手づからお飼ひになつた蠶の糸を、一二年お集めになつて、而して京都へお遣はしになり、織方をお命じになりますが、實に立派な物が出來るのでございますそれから、先達て、西ケ原の方では、何時しか此事を洩れ承はつて、宮様に一度お成をと願出でましたが、日曜日の御運動の傍、親しくお立寄り遊ばしましたが、斯くまで御熱心な事は、實に感服と申すも恐れ入る次第でございます。それから、華族女學校から行く生徒が、西ケ原に百人も出來、教師の中からも六七人まゐるやうな譯で、西ケ原は、宮様のお蔭で、大層評判も良くなり、妾も往つて見ましたが、一同大に悦んで居られました。

又林子爵の御保育申し上げる宮様も、今年から養蠶をお始めになりましたが、林さん御自身が既に其お心得もあり、それに夫人はお亡くなりですが、娘さん(四十歳餘)達がお教へ申し上げるとの御事で、兎に角今年からお始めになりました。

それから、近衛公爵の夫人も、或會の時でございましたが、妾をお呼びなすつて、今年始めて蠶を飼つて見たから、是非一度見て呉れと申され、拜見しましたが、自分の家に序もありますから、共に糸にして差上げましやうと申し上げたところ、其後わざ〳〵繭をお持ちになりましたから、糸にして持つて往つて上げたら

『妾の始めてしたのだから、眞綿位にしかなるまいと云て居ましたのに、まア這麼に立派になつたので

すか。」
と大悦びで被在いました。
上つ方が、段々と斯う云ふ風に御精勵遊ばすのは、國の爲に實に難有いこと丶思つて居るのです。奥村さんも此事を御存知で、何でも公爵さん方を始め、娘達にも、是非、奨勵しなければならんと、勇み悦んで居るのでございます。實に結搆な事と思ひます。
つまり斯ういふ事が段々盛になりますと、前に申したやうな贅澤な事は、何うしても出來ないやうになるのです、縮緬は何から出來るものか、錦は何うして織られるものか、といふ事を知らない者が多いのは、慨はしい事で。此東京などには、桑の木は甚麼ものかを知らない者さへあるぢやありませんか。こ丶に斯ういふ面白いお話があるのです。
極く古くから妾の家に出入りをして懇意にする阿波の者があります、此者が先達て久し振で家へまゐりましたが、其者は今度大阪から、一人の婦人(三味線引き)を伴れて東京へまゐつたのでした。
元來妾の家では、養蠶最中には、妾始め女中も誰も、手織木綿の筒袖を着て居りますのですが、其時その男が三味線引をつれてまゐつて、女を此應接間に待たせて置いて、妾の處へ來て
「奥さん〳〵、そんな筒袖はお廢しなさいまし。見つともない、何うかお着更へ遊ばして、那處に伴れて來て居る女に一度お會ひ下さいまし。其お装では奥さんか何誰か解りませんから……。」
と妾に申しますから、妾が

『お前は何を云ふのか、此筒袖がをかしくつて、奥さんか何か解らなけりや、妾が奥さんだと云つて會ふから構やしない。』

と云つて笑ひながら、その三味線引に會ひましたが、軈て三味線引は、養蠶の有様を見て居て

『あら、此虫が蠶なの？。』

と云ひながら、妙に怖いやうにして居ますから、妾は

『お前さん何を云ふのかい、お前さんが、其麼に、風通だか何だか、其麼に立派なものを着て居ながら、それが此蠶から出來るもんだといふ事を知らないか。』

と、又大笑ひをした事がありました。呆れ返るぢやありませんか。

それから妾共に、今學習院に通つて居る、幼さな子が居りますが、一日歸つて來ましてから

『阿母さま〳〵、今日は學校でね、先生が蠶を見せてくれたの……。』

と申します。家の者が

『お前は疾から蠶は知つてるだらう。』

と申しましたら、

『僕は家で見たから、能く知つてるけれど、他の人は知らない人が多かつたの。』

と申しましたが、斯く學校邊でも、敎へるやうにして來るのは、何より難有い事で、頗る良い事と思ひます。

▲何を申しても、斯う世の中が腐敗してしまつては、たゞもう妾共からは、感心するより他は仕方が無いと云つて置くのです。最早土臺の精神が違うのですから、これから直さなければ不可いのです。ですから、たゞ女子の教育を厳しくしたとて不可い、餘程六ケ敷ものです。妾は常に心配して居る事ですが、此の節の世の中のやうに、女子がヒヨコ／＼して居る樣では、他日實際に家が持つて往けるであらうか何うかと思ふのです。

併し今の世の中にも、なか／＼感心な婦人もないではありません。麑島の方で、海軍々人をして居る田中と申す人の奥さんは、實に家庭教育に長じた方で、感心な者であります。能く妾の家に出入をする者が、御懇意にして居ましたが、其人の話に、實に感心なものです。娘が三人ありまして、上の二人は何れも嫁づきましたが、女子としての教育は、凡て立派に奥さんが仕込んだのですが、其末の娘もお嫁にやる事になつた時に斯う云はれたさうです。其娘は十八歳でした。

『上の娘は二人とも、自分が充分に教育する事が出來たが、那女（末子）だけは少し早い爲めに（結婚が）自分が充分と思ふ程教育が出來なかつた。』

と斯う云はれたといつて、其人が非常に奥さんを稱賛して居りましたが、斯ういふ人も中にはあるのです。兎に角家庭教育と云ひ、又自身の覺悟と云ひ、實に六ケ敷ものであります。

（をはり）

泰西理想婦人談

リギョル博士談
前田越嶺 記

凡そ人が婦人に就いて理想をするときには、其の所謂理想なるものは其人の心事希望等に係る所多きものである。又其の將來の畫策によりても、其の理想する所の婦人は種々樣々になるものである。蓋し將來互に相提携して往かうと思ふ者は、其の目的に副はなければならぬ必要があるからでもあらう。

此點に就て人心を忖度すると云ふことは、士君子の愼むべき所であると思ふ。乍併有體に言へば、人の心の中に立入ると云ふことは、宛も毒水の井戸の内に這入ると同じく、甚だ有害危險である。人心の奥底には隨分邪思汚念があつて、仔細に之を窺ふときには、臭氣紛々として鼻を衝くものである、故に吾人は斯の如き處に理想の婦人を掘出すべきものでないと斷定する。

世故に長け、經驗に富める年長の家父が、其の獨娘の將來を慮る場合、又は嚴正なる家庭に成長し、善良なる敎育を受けた有爲有望の青年が、祖先に耻ぢざる家庭を築かんとて、其の理想に適合する配偶を撰ばんとするときには、往々其處に眞理が包藏せらるゝものである。而も二者孰れに就て判斷を仰がんかと云へば、吾人は前者則ち世故に長け、經驗に富める年長家父の託宣に基くの、遙に安全の道なるを知る

ものである。設令後者を全く排するものでないとしても。

此の定規に從つて、理想の婦人を畫けば、彼の衣裳の美、姿色の美の如き、其人の運命や、年齡に因つて變る所のものは、多く其の理想に加入されぬものである。心靈の美、淑德の美、即ち古今共通、東西一貫なる萬世不朽のものゝみに重きを置かるゝものである。

形貌容姿の如何に係らず、理想の婦人は東西到る處に斯く描寫せらるゝものである。曰く、

『優美閑雅にして、其美は德と隨伴し、温和にして、操守堅く、慈愛ありて義勇に富み、男子之を望めば自然敬慕の念を生じ、理性勝を制して感情閉塞し、情心默して道心盛なると云ふが如く、見る者爲に肅然として愼み、野鄙の念起るに由なき底の淑德高き女性即是れ。』

婚姻は人倫の大道、人生の一大事、泰西に於ては此際人の妻たる者に要求して曰ふ、

『人の妻たる者は謙愼深き貞操、愛らしき賢明、嚴正なる美質、貞淑なる自由、沈默なる堪忍、寡言なる温和、終生不變の誠實なかる可からず。』

嗚呼是れ理想婦人の全面を畵きたる眞理ではありませんか。設令澆季の今日と雖も、歐洲諸國を見聞する者は、今仍ほ此言の一字一劃までも當嵌まれる婦人を認むることが出來る。

吾人之を聞く、某高貴の一青年、獨逸に滯留すること五年、某大尉の家庭に於て日夕其の令閨令妹と交り、歸來一片の誠心より感心していへるには、

『私は世界に此の如き幸福なる家族ありとは、夢寐にだも想像しませんでした。』

讀者注意せよ、幸福なる家族と申しまして、富貴なる家族とは申しません。富貴なる家族は世界に澤山あるが、併しそれが、必ず皆幸福とは言はれません。幸福は富や寶に宿るものではない。徳に在るものである。而して家庭の幸福は重に妻女の淑徳に基くことは、古來經驗の證明する所である。

概して言へば、此種の理想婦人は餘り世に知れて居らない、閨秀の珍ともいふべきものは、進んで見られんことを望む者ではなく、寧ろ退いて見られざらんことを欲する者である。故に餘り外に出で、交際場裡に立つやうなことは少ない。往々は家庭の裡、閨門深き處におとなしく靜な光を放つて居る者である。

乍併此種の婦人は富者の家庭にも無といふ譯ではないが、其の家庭は資財よりも尚一層高貴なるものがあつて、富めども誇らず、大なれど自ら小にする所にのみ限られてある。此の家庭の婦人は家門の榮と身分の貴さとの上に、萬事を優美にし、萬事を高尚にする温雅の淑徳と秀越の才藝とを兼備して居る。是れ實に天來の賜、心靈の寶にして、其の秘訣は務めて人の目を逸するに在る。

時に貧者の家庭、勞働者の家庭にも認めらるゝことがある。併し此の家庭に於ける婦人は往々、正直、誠實、眞摯なる父母の家庭敎育の結果にして、才識技藝に於ては缺る所あるを免れないが、才藝に長じて居る婦人の有せざる道義的特質美を備へて居るから亦以て珍とするに足る可きである、其の眞摯なる心の奥底に愛と勇と忠實の寶を藏して居るは、不思議ではあるまいか。此者の中の或者は不幸にして良夫に遭際せずして、日夕其夫の淩辱や罵詈の下に生活して居ると雖も、何事をも忍び、何事をも和らげ、何事をも慰め、温和、堪忍、克己、献身の誠忠を以て遂に犧牲の野獸をも馴致して、天晴世にも稀なる良人となす

ことがある。斯る家庭に於て妻若し夫に賴したならば、現世の地獄をも現出すべきに幸ひ淑德高き妻の力によりて、地上の天國を現出するのであるから、妻の功は實に偉大といふべしである。

熟ら考ふるに、歐洲の社會に於て、婦人は古來天下に大影響を及ぼしつヽある者である。野蠻時代に在つても婦人は帝王、戰士將校の帷幄に參したことがある。彼の豪漢セザルは、『古代の日耳曼人は婦人に一種神聖の德ありと信せり』といふたが、是は實に婦人頌德の辭の最上最大なるものと見て善からう。由是觀之、婦人崇拜なるものは、歐洲に於て其の遡源する所遠しと謂はなければならぬ。後日暗黑時代が去つて世が文明に赴くに從がつて、婦人の道義的勢力なるものは、日に月に較明顯著と成り來つたのである。歐洲社會、就中佛國社會に優美高尙の印を刻したる者は、婦人の嗜好、婦人の心性、婦人の淑德である事は、萬口一致、如何なる男尊女卑論者と雖も、否定することが出來ぬ事實である、故に若も歐洲に於て淑德ある婦人が一朝にして消失するやうな事があるとすれば、如何程大なる災禍が出來するか測り知れぬのである。

歐洲今日の社會狀態に於ては、婦人がいつも閨門深く鎖して幽房に蟄居しつヽあることを許さない。時には是非とも交際場裡に立つて男子と交り、男子と語ることのあるのは、勢ひの止むを得ざる所である。併し前述の樣な婦人ならば、斯る場合にも堅く貞潔の德を保つて居りますから、自然男子に敬畏の念を抱かしめ、日本人の想ふが如き危險はありません。今日物質的文明進步のみ盛んにして、古代道德の如き殆と支離滅裂の有樣になつて居るが如く思はれましても、苟も志あるの士は斯る淑德の婦人に接して、敬

畏の念を抱かぬ者はありません、故に男子が、かゝる婦人に對する言語に於ても、擧動に於いても、愛の分子よりは敬の分子を多量に顯はし、婦人の品性に逆はぬやう、婦人の貞操に觸れぬやう注意することは、今仍は婦人崇拜國と稱せられて居るに徴しても瞭かである。

佛國有名の辯士ラコルデールは此の淑德高き婦人の潜勢力を巧に言顯して申すには、

『彼の靑年子弟の敗德汚行極まりなき者と雖も、一たび貞操高き婦人に接するや否や、直に己の品性心術の陋劣なるを感じて、粛然戒愼し、端然容を正うするに至る。此種の婦人にして一たび朱唇を開くを見れば、己の醜情摘發せらるゝの思をなし、永く其の面前に停まることすら能はざるものゝ如し。然れども記臆せよ。彼は何者をも畏れず、何者をも敬はず。自尊自重心までをも失ひたる者なり。天下何者か恐るゝものあらんと誇りつゝある者にして、獨り、纎弱なる婦人を畏るゝは何ぞや、彼は尙ほ且婦人淑德の潜勢力を認め、少くも其の面前に於て己の敗德、汚行を隱蔽せざる可らずと自覺すればなり。若夫れ萬事を蔑視し去りて最後に婦人をも蔑視するに至りては、最早文明士人の倶に共に齒するに足らざる者なり、彼は野蠻人なり云々。』

言ふ迄もなく、貴族社會に於ても、平民社會に於ても、凡ての婦人皆此の如き者であると云ふ譯ではないが、泰西に於て理想婦人と稱し來れる者は、槪して此の如き者であると謂ふのである。笑ふが爲め、遊ぶが爲め、樂むか爲めに此の如き婦人は極めて不適當であるは言はずして瞭かである。理想婦人は放蕩無頼漢の定規によつて律すべきものではない。家傳を重んじ、家憲を貴び、祖先の遺業を失墜せざらんこと

をのみ是れ計るところの君子人の高見によつて之を判斷しなければならぬ。余は此の規矩繩墨に準じて、泰西理想婦人の一斑を描寫したのである。

筆者曰、リギヨル博士は本論につきて一人の活ける標本を示して、理想婦人談を確證せられて居る、此の一章には彼の女傑ジヤンダークを引用してあるから、追てに紹介する積りである。



かみかざり

幸田露伴

◎世の味の酸きも辛きも知り盡したる女の申しける。家の外にて優しき男は家の内にて苛酷き男なり。他家にて老實に立働く男はおのが家にて横の物を縦にもせざる男なり。親しみ易くして頼もしげに見ゆる男は、多くは夫としては情無き男なり。俗に言ふ「ぶつきらぼう」の男の、愛想氣無くて近づき難きやうなるに、夫としては頼もしきが却つて多きなり。かゝることは憂き世の浪に身をはふらかして鹹き水をしたたかに呑み、浮きつ沈みつして苦みたる後ならでは心づきかぬることなれば、口惜しくも若き人たちは、あらぬ男を佳きものゝやうに思ひて、自ら幸福少き籤を抽き當つるが少からぬなり。考へても見たまへかし、行ひ正しき男の、女の心を攪るやうなることは有るべからざる筈ならずや。將又女の心を攪らんと欲ふとも、行ひ正しき男ならば、何時、何處にてか其術を學びてあらん。こゝをもて我が言の虚僞ならぬを知り玉へ。

◎無禮無作法の振舞を惡むこと色の黒きを惡み、鼻の低きを惡み、金の少なきを惡むが如くする女、世に多くなりゆかば、世は自から美しくなりゆかん。人の道の爲にし、吾が職の爲にし、欺かぬ趣味のためにする人々を好むこと、美しきを好み、富めるを好のむが如くなる女、世に多くなり行かば、世はおのづか

ら正しくなり行かん。女の心の中の希望と好みとの高さと低さとは、世を美しくも穢らはしくもなし。世を正しくも忌はしくもなす。古へよりの英雄多くは是男子の首魁にして實は婦人の奴隷なり。と或隱士の申されける。

◎或外國の人の申しける。日本の婦人は極めて細なる粧飾を好みて、装飾の本の旨には協はざるものにも貴き價を拂ひたまふこそ心得ね。頃日或貴き人の笄といふものを示されけるを手に取りて見しに、小さなる短き棒の兩端に、黄金の粉其他の貴き材料を、驚くべき精密巧緻の技術もて取りあつかひて、ほと〳〵眼鏡無くては見分け難きばかり細かに美しき景色の畫を現しありしを見出したり。おのれは外國のものゝことなれば、遠慮無く問ひ試みて、其の二つの景色は、いづれも日本の有名の勝地の實を寫したるものにして、一端のは安藝の宮島、他の一端のは陸前の松島を描けるものなる事を知り、且つ又同じ人の有てる櫛に丹後の天の橋立を描けるがありて、其の櫛と此の笄とは、相待つて意匠の完き圏を成すものなる由を聞き知りぬ。おもふに是の如き品の意匠は必ず工夫者の苦心に成り、又た其の圖は名ある畫工の下繪に藉り、其の蒔繪は巧なる工人の少からぬ時間を費して後辛くも一具の装飾品として成就したるなるべし。されど外國に生れたる我等の僞りなき感じより云へば、多くの勞苦は皆益無きことに用ゐられたるを可惜しく思ふのみにして、少しも面白しと思ふこと無し。笄も櫛も黒き頭髪の間に挿さるゝ小なる装飾品にして、特に笄の如きは僅に其の端を露はすに過ぎざるものにあらずや。されば、此等の品に毛の如き細き線、蜘蛛の圍の如き微なる彫刻など施され居るとも、誰かは其の笄に何處の景色の畫がゝれ、其の櫛に

何人の下圖の上され居ることを認め得んや、日本の家の室は小なるを常とはすれども、如何に賓主相近づきて坐すればとて、僅に無名指ほどの太さの笄に描かれたる景色を何處の景色なりと認め得て、さて其の意匠の面白さをまで感歎し得るが如き眼の鋭くて心の細なる人は有り得べからざることなるべし。おもふに多くの人は左ばかりに貴き櫛笄を見ても、たゞ僅に其の蒔繪の黄金色の光りの、黒髪の間に隠見するを認むるに過ぎざらんのみ。若し、我等が此の觀察にして誤らずば、手に取りて視るにあらでは見別け難きほどの纖細過ぎたる細工を笄などに施せるは、無益に材料と勞苦とを費したるに過ぎざる愚なるもの好といふべきならずや。裝飾の本旨は價高きものを身に貼け頭に簪しだにせば宜しといふにはあらず。裝飾の眞の義は、美しきを好む人の情の貴き働きを眼に見ゆる物として現し出すにあり。此故に美しさを添ふるといふことには何の關係も無き精密巧緻なる價高き骨董品を頭に戴くが如きことは、其の人の富めりといふことを現すほかには何の能も無き愚なることなり。香も無き野の花の一輪を、田舍の娘の頭に挿したるだに、或時は其の娘のために美しさを添ふることあり。得難き寶玉もて綴られたる瓔珞を貴き女の戴けるだに、或時は其の人のために美しさを添へぬことあり。裝飾は價高きもの必ずしも裝飾の本旨に協ふにもあらず。また價低きもの必ずしも裝飾の本旨に協はざるにもあらず。さるを日本の都人の富みて貴きは、細工の精きものは必ず好き裝飾品なりといふやうに思ひ誤りて、極めて細なる細工を好むまゝ、裝飾の本の旨には協はざるものにも貴き價を拂はるゝこそ心得がたき事なれ。我等が眼より見る時は、二十歳より四十餘歳に至る間の富める日本婦人は、裝飾品と云はんよりは骨董品といふべきものを頭に戴け

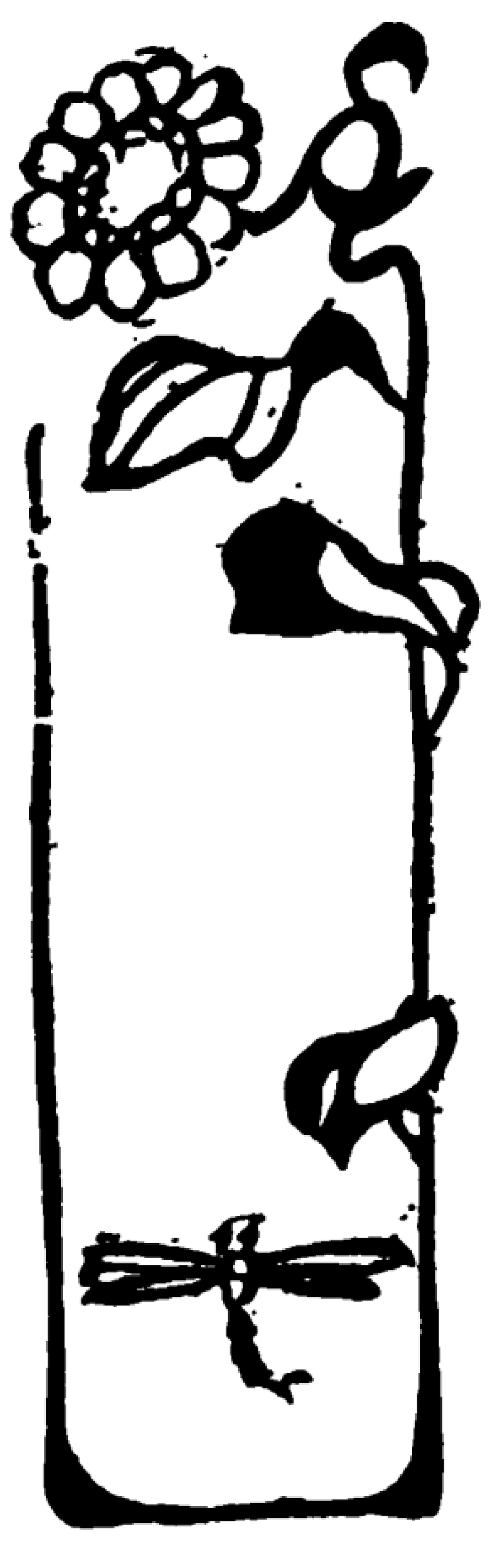
るが多きやうに見ゆ。をかしき事の限りなり。可惜しき事の限りなり。

◎同じ人の申しける。日本の人は男女に限らず、飛白といふものを好みて衣るなり。さて其の飛白の粗きは拙き、細なるは蚊の飛べるが如くなるが、細なるに隨つて其價高しとなり。如何にも之を織ることの難き易きによりて、價の高低は生ずべければ、細なるが高きは道理あることながら、其の細なるを好みて高き價を惜まぬ道理は明らかならず。僅に一間ほど隔たりて望めば殆んど無文の如く見ゆるものを如何なれば日本の人は然ばかり好ましと思ふらん、蓋し日本の紳士貴女は、「我は價貴きものを被たり」といふ「賤しきことに就きての高慢の味」を甘しとするに過ぎたるならずや。いぶかしき事なり。

◎女を大概に分くれば二いろあり。其の一種は空なる榮を好むもの、他の一種は靜なる安さを好むものなり。空なる榮を好むものは、黄金を悦び、寶石を悦び、俳優力士を愛し、美服を纏ふことを好み、美饌を食はんことを願ひ、日に三度も四度も梳るを懶しとはせねど、月に一度二度も針などは手にせず、老いたるを嫌ひ、若きを好き、眉を描くに鏡に對ふことは多けれど、字を習ふに机に凭る日は少く、好んで他の美醜を論ずれども、更に人の賢愚と曲直とを論ぜず、人に阿諛せらるゝを悦びて、我が意を迎へざる人を憎む。此の類の女に或は稀に學を好み、藝を修むるものありと雖も、さるは又嫉妬猜忌の心深く、權勢利祿に思を繫くること甚だ切に、時には人情に近からぬ行ひもすなり。しづかなる安さを好むものは、萬般に憶し勝にて心弱く、親兄を頼む心強きに過ぎて、自己が胸に自己が主張無く、色美しき衣よりは質の強くして長く保つべきを悦び、貯蓄を上無きことに思ひて、物を惜むこゝろ深く、自ら粗糲に甘んじて、

隨つて食膳に奢る人を危ぶみ、自屈に慣るゝ餘り、憚るまじき人にも憚り、自己が心の悦びを表すこと甚だ拙くして、自己が心の悲みを表すことは却つて切實なるため、他人をして愉快を感ぜしむることは少く、人をして陰鬱に陷らしむること少からず。此の類の女に或は稀に世を濟ひ人を益せんとするものありと雖も、多くは、胸狹く才足らず志は餘りありて術は巧なる能はざるまゝ、或は世の惜むところとなり、或は世の誤るところとなるなり。女を鑑るの法先づ此の兩端を熟知して、心中に了々たるに至るより始まると、或人の申しける。

◎車夫の妻は輪聲を聞きたるのみにて我が夫の歸り來れるか、或は然らぬかを判ち知り、漁夫の妻は人顏未だ定かならぬに歸帆の影を望み見て、吾が夫の漁獲の多寡を猜し知る、これを思へば日ごろの心用ゐだに切ならば、人の力にては能し難きほどの事も必ず成し出さるべき筈なりと。世に馴れたる人の申しける。



國光社出版圖書割引劵

注文書名	合計　冊 此代 外に郵送料	申込者住所氏名

切取線

圖書御注文に關する注意

◎割引劵を以て御注文の分（教科書雜誌を除く）に限り定價の**一割半引**を以て**無遞送料**にて御送本可仕候

但し前金御送附にあらざれば送本不仕候

◎市内の御申込は現品引換に代金御支拂相成候とも苦しからず候

◎郵劵代用を以て御送金下され候節は必ず一割增御送附相成度候

◎御注文の御書信は書名編次冊數及び住所姓名等文字明瞭に御記載相成度候

◎御照會は返信用郵劵添付又は往復端書に相願度候未納税不足税の信書は一切請取不申候

◎代金は總て國光社出版部宛御送付被下度候

東京京橋區築地二丁目　株式會社　**國光社**
（電話 特新橋八八八 新橋二六九三番 電信略號九二）

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

●●●●新刊●●●●

佐倉孫三著 **臺風雜記** 半紙判大和綴 定價三十錢 郵稅四錢

森鷗外著 **長宗我部信親** 菊判半切洋裝 定價十錢 郵稅二錢

佐藤天風著 **クレオパトラ** 四六判洋裝美本 定價二十五錢 郵稅四錢

幸田露伴編 **四季物語** 菊判半切總クロース美本 定價五十錢 郵稅六錢

安部正人編 **泥舟遺稿** 菊判大和綴 定價四十五錢 郵稅八錢

遠藤隆吉著 **公民心得** 菊判大和綴 定價三十五錢 郵稅六錢

●九月中●

發行所 東京築地 株式會社國光社

株式會社 國光社發賣書目

國府犀東著 ●靜御前 菊判三切袖珍 定價十三錢 郵税二錢

長田偶得著 ●顔世御前 菊判三切袖珍 定價十三錢 郵税二錢

笹川文學士著 ●本多平八 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢

工藤重成著 ●藤田東湖 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢

小林文學士著 ●勾當內侍 菊判三切袖珍 定價十三錢 郵税二錢

田岡嶺雲著 ●小早川隆景 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢

白河文學士著 ●立花宗茂 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢

濱田文學士著 ●袈裟御前 菊判三切袖珍 定價十三錢 郵税二錢

中內蝶二著 ●大石良雄（新刊） 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢

太田法學士著 ●木村重成 菊判洋裝美本 定價十九錢 郵税四錢

甲 秀輔著 ●徳川の孔明 菊判半切洋裝美本 定價十九錢 郵税二錢

山崎忠和著 ●日露の英雄 四六判洋裝 定價二十錢 郵税二錢

◎

小澤政胤編纂 ●慶長以來國學家略傳 總クロース美本 定價一圓二十錢 郵税十錢

大林弘一郎著 ●中等國文學史 總クロース美本 定價六十錢 郵税八錢

大宮兵馬著 ●國語漢文假名遣ひ法 菊判美本 定價金十八錢 郵税二錢

指原乙子著 ●女子文章軌範 菊判洋裝大和綴 定價金三十錢 郵税四錢

故富士谷御杖述 ●土佐日記燈 菊判大和綴 定價金一圓五十錢 小包料十五錢

大宮兵馬著 ●中等日本文典 菊判總クロース美本 全一册定價金五十五錢 小包料十錢

平野秀吉著 ●國語聲音學 菊判總クロース美本 定價六十錢 郵税八錢

株式會社 國光社發賣書目

◎生田目經德著　標註 雅文消息集
菊判洋裝大和綴　定價金廿五錢郵稅四錢

◎梅澤和軒著　清少納言と紫式部
四六判洋裝大和綴　定價卅錢郵稅六錢

◎華族女學校編纂　國語假名遣ひ一覽
菊判三切折本　定價十二錢郵稅二錢

◎福本日南著　筑前志
總クロース金字入最上美本定價一圓二十錢小包料十錢

◎高等師範學校附屬小學校編纂　茗溪叢書 學校生活
菊判洋裝　定價金二十錢郵稅四錢

◎岡部時二郎、森田廣吉共著　敎育適用 舞踏遊戲法
菊判洋裝　定價二十四錢郵稅四錢

◎西圭一、[illegible]本衛佐美合著　海軍遊戲法
菊[illegible]判洋裝美本　定價金二十錢郵稅四錢

◎第五回內國勸業博覽會　出品調查概況
菊判洋裝　定價十五錢郵稅四錢

◎高橋正熊、福岡秀猪共著　中等 法制經濟教科書（全二册）
總クロース美本　各定價六十錢　郵稅六錢

◎

◎鈴木龜[illegible]著　實[illegible]地科教授法
菊判クロース金字入　全一册定價金五十錢郵稅八錢

◎國光社[illegible]　抄[illegible]獨逸讀本
菊判洋裝美本　定價二十錢郵稅四錢

◎澁谷愛著　萬國女子風俗（新刊）
四六判洋裝　定價廿五錢郵稅四錢

◎寺內淳二郎著　奢侈亡國論
菊判半切　定價郵稅共二十三錢

◎弘田正郎編　豪吟集
寸珍美本　定價八錢郵稅二錢

◎村上濁浪著　鐵血宰相語錄
四六判洋裝　定價卅錢郵稅四錢

◎宮崎滔天著　三十三年の夢
菊判洋裝　定價卅三錢郵稅六錢

◎藤野天城著　女子小觀
四六判洋　定價廿錢郵稅四錢

◎松川霓州著　結婚と家庭
菊判三切袖珍　定價十五錢郵稅四錢

株式會社 國光社發賣書目

- 塚原澁柿園著 ◉**山崎合戰** 菊判洋装美本 定價卅九錢 郵税六錢
- 堀内新泉著 ◉**女樂師** 菊判洋装 定價卅五錢 郵税六錢
- 塚原澁柿園著 ◉**小牧合戰** 菊判洋装 定價五十五錢 郵税十錢
- 紅塵庵俗禪譯 ◉**獄之花** 總クロース美本 定價五十五錢 郵税八錢
- 堀内新泉著 ◉**少女讀本** 雪月花 各卷 菊判洋装 定價十八錢 郵税四錢
- 山崎忠和著 ◉**文久物語** 菊判洋装 定價廿八錢 郵税六錢
- 高瀨魁介編纂 男爵澁澤 ◉**最近實業談**（新刊） 上製七十錢 並製六十錢 郵税十錢
- 石田凝郎著 ◉**水産製造論**（新刊） 總クロース美本 價一圓二十錢 郵税十錢

- 北海道拓殖課 ◉**北海道殖民圖解** 菊判洋装 定價八錢 郵税四錢
- 中村佐平著 ◉**銀行簿記學** 菊判クロース金字入美本 定價五十錢 郵税六錢
- 須田每六著 ◉**銀行利用法** 菊判洋装美本 定價四十五錢 郵税六錢
- 品川彌三郎、平田東助共著 ◉**信用組合提要** 菊判洋装 定價五錢 郵税二錢
- 平田東助著 ◉**商工經濟論**（全二册） 總クロース美本 定價一圓八十五錢 郵税十錢
- 濱口吉右衛門著 ◉**財政と國力** 判洋装 廿三錢 郵税四錢
- 岡勇二郎著 ◉**日本米穀の將來** 菊判洋装 定價卅錢 郵税六錢
- ◉**國際貿易論** 總クロース美本 定價六十錢 郵税八錢



御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

衛生無毒 クイーン白粉

皮膚艶美 クイーン水



明治三十六年九月十五日發行　毎月二回一日十五日發行　第拾參年第拾八號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷